

TOHOKU GAKUIN ARCHIVES CENTER

東北学院史資料センター年報

LIFE
LIGHT LOVE

Vol.9
2024.3.1



2022年度公開学術講演会

「日本のろう教育における東北学院同窓生のはたらき

～高橋潔・大曾根源助を中心に～」から

「聴覚障害生徒用日本語学習ソフトの共同開発」

「大阪市立聾唖学校における東北学院卒業生群像」

「わが国ろう教育の曙光と大阪市立聾唖学校

～高橋・大曾根からのメッセージ～」

遠藤 良博

高間 淳司

前田 浩

寄稿

「東北学院の神学について—東北学院神学部と

ユニオン神学校、ランカスター神学校との結びつきから」

「東北学院大学入試の歴史（2）1984～2020」

「押川方義の「高橋伝五郎伝」（英文）

—イーデン神学校での資料調査から—」

「自校史教育を通しての報告文作成指導

—授業科目「東北学院の歴史」を事例として—」

藤野 雄大

齋藤 誠

日野 哲

齋藤 誠・伊藤 大介

2023年度行事紹介

2023年度公開シンポジウム「東北学院の夜間教育を考える」開催報告

CONTENTS

あいさつ

『東北学院史資料センター年報』第九号の刊行にあたって	院長 大西 晴樹 ……………	1
----------------------------	----------------	---

2022年度公開学術講演会

「日本のろう教育における東北学院同窓生のはたらき ～高橋潔・大曾根源助を中心に～」から

「聴覚障害生徒用日本語学習ソフトの共同開発」	遠藤 良博 ……………	2
「大阪市立聾唖学校における東北学院卒業生群像」	高間 淳司 ……………	9
「わが国ろう教育の曙光と大阪市立聾唖学校 ～高橋・大曾根からのメッセージ～」	前田 浩 ……………	27

寄稿

「東北学院の神学について—東北学院神学部と ユニオン神学校、ランカスター神学校との結びつきから」	藤野 雄大 ……………	37
「東北学院大学入試の歴史(2) 1984～2020」	齋藤 誠 ……………	48
「押川方義の「高橋伝五郎伝」(英文) —イーデン神学校での資料調査から—」	日野 哲 ……………	61
「自校史教育を通しての報告文作成指導 —授業科目「東北学院の歴史」を事例として—」	齋藤 誠・伊藤 大介 ……………	76

2023年度行事紹介

2023年度公開シンポジウム「東北学院の夜間教育を考える」開催報告 ……………	86
---	----

受贈資料一覧(2023年2月～2024年1月) ……………	89
-------------------------------	----

東北学院の沿革 ……………	90
---------------	----

『東北学院史資料センター年報』 第九号の刊行にあたって

院長 大西 晴樹



2023年度は、五橋新キャンパスの開学による「アーバン・ワンキャンパス」の実現、時代の要請、地域の課題解決のための新設四学部の開設と、東北学院にとっては、百年に一度の大改革の年であり、大きなイベントが続いた年でもあった。その陰で史資料センターでは、2036年の創立百五十年に向けて、百五十年史編纂委員会の事務局活動が開始され、2024年度には、実際の編纂委員が加わって編纂室が立ち上がり、いよいよ編纂事業がスタートする予定である。

史資料センターには、「東北学院史」という冠がついているので、その活動は年史の編纂事業へと当然シフトしていくが、2つほど、留意点を述べておきたい。東北学院の歴史は、1886年の仙台神学校の創立以来続く建学の精神、すなわち、「キリスト教による人格教育」という変わらない経糸（たていと）と、'North Japan College'、すなわち、時代の変化の中にある東日本を代表する中等高等教育機関という緯糸（よこいと）とが織り合され、紋様が形成されている歴史でもある。時代の変化という意味では、創立から15年戦争の敗戦まで続いた男子のミッション・スクール時代、戦後大衆への高等教育の普及による発展の時代、そして、20世紀末葉からの情報化、グローバル化、少子化に対応する挑戦の時代という区分も可能であろうが、設置各校の変化を明確に映し出す歴史叙述を期待したい。学部新設の過程で分かったことだが、時代が変化すればするほど、教育研究実施組織である学部・学科はこれまでのように単一の学問（ディシプリン）から脱却して、文理融合の学際領域、複合領域にまたがり、学問の系統樹が

次第に曖昧になる傾向が強いためである。東北学院における学問の発展という意味で、神学、文学、商学、工学からスタートした東北学院の学問の系統樹が可視化できるような記述であることを願っている。

もう一つの留意点は、編纂事業は出版まで十数年に及ぶ長丁場なことである。また前回の『百年史』は、日本の学校史の中でも群を抜く3巻本もの重厚な年史であった。幸い、2017年に『東北学院の歴史 LIFE LIGHT LOVE』という要約本が出版され、生徒、学生、新入教職員にも読み易いものとなっている。そこで、出版までの間、「東北学院デジタル・アーカイブズ」を作成して、HPにアップし、視聴覚に訴えながら、生徒、学生、教職員、卒業生に学院史の特徴を紹介していったらどうだろうか。予告編にもなり、宣伝効果も高まるであろう。

最後になるが、これからスタートする編纂室に期待したい。



聴覚障害生徒用日本語学習ソフトの共同開発

宮城県立聴覚支援学校
遠藤 良博

はじめに

高橋潔先生は我が国の聾学校が口話教育全盛になった昭和の時代に、たった一校だけ手話を守った大阪市立聾啞学校の第6代校長です。高橋潔先生の偉業は山本おさむの漫画『わが指のオーケストラ』に詳しいので、ご覧いただければ幸いです。なお、高橋潔先生は南材木尋常高等小学校（現仙台市立南材木小学校）を卒業されていますが、現在そこには難聴学級があるのは奇遇です。

大曾根源助先生は高橋潔先生の命でアメリカに渡り、ヘレンケラーに会い、「日本の指文字」を作った大阪市立聾学校の第7代校長です。その時のコミュニケーション方法が「サインタッチング」。「触手話」です。会場で盲ろうの石黒昌道先生（宮城県立ろう学校小学部卒業・元栃木県立聾学校教諭）に通訳していたコミュニケーション方法です。

高橋潔先生と大曾根源助先生、この聾教育界の偉人のお二人が宮城県出身であること、そして東北学院の卒業生であることが宮城県の県民の皆様にもあまりにも知られていません。皆様と共にお二人の偉業を学び、またそれに続く新しい取り組みについても紹介したいと思います。

(1) 大阪と宮城のつながりを考える

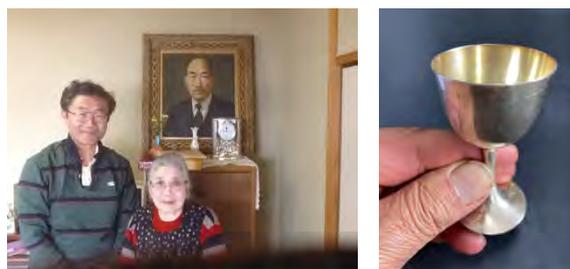
私が高橋潔先生と大曾根源助先生のことを知ったのは山本おさむの漫画『わが指のオーケストラ』を読んでからです。多くのみなさんも同じではないでしょうか？『わが指のオーケストラ』は川渕依子さんの『指骨』という本が原作になっています。なお、川渕依子さんは高橋潔先生の養女です。

実は、私は高橋潔先生の娘さんの川渕依子さんに



徳島のご自宅でお会いしたことがあります。東日本大震災の数年後に「卒業生への支援活動でたいへんだったね」と、大阪市立聾学校の前田浩先生に四国旅行のお誘いを受けて、川渕依子さんに会うことができました。しかし、その後、1ヶ月もしない内にお亡くなりになりました。

その後、私は大阪市立聾学校の第22代校長吉田敏朗先生より高橋潔先生の遺品の銀杯を譲り受けました。「高橋潔先生と奥様の醜子さんがこの銀杯を手で二人でお酒を嗜んでいたかもしれませんね。」と吉田先生は話していました。



(2) 全国聴覚障害教職員協議会

思えば1994（平成6）年8月宮城県の松島で「全国聴覚障害教職員協議会」が結成されたことに始まります。



昭和の時代、口話教育が全盛になって、手話を使う聞こえない先生方がたくさん退職に追い込まれました。それでも聴覚障害の先生方は生き残り、ついに1994年になって、宮城県松島で「全国聴覚障害教職員協議会」として旗揚げしました。

全国聴覚障害教職員協議会の初代会長は前田浩先

生で大阪市立聾学校の先生。2代目の私は宮城県立ろう学校。3代目の堀谷留美先生も大阪市立聾学校の先生。大阪市立聾学校の先生方には高橋潔先生や大曾根源助先生から綿々と続く聾教育を引っ張るものすごいパワーというかエネルギーを感じるの私だけではないと思います。

(3) 「宮城県立盲啞学校開校」と「高橋潔先生 大阪市立聾学校赴任」は年度が同じ奇遇

ところで、私の勤務する宮城県立聴覚支援学校は、1914（大正3）年5月15日に宮城県立盲啞学校として開校しました。当時、聴覚障害の先生方が手話を使って子どもたちに授業していました。そして今年創立109年目の歴史のある学校です。

が、ここで注目していただきたいことは、高橋潔先生が大阪市立聾学校に勤務した年度も1914年4月なのです。映画「ヒゲの校長」は、「フランス音楽留学を諦めた一人の若者が仙台から大阪盲啞院にやってきた。」から始まります。

さて、手話を使う教育を始めるには全国共通の教科手話が必要です。私は中学理科の教員です。全国の聞こえない理科の先生5人と一緒に『理科の手話～用例集』を作りました。



現在、国語、社会、数学、生活などの教科手話も含めて、『学校の手話』として特定非営利活動法人「ろう教育を考える全国協議会」から出版されています。『学校の手話』は編集者のほとんどが聴覚障害教職員です。

(4) 日本語学習ドリルの作成へ

『学校の手話』の整理がなされてきていた折、2011（平成23）年3月11日に東日本大震災が起きました。約2万人の方が犠牲になりましたが、障害者の死亡率は健常者の2倍であったといいます。

東日本大震災聴覚障害者救援宮城本部に入った私は被災地に支援物資を渡して回りました。そこでは

宮ろうの卒業生が日本語がわからず、いろんなことから後回しにされているなど、苦しんでいる姿が目に入りました。

また、震災後の宮城県立聴覚支援学校でも玄関にこのような掲示が出ていました。



中学部の生徒が言ってきました。「先生に断って？」って先生を断る？？。「おとなと一緒に？」って先生を断って誰と一緒に？？。戸惑いの言葉が出ました。日本語の本当の意味が理解できていないのでした。

そこで、宮城県立聴覚支援学校中学部の研究テーマを「日本語を正しく身につけること」に絞りました。中学部では「教科学習以前に正しい日本語、特に助詞が身につかないこと」や「生徒同士のコミュニケーションがスムーズにできないためケンカ等のトラブルになること」から、生徒一人一人の実態に合わせて、正しい日本語を身につけさせるために6つのグループに分けて指導を始めました。

2011年、大震災の年の8月には前田先生たちと全国聴覚障害教職員協議会で『365日のワークシート』を発行しました。自立活動の充実を図るため、聴覚障害教職員の経験を集結したものです。「手話 日本語 障害認識」について毎日ワークシートをすることで聞こえない子どもたちの力をつけようという願いがこもっています。



また、日本語で困らない生徒にしたいという願いを込めて目で見える日本語学習ドリル『みるみる日本語みるくくるみの大ぼうけん』（小学生向け）、目で見える日本語学習ソフト『みるみる日本語みるくくるみの大航海』（中学生・高校生向け）も刊行しました。

(5) WEB日本語学習ソフトの作成へ

宮城県立聴覚支援学校で、東日本大震災の前年に、中学部の同僚の中村健市先生（東北学院大学工学部卒）から紹介されたのが東北学院大学工学部准教授の岩本正敏先生（東北学院大学工学部卒業、大学院修了）でした。岩本先生はちょうど**創造性を重視した教育用ロボットの開発**をなさっていました。仙台市科学館や小中学校で子どもたちにロボット工学の楽しさを指導していらっしゃるどころでした。



学校では上位の生徒と下位の生徒の日本語の差が開くばかりで危機感を募らせました。「日本語に強い聴覚支援学校」を作ろうと祈念し、大震災の年の2011（平成23）年から東北学院大学工学部岩本正敏先生の協力を得、「WEB日本語学習ソフト」を作成し始めました。



全国聴覚障害教職員協議会 = 「本」、宮城県立聴覚支援学校 = 「ソフト」の同時並行で進めていきました。

①助詞には意味があることを明確にするために、「助詞を変えると意味が変わる」例を集めて、WEB日本語学習ソフト『助詞を変えよう』を考案しました。助詞を入れ替えると意味が全く変わってしまう

例をゲーム感覚で学ぼうと言うものです。



主格の「が」、対象の「を」、手段の「で」、移動方向の「に」を目でわかるようにしたいと願い、子どもがイメージできるように、【聾教育100年の課題】とも言われる「助詞」をイラスト化でイメージ化しました。さらに、「みるくとくるみの大冒険」（全聴教）で考案した『助詞キャラ』を考案し、「助詞には意味がある」ことをはっきりさせました。

②助詞学習ソフト『龍太郎の「をに」退治』は、25のカテゴリーを1～5のレベルに分けて学ぶものです。



約250問あり、小学1年から小学5年の間に学び終えることが理想だと考えて作成しました。

また、助詞の習熟順序を並べて「殿がお出に！」も考案し、目でわかるイラストで学べるように工夫しました

③動詞学習ソフト『ドーシーのお化け退治』も25のカテゴリーを1～5のレベルに分けて学べるようにしてあります。約250問あり、幼稚部から小学5年までに学び終えることが理想だと考えて作成しました。



特に、自動詞と他動詞については、1対1にして比較して学べるように工夫しました。

例えば、「入れる」と「入る」は同じ漢字ですが、「いれる」と「はいる」で読み方も意味も違います。また、「出す」と「出る」、「消す」と「消える」も同じ漢字を使いますが、読み方も意味も違います。

年配のろう者が使っている手話表現がイラスト動画(GIF動画)で入れてあるので、手話も使いながら婉曲的な言い回し方を仲間同士で楽しんでいきます。そして手話通訳者からの検索も多いです。

④慣用句の学習ソフト『カンヨウケン』は直接的な言い方しかできない子どもたちのために、日本語の独特な比喩の言い回しである慣用句の練習ソフトです。聴覚障害者には【9歳の壁】があり、直接的な言い方だけでなく、9歳からは比喩的な言い方、婉曲的な言い方を学んでいくのに、聴覚障害者には乗



り越えにくい壁があると言われてしています。その壁を乗り越えるための練習として最適だと思い、作成しました。

例えば「手を切る」はそのまの意だと本当に「自分の手を切る」になってしまい、すごく怖いですが「手を切る」の慣用句としての本当の意味は「人や物事との関係を絶つ」ことです。

⑤聴覚障害者が身につけにくい敬語の使い方について、練習用に『THE ROAD OF K5』を考案しました。敬語を5つのカテゴリーにまとめ、自分で選択して学んでいけるようにしました。



特に「K3 尊敬語と謙譲語」では、二つを対比し、イラストで目で見てわかるようにしました。

敬語を5つのカテゴリーにまとめ、自分で選択して学んでいけるようにしました。

「言う」の場合の尊敬語は相手を上げて言う言い方なので「おっしゃる」。謙譲語は自分を下げて言う言い方なので、「申し上げます」。



また、コンビニに行って…、レジでいろいろ言われますが、聴覚障害者は何と言っているか、さっぱりわからない。これまで適当にうなずいてやり過ぎてきました。でも、時々わからなくて苦しみます。自分も苦しいけど、店員さんも苦しい。そうだと逆転の発想をしよう！「コンビニの店員になろう(模擬授業)」も考案しました。コンビニの店員がどんな言葉遣いをしているのかを、自分も経験して見ようと思って考案しました。

「WEB日本語学習ソフト」で「正しい日本語の基本」を学び、さらに学校生活の隅々まで、「比喩」や「敬語」を使える学習環境に改善していければと願いました。

2020（令和2）年3月から新型コロナウイルス感染症で全国の学校は3ヶ月間の休校を余儀なくされました。

そこで、本校のホームページに「WEB日本語学習ソフト」を掲載し、自主学習を呼びかけました。

本校の児童・生徒だけでなく、北海道から九州まで多くの聴覚支援学校や難聴学級などの子どもたちからたくさんのアクセスが増えて非常に驚きました。



幼稚部や小学部の先生方と協議を重ねて作成したのが『オノマトペ』『ことわざ』『四字熟語』などの学習ソフト。



『オノマトペ』は聴覚障害者が聞こえないために非常に苦手とするところでもあります。幼児期から学べます。例えば「痛みのオノマトペ」では、保健室に行って自分の痛みを保健の先生にどう伝えるかが学べるようになっています。



これらの学習ソフト作成に協力して下さった東北学院大学工学部岩本研究室の卒業生は約30名ほどいらっしゃいましたが、中には宮城県立聴覚支援学校の第13代校長佐藤勉先生のお孫さんの佐藤春樹さんもおられました。



佐藤勉校長先生



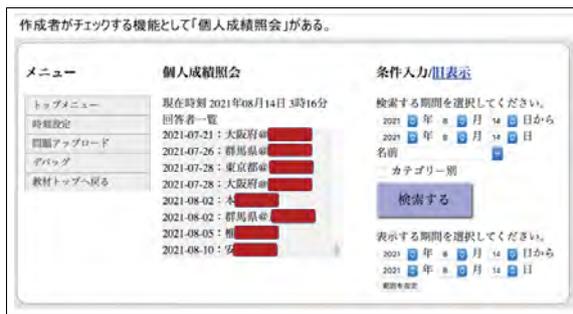
2016アプリ開発 佐藤春樹さん&猪狩和哉さん

そこでの工夫は次の通りです。

- (1) 問題画面の動画化と解説画面の動画化。
- (2) 解説動画をしっかりと見るための工夫。
(ランプが点灯するまで継続表示)



(3) 履歴から学習状況が把握できる。



No.	問題ID	問題名	問題内容	問題タイプ	問題状態
1	2021-08-15-001	1	問題1: 問題1の内容	問題1	問題1
2	2021-08-15-002	2	問題2: 問題2の内容	問題2	問題2
3	2021-08-15-003	3	問題3: 問題3の内容	問題3	問題3
4	2021-08-15-004	4	問題4: 問題4の内容	問題4	問題4
5	2021-08-15-005	5	問題5: 問題5の内容	問題5	問題5
6	2021-08-15-006	6	問題6: 問題6の内容	問題6	問題6
7	2021-08-15-007	7	問題7: 問題7の内容	問題7	問題7
8	2021-08-15-008	8	問題8: 問題8の内容	問題8	問題8
9	2021-08-15-009	9	問題9: 問題9の内容	問題9	問題9
10	2021-08-15-010	10	問題10: 問題10の内容	問題10	問題10

学習ソフトの作成者が見られる個人成績照会もあります。作成者から個人に間違いの理由や日本語力の習熟度を届けることも可能です。それを使うことで、自分自身で確認しながら学習を進めることができます。

これらのソフトの特徴は、ブラウザベースでできるアプリなので、iPadやAndroid、WindowsやMacなど機種に依存せず実行できるところです。また、使った状況や苦手なところもわかるのも特にコロナ禍では有効でした。

問題のデータをエクセルで作成して組み込んでいます。また、問題の画像のデータや指南書（説明）をGIF動画でも配置できる点は、Googleのフォームより問題作成に関して自由度が高いものでした。

本校では中学部の「助詞」「動詞」「慣用句」グループはじめそれぞれのグループが週1回1年間かけて使っていますが、着実に日本語の力がついて行くことが個人成績照会からわかります。また、小学部の自立活動でも使われるようになったことで日本語がわからない子どもは格段に減って来たと感じます。

さらに、WEB教科学習ソフト「理科」も作成中です。



これらの学習ソフトは手話を使って日本語を身につける取り組みでもあります。高橋潔先生や大曾根源助先生の手話や指文字を大事にしてきた種が、全国聴覚障害教職員協会をはじめ全国各地にまかれ、宮城の地でも新しい技術を取り入れながら続いているのではないかと思います。

おわりに

新しく作ることは大変だが、壊すことは一瞬です。WEB学習ソフトを有効活用した指導計画の作成や多様な発達段階に応じたソフト開発、そして何よりも「新しいチームとしての継続活動」など、今後の大きな課題です。これまで聾教育の発展のために東北学院様よりいただきましたご理解とご協力に心より感謝申し上げます。高橋潔先生、大曾根源助先生の歩まれた足跡を胸に、今回は東北学院大学工学部岩本正敏元准教授に多大なるご指導・ご鞭撻をいただきましたが、今後とも聾教育の益々の発展のために東北学院様のご理解とご指導、ご鞭撻をいただければと心より祈念するばかりです。



2023年12月10日
滋賀県琵琶湖畔の高橋潔先生の「指骨」のお墓。
全聴教歴代会長（左から初代会長前田浩、二代遠藤良博、三代堀谷留美、四代木村美津子、五代松本大輔） 敬称略

追記(1) 2015年、岩本正敏先生は宮城県立聴覚支援学校小学部佐々木英人教諭と共に、「発音・発語の語音を自ら修正できる力を育てる指導の工夫」をテーマに、構音指導のための「簡易Sインジケータ」を作成しています。



左が簡易のS-インジケータ
本来のインジケータは、単2の電池が6個必要で大きくて重いため、持ち運びには不便

また、2019年には音声認識ソフトを用いた「岩研スピーチトレーナー1・2・3」を開発しました。「母音」「子音」「擬音」「挨拶」の練習用です。



「スピーチトレーナー」マイクに向かって発声している様子

追記(2) 2023年に岩本正敏先生はいわき短期大学（元宮城教育大学（特別支援教育分野））武井眞澄先生の要請により、盲ろう者用の「点字キャット」の共同開発をしています。点字の学習、盲者とのコミュニケーションのために開発されたもので、WEB上で実行できるので、機種に依存せずにできるものです。



「点字チャット」の表示画面

参考
B) いわき短期大学（元宮城教育大学（特別支援教育分野））武井眞澄氏の要請により共同開発したコミュニケーションツール

遠藤 良博プロフィール

ENDO, Yoshihiro

1957年宮城県白石市生まれ。新潟大学農学部卒、民間企業研究職を経て1985年宮城県立ろう学校教諭（中学理科）、現在に至る。全国聴覚障害教職員協議会2代会長。業績として、第20回宮城県公益信託今野芳雄賞功績賞「長年にわたる聴覚支援教育への貢献」、ろう教育を考える全国協議会『学校の手話～理科』『学校の手話～生活』編集、宮城県立聴覚支援学校HP『WEB日本語学習ソフト』東北学院大学工学部との共同研究、など。

大阪市立聾啞学校における東北学院卒業生群像

大阪府立中央聴覚支援学校

高間 淳司

I はじめに

本稿では、大阪市立聾啞学校に奉職した東北学院の卒業生について取り上げる。まず、舞台となる大阪市立聾啞学校について概観していきたい。同校は、盲者であった大阪の豪商の五代五兵衛により、1900（明治33）年に浄久寺本堂を仮教場として開校した私立大阪盲啞院を前身とする。1907（明治40）年には大阪市への移管が達成され、1923（大正12）年には盲学校及聾啞学校令を受けて「大阪市立聾啞学校」と改名した。開校後7回の校舎移転と5回の校名変更を経て、現在地は1948（昭和23）年に移転した大阪市中央区に位置し、現校名は2016（平成28）年大阪府への移管により大阪府立中央聴覚支援学校となっている¹。時代の変遷に合わせながら位置や校名が変わってきた経緯があるが、本稿では特に断りの無い限り、東北学院卒業生が特に活躍した時代である「大阪市立聾啞学校」の校名で進めていく。また、当時は「聾啞児」「聾啞教育」という用語が使われていたが、引用文章との整合性を確保するために、本稿でもこの用語を使って進めていくことにする。なお、「聾啞」「手真似」といった用語は差別的な意味を含む場合があるが、そうした意図は無いことを断っておく。またこの時代の論文や文献は旧字体で表記されることが多いが、これを引用するときは新字体に改め適宜句読点で補い読みやすくするようにした。

では、大阪市立聾啞学校に奉職した東北学院の卒業生はどのような教育者であったのか。きこえない聾啞児に対してどのような教育を展開してきたのか。彼等の果たした功績を理解するためには、当

時の聾啞児を取り巻く時代背景がどのようなものであったかを知るところから始めていくことにしたい。

II 当時の時代背景について

本章では、大正時代から昭和時代前期における聾啞教育の時代背景について述べていきたい。この時代は聴覚障害教育で歴史的ターニングポイントにあり、聞くことや話すことを主に用いる「口話法」という新しい手法が確立し台頭してきた時代である。口話とは、聴覚障害があっても、口の動きや表情、読唇（口の形や動きから読み取る）から相手の話の内容を読み取らせることで「聞くこと」を補完する。また、発音の見本を観察したり喉、鼻や口からの息を手で感じたりして発音の仕方を理解し、それを模倣して正確な発音を習得させることで「話すこと」を補完する。この双方向の補完により、聾啞児であっても音声でのコミュニケーションが可能とされた。難聴の場合は、残っている残存聴力を最大限に活用することで、より口話の効果を高めることが期待された。この口話を聾啞児に施し定着させることが口話法の目的とされ、言葉を教える言語教育の一手法として、手指を主とする手話法と共に言語教育の双璧をなしたのである。しかしながら口話法は大正時代に突然登場した訳ではない。その歴史は聴覚障害教育の黎明期から既に始まっていたのである。

II-1 手話法との共存から口話法の台頭へ

日本における聴覚障害教育の事始めは、1878（明治11）年に京都市中京区に設立された京都盲啞院²である。待賢小学校の訓導であった古河太四郎が校

¹ 現在の校名は大阪府立中央聴覚支援学校。校名の変遷は、1900（明治33）年私立大阪盲啞院、1907（明治40）年市立大阪盲啞学校、1919（大正8）年大阪市立盲啞学校、1923（大正12）年大阪市立聾啞学校、1948（昭和23）年大阪市立聾学校、2009（平成21）年大阪市立聴覚特別支援学校、2016（平成28）年現校名。

² 現在の京都府立聾学校。校名の変遷は、1878（明治11）年京都盲啞院、1879（明治12）年京都府立盲啞院、1889（明治22）年京都市立盲啞院、1925（大正14）年京都市立聾啞学校、1931（昭和6）年京都府立聾啞学校、1932（昭和7）年京都府立聾学校。

長となり、生徒58名の視覚障害児や聴覚障害児を集めて教育が開始された。この時はまだ口話法と手話法の区別をせず指導する考え方が主であった。同年に文部省が発行した教育雑誌第64号付録に掲載された論文『京都府下大黒町待賢校瘖哑生教授手順概略』の中で古河は、聴覚障害児の指導方法として手勢法を紹介しており、これは手話や手真似、指文字といった手指を用いた言語指導の方法を指している。その一方で、同手順概略の中で発音発語の章を記し、発音の仕方を表情と口形で表す発音起源図や発音の口の動きを記号で表す発音視話法を創出する。手話も口話も掲載する古河の言語教育観について、岡本（1997）は、古河の言語教育観を「東洋的な精神・身体一元の自然観から口話と手話は融通無碍、有機的な一体の『口話共話法』」であるとし、口話と手話を特に区別をせずにあらゆる方法の一環として指導していたとしている³。東京でも楽善会訓盲院⁴が1880（明治13）年に創立された。その後身となる東京盲哑学校と東京聾哑学校を合わせて30年超も校長職にいた小西信八は、1896（明治29）年冬から1898（明治31）年に欧米視察した結果を1907（明治40）年の講演会で発表する中で、手真似を全面的に禁じることは理想としつつも、聾者に口話を強いることは日本語を使わずドイツ語で話せと言うことと同義であり、手話の完全禁止には懐疑的な立場だった⁵。また同院の発足当初は口話法を導入しつつも、その効果が思うように得られず、どちらかといえば京都盲哑院の古河の指導法である手勢法（手話法）が主流であった⁶。加えて小西は、聾者が聾者として生きることは有意義ととらえ、聾者の団

体組織化、福祉の向上、聾者同士の交流や結婚を促進させるためにも、手話は重要な言語だと認識していた⁷。そして、京都・東京の盲哑院のみならず、以後に設置された学校も両校の方法を踏襲していった⁸。このように、日本の聴覚障害教育の黎明期において、京都の京都盲哑院、東京の楽善会訓盲院を始めとする聾哑学校では、口話法も手話法も特に区別せず聾哑児に言語を教える一手段として活用されていたのである。

大正時代から昭和初期にかけて聴覚障害教育が発展していくと、こうした手話法と口話法の共存していた関係図はがらりとその様相を変えることになる。特に1920年代は、多くの要因により口話法の存在感が際立つことになった。その要因としては、キリスト教伝道のため来日していたアメリカ人宣教師ライシャワーが口話法を行う日本聾話学校を1920（大正9）年東京に開設したこと、盲・聾教育の研究のために1922年（大正11）年から2年間欧米視察した川本宇之介が、帰国後東京聾哑学校の訓導となり口話法を広く紹介したこと、滋賀の西川吉之助が外国の専門書を基に失聴した三女はま子に口話教育を施した成果から、1925（大正14）年に「口話式聾教育」を創刊し自宅に西川聾口話研究所を設けたことが挙げられる^{9, 10}。海外では、1880（明治13）年イタリアのミラノで開かれた第二回万国聾教育大会で「口話法を奨励する」宣言がなされるなど、世界的にも口話法のうねりが邁進する中で、こうした海外の聴覚障害教育の伝聞や見聞が、国内における口話法の導入に多大の影響を及ぼしたといってもよい。口話法の理論や実践について紹介している書物の輸入、海外で口話法の現場を見た者による視察報告、また自国で口話法に接触した来朝外国人など、様々なアプローチにより情報が入ってきた結果、国内の聾教育関係者の関心が口話法に注がれる結果となったのである。そして、その口話法への注視はやがて川本宇之介、橋村徳一、西川吉之助による「日本聾口話普及会」の創立の発端にもつながり、同会

³ 岡本稲丸『近代盲聾教育の成立と発展 古河太四郎の生涯から』日本放送出版協会、1997年、127頁。

⁴ 現在の筑波大学附属聴覚特別支援学校。校名の変遷は、1880（明治13）年東京訓盲院、1884（明治17）年東京訓盲哑院、1887（明治20）年東京盲哑学校、1910（明治43）年東京聾哑学校、1949（昭和24）年国立ろう教育学校附属ろう学校、1950（昭和25）年東京教育大学国立ろう教育附属ろう学校、1951（昭和26）年東京教育大学教育学部附属ろう学校、1958（昭和33）年東京教育大学教育学部附属聾学校、1973（昭和48）年東京教育大学附属聾学校、1978（昭和53）年筑波大学附属聾学校、2007（平成19）年筑波大学附属聴覚特別支援学校。

⁵ 小西信八「欧米聾哑教育の概観・明治四十年二月二十日聾哑教育講演會報告書」小西信八先生存稿刊行会編『小西信八存稿集』、1907年、12頁。

⁶ 東京教育大学附属聾学校『東京教育大学附属聾学校の教育 その百年の歴史』、東京教育大学附属聾学校、1975年、78頁。

⁷ 藤川華子、高橋智「1920年代における川本宇之介の聾教育システム構想と官立東京聾哑学校改革」東京学芸大学編『東京学芸大学紀要第1部門』56巻、2005年、209頁。

⁸ 中野善達「第1章 障害児教育の発足」荒川勇、大井清吉、中野善達著『日本障害児教育史』、福村出版、1976年、63頁。

⁹ 中野「第1章 障害児教育の発足」、65頁。

¹⁰ 根本匡文「わが国における聴覚障害教育の歴史と今日の課題」中野善達、根本匡文著『聴覚障害教育の基本と実践』、田研出版、2008年、17頁。

は口話法を全国にあまねく普及させる牽引役となった。この普及会は、教員だけでなく保護者も会員となり研修会に参加することができたため、研修会で得た知識を家庭に持って帰ることで、学校だけでなく家庭単位でも口話法が浸透していった¹¹。中村と岡（2011）は、口話法の普及に拍車がかかった理由として「日本の聾啞教育の言語指導における質的問題という内発条件が、親の発話への願望と教育現場の改善努力を媒介として、先進国・アメリカ合衆国からの情報という外発的条件」があったとまとめている¹²。このように内発条件と外発条件が揃い、日本聾口話普及会の成立以降口話法は雪崩を打つように急速に浸透していった。そして、勢力を拡大しつつあるその口話法は、もう一つの手段である手話法に対して忌避し、排除する立場を取るようになったのである。

II-2 手話を否定した口話法

日本に先立つこと約40年、欧米では既に口話法を優遇し手話法を敵視する風潮が沸き起こっていた。1880（明治13）年、イタリアのミラノで開かれた第二回万国聾教育大会では、次のような宣言がなされた。

第一、聾啞者を社会に復活せしめ、かつ彼等に完全なる言語の知識を与えるためには、口話法が手話法に勝ること数等であることを認め、本大会は口話法が聾者の発音並に教授には手話の代わりに選択せられるべきものなることを宣言す。

第二、本大会は発音法と手話法とを同時に用いることは、発音と談話を害しかつ観念の正確のために不利なるを考察し、純粹口話法が採用せられねばならぬことと宣言する¹³。

この会議で採択された決議では、口話法と手話法の併用は弊害があるため、手話法より優れている口話法を限定して用いる、つまり純粋な口話法を採用すべきだと宣言し、排除の矛先を手話に向けたのである。橋村徳一は、その純粋な口話法を「純口話法」と称し、名古屋市立盲啞学校¹⁴の校長職に就く傍らで大正時代の初めから発音指導に取り組み、やがて各地の聾啞学校校長となる伊藤舜一、安藤太郎、吉田角太郎、松永栄重、松岡若義といった教師陣と共に実践研究の積み重ねに邁進した¹⁵。その結果から、1920（大正9）年純口話法を実施する口話学級を新設し、それまで用いてきた手話と筆記を不要の物とした¹⁶。また難聴の娘を持つ西川吉之助も、自身の体験を引用しながら同様の立場を取った。両親からの希望で12歳になる難聴の女兒を口話指導のために預かっていたとき、娘のはま子と一緒に過ごす数日間の中で、はま子は彼女が知っている手話を見たり手話で答えようとしたりする機会があった¹⁷。その結果、はま子の言葉の数が激減し、食事の料理の名称を口で言わずに指差して表し、それを「ほしい」と手話で表すようになったのである。この体験が身に染みた西川は、「二兎を追うものは一兎も得ず」として、口話教育を実施する場合は手話を徹底的に排除し、完全な口話による指導に限定されなければならないとした¹⁸。そして川本宇之介は、口話教育の長所と手話の特質について比較し、「手話は未開語だ」と位置づけ、口話教育がいかに優れている言語教育方法であることを説いた¹⁹（表1）。大正デモクラシーが叫ばれる時代の中で公民教育の研究から出発した川本は、当時教育棄民であった特殊児童の聴覚障害児に対しても、口話の獲得によって他

¹¹ 奥村典子「日本聾口話普及会による口話法の普及過程とその意味」聖徳大学編『聖徳大学研究紀要』第28号、2017年、36頁。

¹² 中村満紀男、岡典子「日本の初期盲啞学校の類型化に関する基礎的検討 明治初期から1923（大正12）年盲学校及聾啞学校令まで」東日本国際大学福祉環境学部編『東日本国際大学福祉環境学部研究紀要』第7巻第1号、2011年、2頁。

¹³ 川本宇之介、『聾教育概説』、中文館書店、1925年、52-53頁。

¹⁴ 現在の愛知県立名古屋聾学校。校名の変遷は、1901（明治34）年私立名古屋盲学校、私立名古屋盲啞学校、1912（大正元）年名古屋市立盲啞学校、1932（昭和7）年愛知県盲啞学校、1933（昭和8）年愛知県聾学校、1948（昭和23）年愛知県立名古屋聾学校。

¹⁵ 高山弘房『聾教育百年のあゆみ』、聴覚障害者教育福祉協会、1979年、100-101頁。

¹⁶ 橋村徳一『聾教育口話法概論』、山田活版、1925年、48頁。

¹⁷ 彼女は京都市立盲啞院の聾啞部に入学し、手話を会得していた。

¹⁸ 西川吉之助「二兎を追ふもの」日本聾口話普及会編『口話式聾教育』第1巻第3編、1925年、8-9頁。同文献は以下にも収録されている。聾教育振興会編『創立十五記念選集』、1941年、49頁。

¹⁹ 川本宇之介『聾教育学精説』、信楽会、1940年、483-487、492-493頁。

人と協力できる職業人・社会人となり、やがて自立自営が可能な国民の一員として公民教育の理念である理想的国家の実現に貢献できると考えた²⁰。さらに川本は、著書『聾教育概説』の中で「手話法に依る時は、(中略)完全なる人の教育、完全なる公民の教育を徹底させることは不可能である」と手話法を一刀両断したのである²¹。

表1 口話教育の長所と手話の特質

口話教育の長所	言語が正確となる。 抽象語を理解し発表することが出来る。 思想の流れを迅速にしその発達を促す。 人間としての本能を満足することによって、愉快の感、喜悅の情を起さしめる。 職業生活をなすに、普通人と直接交換が行われるから、便宜でかつ有利である。
手話の特質	自然的表出運動に基づき、言語としては最も初歩で幼稚なるもの。 直感的であり思想を直截簡明に、絵画的に表現することは容易であるが、抽象概念を表現することは困難である。 思考を論理的になすことを困難ならしめ、したがって文を論理的になすことを困難ならしめ、論理的表現を完全ならしめない。 ことに時間空間、原因、結果等の事物の関係、物の属性ことに人間の関係を明瞭に表現することが困難であるため、甚だしきは、その文をなさず、語法の紛更を来とし、しばしば単語の羅列になることがある。

口話教育の潮流が高まる中、学校教育の現場においても大正から昭和前期にかけて口話を使う聾哑学校が増加するようになった。1920(大正9)年は口話学級を設置する聾哑学校数は東京都と愛知県の2校のみに限られていたが、1926(大正15)年は設置校が26校へ増加し、1934(昭和9)年のときは設置校が65校と全国に広がっていった²²。この14年間で2県から全国規模にまで発展するように、口話教育は驚異的な速さで雪崩を打つように普及していったことが伺える。逆に手話学級を設置する聾哑学校数はというと、1933(昭和8)年は設置校が28校だったのが、その5年後1938(昭和13)年に16校が手話学級を廃止したことで設置校は12校となり、1940(昭和15)年に至っては設置校が8校と減少していった^{23, 24}。このように口話学級を設置し、手話学

級を廃止する聾哑学校が増えると、次に何が起ったのか。それは、聾哑学校に勤める聴覚障害者の教職員に対する冷遇な対応であった。

II-3 聾哑学校の教職を追われた聾哑教員

かつて手話を用いて聾哑学校に勤めていた聾哑職員たちは、手話法を進める担い手として重宝され、学校の支柱であり花形でもあった²⁵。しかし聾哑学校の口話法への方針転換に伴い、口話法の障壁となるとして不平等に扱われ、排斥されるようになったのである。ここで聾哑教員の一人である土井久吉(どいひさきち)を紹介したい。名古屋市立盲哑学校の卒業を控えた土井は、「絵も上手だし口もある程度話せるので」と橋村徳一校長による強い斡旋により、1922(大正11)年自分の母校でもあった名古屋市立盲哑学校で助手として働き、後に教員となり図画科を指導した^{26, 27}。聾者の社会でも日本聾哑協会の本部評議員として頭角を現し、大阪市立聾哑学校に勤める藤本敏文、東京聾哑学校に勤める三浦浩と並んで「名古屋の土井」と呼ばれるまでに登り詰めた²⁸。ところが、1935(昭和10)年、33歳のときに突然教職を辞めさせられることになったのである。それを聞いた彼を慕う聾者が発起人となり、同年7月15日に同校講堂にて慰労金贈呈式を開催した。来賓として橋村徳一校長や東京聾哑学校の三浦浩が出席する中、土井は謝辞の中でこう述べた。

今度突然教育界を退くことになりましたが向後の教育界口話万能時代となり、今後の学校を風靡する時も最早早晚のことと存じます。此際の私の退職は私の為に実に悲しき至りですが、一面には我日本の陶磁器業社会への飛躍の第一歩を印したこととなる次第でありまして、只今の私の心境は別に異り御座いません²⁹。

²⁰ 平田勝政「大正デモクラシー期における川本宇之介の公民教育論と特殊教育」東京都立大学編『教育科学研究』第4巻、1985年、20頁。

²¹ 川本『聾教育概説』、204頁。

²² 日本聾哑教育会「全国聾哑学校口話手話状況一覧 昭和8年5月20日」山岡勘一編『聾哑教育』第22号、日本聾哑教育会、1933年、60-68頁。

²³ 日本聾哑教育会「全国聾哑学校口話手話状況一覧 昭和13年5月20日」山岡勘一編『聾哑教育』第48号、日本聾哑教育会、1938年、55-64頁。

²⁴ 日本聾哑教育会「全国聾哑学校口話手話状況一覧 昭和15年5月20日」山岡勘一編『聾哑教育』第60号、日本聾哑教育会、1940年、32-41頁。

²⁵ 岡本稲丸「わが国聴覚障害教員略史-戦前・戦後を中心に-」ろう教育科学会編『ろう教育科学』第32巻第2号、ろう教育科学会、1990年、37頁。

²⁶ 桜井強、岩月由典、佐藤孝祐「元愛知県聾哑学校教師(現:名古屋聾哑学校)土井久吉の生涯」日本聾哑史学会編「日本聾哑史学会報告書 第3集」、日本聾哑史学会、2005年、133-139頁。

²⁷ 土井宏之「回顧 父の思い出」岐阜県ろうあ福祉連合会『創立20周年記念誌』46-48頁。

²⁸ 東海ろうあ文化連盟「役員の横顔 東海ろうあ文化連盟副委員長 土井久吉」中島敏之編『ろうあ文化』第92号、1959年6月15日、1頁。

²⁹ 名古屋部会「部報」藤本敏文編『聾哑界』第73号、日本聾哑協会、1935年、83頁。

先述したように、土井が奉職した名古屋市立盲啞学校は、橋村徳一校長の号令のもと有力な教師陣と共に奮起した、公立では最初の純口話法を進めた聾啞学校である。日本聾口話普及会にとって目下急務だったのは口話法を指導する教員の養成であり、やがて文部省が後援する「口話法講習会」「聾口話教員養成講習会」が同校で開催されるようになった。この講習会は1926（大正15）年から1931（昭和6）年までに合計16回開催され³⁰、同校の教師陣が講師となって最先端の研究成果を教授するなど、同校はまさに口話法のメッカでもあった。勤務校の中で多数の講習会参加者が口話法を学び全国へ散っていく有様を見た土井は、口話法の普及の脅威を肌で感じ、口話指導を熱心に指導・研究する同僚の近くに働く中で肩身がますます狭くなる思いをしたであろう。さらに同校では手話排除に熾烈を極めるあまり、同校を卒業した手話を使う先輩達に対しても同様な態度を取った。同校にはかつて手話科を設置しており、手話科の生徒が卒業した後も集まる場として同窓会が存在していたが、土井の退職をきっかけにこの手話科卒業生の同窓会も解散された。それと同時に、口話科出身の卒業生で構成される新生同窓会が創立され、手話科の卒業生も聾啞教員同様に排斥の対象とされたのである³¹。当時の聾啞教師にとっては、こうした口話法の急速な発展にはもはや太刀打ちできぬ、という諦めの気持ちが蔓延しており³²、土井もまた同じ心境だったであろう。土井と地方へ観光に出かけるなど、日本聾啞協会の幹部関係を越えて親しかった藤本敏文は、土井の退職の報を受けて『聾啞界』にこう綴っている。

愛知県に卒業後其のまま母校教員となり勤続十有三年の多年に亘った本会前理事土井久吉が退職されたのは真に惜しいことである。氏の如き英才が同校を去つた事は国家のため一大損失である³³。

これは土井に限った話ではなく、口話法を指導する能力を持たず、目の上のたんこぶとされる手話を用い続ける聾啞教師にとっては、そうした現場の厳しい目に絶えず晒されながらも働き、ついには退職させられるところまで追い込まれるようになった。藤本は聾啞教員の退職が続出する現状を憂うかようにこうも綴っている。

聾啞教員は次第に其数を減じつつある。口話法の普及に依り往年伊太利ミラノに於ける決議に依つて急激に聾啞教員を引退せしめしが如き暴挙を執らざると雖も漸減的に聾啞教員を引退せしめ、代ふるに新進有為の聾啞者を、見本的看板的に採用抜粹する事もなく、推移しつつある現在の教育界の airflow をよいものとは思われない³⁴。

自身も聾啞教員であった藤本は、当時の聾啞者の団体である日本聾啞協会の機関誌『聾啞界』を編集する中で、土井を始めとする全国各地にいる聾啞教員と連携していた。各地の情報に精通していた藤本は、聾啞学校を追われたという悲報が次々と入ってくる中で、口話法の脅威がやがて自分達の喉元にも食らい付きてきた事に戦慄し、新規聾啞教員さえも採用しない現状をいかなるものかと警笛を鳴らしたのである。では、聾啞学校に勤める聾啞教員は実際にどのくらいの数を減らしてきたのか。戦前の教育統計を知る手段としては文部省年報があり、その中には全国の聾啞学校の教員数合計に加えて聾啞教員数も毎年度調査標本として調査されていた。その推移を見てみると、盲学校及聾啞学校令による盲啞分離が制定された翌年、1924（大正13）年には聾啞学校の全体の教員数に対する聾啞教員の構成比は21.9%であり、聾啞学校に勤める教員の5人に1人が聾啞者であった（表2参照）。しかしながら、年月を経る度に構成比はその比率を減らし続け、1944（昭和19）年度は2.5%と一桁以下にまで激減した。これは、聾啞学校に勤める40人に1人が聾啞教員であったということになる。逆に、口話指導を遂行できる聴者教員数は増加の一途をたどり、1924（大正

³⁰ 林次一『聴覚障害者教育福祉協会六十年史』、聴覚障害者教育福祉協会、1991年、27頁。

³¹ 愛知県聾学校『愛知県聾学校二十五年史』、愛知県聾学校、1940年、423頁。

³² 万徳菜穂子『聴覚障害教員史研究 第二次世界大戦まで』、東京学芸大学昭和60年度卒業論文、1985年。75-76頁。

³³ 藤本敏文「編集室より」藤本敏文編『聾啞界』第72号、日本聾啞協会、1935年、72頁。

³⁴ 藤本敏文「編集室より」藤本敏文編『聾啞界』第87号、日本聾啞協会、1939年、81頁。

13) 年度に78.1%あった構成比が、1944（昭和19）年度には97.5%とその比率を大きく伸ばしたのである。

表2 文部省年報による聾唖学校教員数についての構成比一覧³⁵

年度	聾唖学校 教員数	左の内聾 唖教員数	構成比 (%)	左の内聴 者教員数	構成比 (%)
1924(大正13)年度	210	46	21.9%	164	78.1%
1928(昭和3)年度	382	50	13.1%	332	86.9%
1932(昭和7)年度	526	37	7.0%	489	93.0%
1936(昭和11)年度	667	30	4.5%	637	95.5%
1940(昭和15)年度	778	20	2.6%	758	97.4%
1944(昭和19)年度	836	21	2.5%	815	97.5%

ここまで、聴覚障害教育の時代背景について俯瞰してきた。聴覚障害教育は、京都の古河・東京の小西にみられるように口話法と手話法の共存を認める黎明期に始まった。しかし欧米では手話との併用はおろか手話を排除するようになり、純粋な口話法を良しとする声が高まっていた。やがて欧米の口話法が口話法先覚者によって輸入されると、瞬く間に日本の聾唖学校は口話一色へと塗り変えられていった。ある者は国家公民から疎外されていた聾唖児を公民教育に組み込むために、ある者は自身の子どもに施した口話法による成功事例を広く共有するために、ある者は口話法の可能性を追求するために実践や研究に力を注いだ結果、口話法が大勢に認知され、それまでの聴覚障害教育の手法に一石を投じた大きな契機となった。しかしながら、その普及の裏では、その潮流の渦に飲み込まれた聾唖教員がその職を追われるという、聾唖教員にとっては暗黒の時代にもなったのである。そうした時代のうねりは大阪市立聾唖学校も例外なく押し寄せて来た。それでは同校の教員たち、そしてその中にいた東北学院を卒業し同校に奉職した教員たちは、こうした動きにどう反応し、どのような対応を取ってきたかを次章以降で述べていきたい。

³⁵ 岡本「わが国聴覚障害教員略史－戦前・戦後を中心に－」40頁。表5から筆者が抜粋し、加筆した。

Ⅲ 東北学院卒業生と大阪市立聾唖学校

東北学院が初めて大阪市立聾唖学校と関わり始めるのは、同校が創立されてから9年後の1909（明治42）年のときである。その年、第一号となる佐藤亀太郎が、東北学院を中退し東北帝国大学へ入学、私立浄土宗連合教校を経て同校に就職したところから始まる^{36, 37}。佐藤は教諭を経て1913（大正2）年から1916（大正5）年まで四代校長を務めた。この佐藤の奉職を皮切りに、東北学院の卒業生が大阪まで渡り、同校の就職者が増加したのである。そのうち聾唖教育に携わった教員の名前を列挙すれば、先に挙げた佐藤亀太郎、高橋潔、西淵峻、桜田茂、大曾根源助、加藤金平、内田豊、木村勝七郎がいた³⁸。多くの卒業生が同校に就職した事になるが、何故これ程の人数が同校に集まったのか、その経緯については、一人一人を辿れば様々な個人的理由が挙げられる。例えば、高橋は東北学院院長であったシュネーダーから「外国へなど行かず日本に幸せの少ない人達のために尽くしなさい」と諭され、知人を頼って大阪に来た³⁹。大曾根源助の場合は、自分の姉である鈴木はじめがきこえない息子のために学校を探していたところ大阪市立聾唖学校の評判をきき、来阪し息子を同校に入学させ、自身も同校の教員となった。その姉から突然助力を依頼されたため大曾根も来阪し同校に就職した^{40, 41}。また木村勝七郎は、かつて家庭教師でお世話になり面識があった大曾根が同校で悪戦苦闘しているとき、東北学院第4代院長の出村剛先生による推薦状を携えて大阪へ駆けつけた⁴²。このように、各々が同校に就職し

³⁶ 中江義照『大阪盲学校60年史』大阪市立盲学校六〇年史編集委員会編、1960年、82頁。

³⁷ 櫻井祐子「ろう教育に献身した東北学院同窓生の記録」東北学院大学英語英文学研究所『東北学院英学史年報』第31巻、2010年、24頁。

³⁸ 櫻井「ろう教育に献身した東北学院同窓生の記録」2頁。同文献によれば、佐藤運吉や松本武雄も就職したとされる。その他にも、東北学院卒業生である星伊策は同校の盲教育に携わった。

³⁹ 川淵依子『高橋潔と大阪市立聾唖学校－手話を守り抜いた教育者たち－』、サンライズ出版、2010年、17-18頁。

⁴⁰ 大曾根亨（大曾根源助の長男、今は故人）聞き取り記録、2016年、1-2頁。

⁴¹ 櫻井「ろう教育に献身した東北学院同窓生の記録」5頁。

⁴² 櫻井「ろう教育に献身した東北学院同窓生の記録」3頁。

た経緯は様々であるが、東北学院から離れた大阪市立聾唖学校に就職した背景として、当時国内ではキリスト教の大衆伝道の時代であり、キリスト教信仰を建学精神にみる東北学院の出身者は、地元に残ることなく「福音の使徒」として社会に献身するという使命感を持っていたと考えられている⁴³。また当時、新規教員を採用するための人事権は教育委員会ではなくその学校の校長の裁量によるところが大きく⁴⁴、自分の母校から同志を募り校長に紹介することで、同じ出身校の教員数が自然と増加した例もある。高橋は諸事情により仙台に帰省した際、東北学院に寄って卒業生に掛け合うなどして大阪市立聾唖学校の新規教員の確保に手を尽くした⁴⁵。このように、1900年代後半から1930年代にかけて東北学院から同校に奉職する教員が増加し、同校の聾唖教育推進に献身したのである。それでは、先述した迫り寄せる口話法に対し、東北学院卒業生たちはどう対応してきたのか。ここからは、同校の中で28年間と最も長く校長職に就いた高橋潔について述べていきたい。

高橋の経歴についてまず述べると、1890（明治23）年に宮城県で生まれ、東北学院英文科に入学し、1913（大正2）年に卒業する。卒業後は母校である東北中学に一年間奉職し、1914（大正3）年、当時の市立大阪盲聾学校に奉職する。そして、1923（大正12）年に盲学校と聾唖学校に分かれるという盲学校及聾唖学校令が成就され、その翌年、盲児はそのまま使い続けた校舎に残り、そして聾児と教唖部の教師陣は新しい校舎へ移って「大阪市立聾唖学校」という新しい校名の看板を掲げた。そして、同年の1924（大正13）年、高橋は34歳のときに六代校長に就任する。1952（昭和27）年に退職するまで、校長として精神的支柱となり同校の基盤を支えたのである。

大正時代から昭和前期にかけて、高橋の聾唖教育に対する考えが最もよく表れている著書がある。それが『宗教教育に就いて』であり、これは1930（昭和5）年度の大阪府督学課主催による小中学校教員

を対象とした精神科学講習会で高橋が講演した内容を文字起こししたものを、冊子にまとめて翌年の1931（昭和6）年3月28日に大阪市立聾唖学校教育後援会から発行され、非売品として有縁の人に贈呈されたものである⁴⁶。また、1932（昭和7）年、財団法人社会教育協会からも定期刊行物である社会教育パンフレット第146編にもほぼ同じものが発行された⁴⁷。題名は『宗教教育に就いて』と銘打っているが、その題名からして特定の宗教に対する信仰心を深めるための教育とは何かについて論じる、という性格のものではなかった。高橋は「一般の小中学校における宗教教育とはだいぶ異なる」と前置きした上で、高橋が聾教育を志した動機、聾者の心理、口話法や手話法について、また大阪市立聾唖学校が目指す学校像や宗教的行事や取り組みについてなど、教育全般について広く網羅しているため、まさに高橋の考えている、聾教育に対する教育思想が凝縮された史資料といってもよい。高橋の長女であった川渕依子が、亡き父についてもっと詳しく知りたいと叔父に相談したところ、「これをよく読め」とこの冊子を渡された。また高橋の女房役であった大曾根源助にも父について尋ねたところ、同じようにこの冊子を渡されたそうである⁴⁸。高橋の教育観や実像を理解する上で、バイブルと言っても差し支えない著書であるといえよう。次章では、この著書『宗教教育に就いて』から、迫り寄せる口話法に対する高橋の考えが読み取れる箇所を三点取り上げて述べていきたい。一つ目に「聾唖児の心の育て方」について、二つ目に「口話と手話に対する考え方」について、三つ目に「聾唖学校のあり方」について取り上げていきたい。

IV 『宗教教育に就いて』からみる高橋の教育観

IV-1 聾唖児の心の育て方

まず一つ目となる聾唖児の豊かな心、感情や情緒と言った情操をどのように育てればよいのか。それについて述べる前に、まず当時の聾唖児を取り巻く

⁴³ 櫻井「ろう教育に献身した東北学院同窓生の記録」6頁。

⁴⁴ 木村洋一郎書簡、2016年、6頁。木村洋一郎は、東北学院出身であり1933（昭和8）年に大阪市立聾唖学校に就職した木村勝七郎の子（今は故人）。

⁴⁵ 三石生「日記の中から」東北学院『東北学院時報』、第27号、1919年2月25日。

⁴⁶ 川渕依子『手話は心』、日本ろうあ連盟、1983年、327頁。

⁴⁷ 大阪市立聾唖学校教育後援会発行の冊子には「序」と読者に対する「御断り」が挿入されているが、社会教育教育発行の冊子にはそれが省略されている。

⁴⁸ 川渕「高橋潔と大阪市立聾唖学校 - 手話を守り抜いた教育者たち -」33頁。

環境はどのようなものであったかを同著から引用する。

三つ児の魂百迄もと言われるように、最も尊い感情の養われてゆくべき聾児幼児時代の聾啞者は、かくのごとくにしてその栄養素ともいべき音楽（人の言葉も話も歌も、広い意味において）なしに育てられて来たのでした。そしてその代わりに見せられて来たものは涙に湿りがちの曇った暗い母の顔でした。家中の人が面白おかしく話して笑っているので袖を引っ張っても（学校へ入らない子の手真似、何かと聞く意）お前は耳が聞こえないからわからない、と耳へ手でふたをして、手を振られただけでした⁴⁹。

きこえる家庭で生まれた聾啞児にとって、音声言語を話す家族との会話に参加することは越えられない障壁があり、あらゆる話題を共有することも出来ず、空気存在であるかのように蚊帳の外に置かれていた。このような状況の中、聾児が抱いてきた感情はどんなものであったか同著から抜粋すると「潤いのない温かみのないほんとうに荒みきった」「同情心が乏しく」「残忍性も強い」「自分のために泣いても人のために泣く涙は無い」「実に利己的」「博愛の精神も乏しく権利を知って義務を知らず」「親兄弟社会人に対しては反感」「感謝の念などはほとんどあたぬ」とある⁵⁰。これは聾啞児の心理教育、今の学校教育でいう道徳教育が目標とする道徳性の涵養については、その時代ではあまり重要視されず蔑ろにされてきた経緯がある。1872（明治5）年には学制が公布され、全ての国民が就学することが定められ全国各地で学校が整備された。しかし聾啞児はといえば、他の障害児同様にまだ就学対象とされず枠外に置かれた。明治後半・大正時代に入ってから、慈善家や篤志家による民間の聾啞学校設立が相次ぎ、聾啞児にもようやく教育の光が当てられることになるのだが、当時の聾啞教育の教育内容は、自立自営のために他者との交信技能を習得させる「言語教育」と「職業教育」が最優先であった⁵¹。聾啞教育が慈善家・篤志家の手から公共団体に移っても

その本質は変わらず、1924（大正13）年、聾啞教育の団体である「日本聾啞教育会」が発足し、翌年に第一号となる機関紙「聾啞教育」が刊行されたが、投稿されたのは口話法を中心とする言語教育や職業教育についての文献が中心であり、聾児の心理、特に道徳観念について扱う文献はあまり多くは無かった。1931（昭和6）年に発行された「聾啞教育」第14号では、「常識教育」というテーマで、聾児の常識教育について各聾啞学校の実践の報告が掲載された。その中身を見てみると、「聾啞者は普通児と比べて非常識である」という課題から始まっており、その理由を列挙すると、「家庭で放任的なしつけを受けて来たから」「単純な生活を営んできたから」「自分や他者の行動について人からの非難や賞賛をきく機会が無かったから」「社交の範囲が狭いから」などが挙げられている⁵²。大阪市立聾啞学校の教員であった木村勝七郎も、家族で大阪に住んでいた時代に、知人の聾啞児を預かり自分の家に住まわす時期があったが、その聾啞児は地域で生活するために必要な常識や金銭的マナーを持っていなかったそうである。その子どもは裕福な家庭の出身であり、学校の帰りに店に立ち寄っては、欲しいものがあると代金を支払わずに商品を持って帰っていくことを繰り返していた。その度に、保護者がその店に行き代金を支払っていた。聾啞児本人は「お金を払ってものをかう」事を知らなかったそうである⁵³。本来であれば「ほしいものを店から持って帰るためには、その店にお金を支払わなければならない」「勝手に持って帰ることは悪い事だ」と教え諭せばよいのだが、その子どもの保護者がそうしないのは、やはり何も言っても伝わらない、話し言葉によるコミュニケーションが成立しないため、指導する以前の問題だということであろう。このように、話し言葉が通用しないのならどうにもならぬと本来親が果たすべきのしつけや教育を放棄した結果、聾啞児は正しい判断能力を持たず歪んだ社会性や感情を持つようになったのも当然の帰結ともいえる。では高橋は、そうした荒んだ心を持つ聾啞児の道徳観念を育てるためには何が必要と考えていたのか。同著から考えが読み取れる箇所を引用する。

⁴⁹ 高橋潔『宗教教育に就いて』、大阪市立聾啞学校教育後援会、1931年、25-26頁。

⁵⁰ 高橋『宗教教育に就いて』、20頁。

⁵¹ 中野「第1章 障害児教育の発足」、63頁。

⁵² 松岡若義「聾児童生徒の常識教育に就いて」、山岡勘一編『聾啞教育』第14号、日本聾啞教育会、1931年、39頁。

⁵³ 木村洋一郎書簡、2017年、2頁。

子供はこの如くにして一方には人の言葉というものによって音楽的に感情の陶冶をされながら又一方その言葉によって話される物語の中から道徳的情操が養われ、更に一つ一つの言動に対する親達の教訓から、子供ながらの理想を描き、道徳観念が養われ自他の言動に対する正しい道徳的判断を下すようにさえなるのであります⁵⁴。

高橋は、大阪市立聾唖学校に赴任後まもなく、衝撃的な出来事を体験する。赴任後一週目のとある休み時間、授業を終えて職員室に戻ると6人程の先生が集まって話をしているのが眼に止まった。聞き耳を立てると「あいつら（聾唖児、筆者注）は犬猫同然だ」という話や、とある先生が、感情や人格を育てる修身の授業は聾唖児にとって「猫に小判」であり、それよりも「げんこつ」が有効だと言う話が耳に入ってきた^{55, 56, 57}。それをきいた高橋は、特殊教育に携わる者は「子供達の真の幸福のために働いて居られるものと思っていた」とこの業界から去ることを一時決意し、その日のうちに市役所へ足を運んだほど、高橋にとってショッキングな場面であった⁵⁸。げんこつという今で言う体罰、肉体的苦痛によって反社会的行動を抑制させるという考え方は、高橋にとって正反対にあり到底受け入れがたいものであった。その出来事の後、高橋は、廊下を歩いていると走っている聾唖児に遭遇する。「廊下を走ってはいけません」と叱ったら、舌を出される。その後、他の子どもからもつばをかけられる⁵⁹。これが先程きいた話の「犬猫同然」の事かと高橋は理

解を示したものの、肉体的苦痛を伴う指導を与えることについては同意できず、そうした現状に目を背けることもできなかった。こうした高橋の行動が意味するのは、聾唖児は野蛮で動物のような下等的存在だとする偏見に飲み込まれず、目の前にいる子どもとしっかり向き合いたいという姿勢が如実に表れているともいえるだろう。1914（大正3）年4月奉職後まもなく高橋等の歓迎会が開かれたとき、高橋は「私は教員になろうと思って御校に参りましたではありません。何卒これからは不肖者ですが一友として厚くお交じりして頂きたいのです」と発言するなど、高橋にとっては教員と生徒関係を越えた親密な関係を築きたいと考えていた⁶⁰。そして高橋は、こうした荒んだ聾唖児の道徳観念を育てるために何が必要かを考えるにあたり、まず聾唖児の心理を知ることが出発点になると考えるようになる。後日大阪聾唖教育後援会⁶¹から発行された『聾唖教育研究叢書』の「序」の中で、高橋はこう述べている。

聾唖者の精神発達過程を考えずに、即ち聾唖者の心の動きを知らないでどうして聾唖者に対する教育作業が行われるかを想うからです。我々の仕事はまず聾唖者を知ることから始めなければならぬと思ひます⁶²。

目の前の聾唖児が誰であるかをより知るために、高橋はアメリカ、イギリスやフランスから聾唖の心理について書かれた書物を取り寄せ⁶³、彼等の内面について知ろうと勉強に励んだ。彼等の言葉である手話を習得すれば、聾唖児の気持ちを汲み取られるようになるはずだと考え、同僚であった難聴教員の

⁵⁴ 高橋潔『宗教教育に就いて』、大阪市立聾唖学校教育後援会、1931年、25-28頁。

⁵⁵ 高橋『宗教教育に就いて』19頁。

⁵⁶ 高橋潔「聾唖教育について」大阪府立中央聴覚支援学校『創立百二十周年記念誌』、2021年、72頁。

⁵⁷ 高橋潔『聾唖の教育について』1950年、31頁。（未発表文献）

⁵⁸ 高橋潔はその後すぐ、三代校長であった宮島茂次郎（当時は大阪市役所学務課長）が勤める市役所に行き退職の旨を伝えると、宮島は「本当に可愛そうな子供を君は捨てて逃げていくのか。」と脇目も振らず大声でどなり返した。涙を流す宮島を見た高橋潔は、自分を恥じてすぐに謝り、退職を撤回し同校に戻った。高橋潔「聾唖教育について」大阪府立中央聴覚支援学校『創立百二十周年記念誌』72頁。

⁵⁹ 高橋『聾唖の教育について』35頁。

⁶⁰ 市立盲聾学校聾唖学友会「会報」吉田正雄『聾唖学友会誌』第5号、1914年、57頁。

⁶¹ 大阪市立聾唖学校に関係ある聾唖者の保護者や同校職員、その他篤志者で構成され、学校と家庭の結びつきを密にして聾唖教育の発展を促すことを目的に、1918（大正7）年に設立した。機関紙である『会誌』が1924（大正13）年の創刊号から1926（昭和元）年の3号まで発行されている。

⁶² 高橋潔「序」大阪市立聾唖教育後援会『聾唖教育研究叢書 第1集』1929年、3頁。また同文献は題名を変えて右にも収録されている。高橋潔「『聾唖者は宗教的情操に乏し』といふ」、大阪市立聾唖学校校友会他『会誌』第6号、1929年、124頁。

⁶³ 高橋「聾唖教育について」72-73頁。

福島彦次郎から指南してもらいながら、毎晩夜遅くの11時までの練習に加え、朝5時頃の起床後から8時の始業まで手話の練習に勤しんだ⁶⁴、⁶⁵。また、聾啞とは実際どんなものかを体験するために、耳に綿をつめて町を歩いたこともあった⁶⁶。そうした心理の研究の積み重ねと手話の会得等の結果、先述したように「言葉というものによって音楽的に感情の陶冶」されることにより、聾啞児も「道徳観念が養われ自他の言動に対する正しき道徳的判断を下す」ことができるという結論に行き着いたのである。聾啞児の反社会的行動に対し、身体に訴えるのではなく、言葉に訴えかけることで感情や道徳観念の涵養ひいては人格の陶冶を目指したのである。引用文中に「音楽的に」という表現がみられるが、これはかつて高橋が東北学院時代に出会った西洋音楽に魅力を感じ、音楽家を志していた経緯があるため⁶⁷、「音楽」という言葉を入れた節がある。高橋にとって「音楽」は、単なる楽隊や唱歌のような狭い意味ではなく、子どもと音楽の間には、切っても切れない密接な関係があると考えていた。きこえる子どもの場合は、子守歌や寝る前に聞かせる御伽噺が一種の音楽として子どもの耳に響き、それが優しい感情を作りあげるとした⁶⁸。それでは聾啞児の場合を考えたとき、「音楽的」にあたる言葉とは彼等にとってどのようなものであると考えていたのか。

IV-2 口話と手話に対する考え方

恵まれない境遇を持つ聾啞児は、荒みきっていた感情や道徳観念を持つ場合がほとんどであった。そういった聾啞児の感情を育むために、どのような言葉が彼等に必要であったか。言葉に対する高橋の考えが読み取れる箇所を『宗教教育に就いて』から引用する。

口話学校は単に日本語学校、会話学校、ないしは全く治療所矯正所としか私には見られないのであります。

私は、それよりもまず、一日一日成長していく生活者として彼等の精神的生活の糧をあたえて行かなければならぬ。それには彼等の言語であるところの手話に依らなければならぬと考えたのであります⁶⁹。

まず高橋がこうした考えを持つようになった経緯を述べていく。前章の時代背景でも述べたように、高橋が大阪市立聾啞学校に赴任した大正時代前期は、西洋知識が輸入された口話法が国内でも萌芽しようとしていた時代であった。そのため、高橋は当初その新教育法である口話法が有効かどうか2、3年試していた時期があった⁷⁰。そして、その口話法を同校で採用するかどうかを決断する契機が訪れるようになる。1924（大正13）年、校長に就任した高橋は、早速その年度内に口話教育の現状を視察することにし、1925（大正14）年2月に純口話法で名高き私立日本聾話学校と名古屋市立盲啞学校を訪問した⁷¹。その後、視察の所感を「口話式聾教育に就て」にまとめ、校長として同校の取るべき方針を大阪聾啞教育後援会『会誌』に投稿している。その所感によれば、日本聾話学校では昼休みに入った子どもの様子を見る機会があったが、子どもはお互いに会話をせず、外に出た年上の子が馬となり年下の子がそれにまたがって遊ぶという様子を見て、まるでその情景が幼稚部のようにだと錯覚させられたとのことだった。次に視察した名古屋市立盲啞学校では、修身と読み方、理科の授業を参観する中で、もしこの授業を手話で教えていたら心の底まで触れるように教えることが出来るのに、と歯がゆい気持ちになったと述懐している⁷²。そうした東京と名古屋の視察を踏まえて、高橋は大阪市立聾啞学校が取るべき方針について次のように述べている。

⁶⁴ 高橋『宗教教育に就いて』20頁。

⁶⁵ 大阪時事「手で物を言う毛色のかはつた先生」『聾啞界』第30号、1924年、52頁。

⁶⁶ 聾啞月報「己の為にのみ流す聾啞者の悲涙 聾啞者の公民科講習会に來た手話法の大家高橋講師の話」『聾啞月報』第42号、1934年、2頁。

⁶⁷ 川淵『高橋潔と大阪市立聾啞学校 - 手話を守り抜いた教育者たち -』15-16頁。

⁶⁸ 高橋潔「講話 子供と音楽」大阪聾啞教育後援会編『会誌』創刊号、1924年、10頁。

⁶⁹ 高橋『宗教教育に就いて』38頁。

⁷⁰ 高橋『宗教教育に就いて』35頁。

⁷¹ 高橋潔「口話式聾教育に就て」大阪聾啞教育後援会編『会誌』第2号、1925年、7-8頁。

⁷² 高橋「口話式聾教育に就て」7-8頁。

手真似それ自体に於いて芸術的な、しかも心の発育の方面に於いて最も有利なものであり、更にもっと研究してみる余地があるものと信じて居りますためと特別の希望者のみを収容し得る私立学校ならいざ知らず種々なる事情のもとにある全ての聾啞者をお入れしなければならぬ公立学校として、しかも今の様な設備では発音の出来る様な子供さん方にはなるべく教えてあげたいとは存じていますが、思い切ってこの学校を口話式に改めることを躊躇しております⁷³。

「口話式聾教育に就て」の中で、高橋は手話を排除し口話のみに絞るという純口話法への転回をためらう理由を二点挙げている。一つ目は、口話法を達成するために「金」と「努力」と「時」、そして「能力」の条件が必要だと考えていた⁷⁴。先述した西川父子が成し遂げた流暢な発音や読唇という好成绩の例を挙げると、豪商であった西川吉之助だからこそ潤沢な資金を捻出できたこと、西川家が一致団結してはま子一人の指導に全力を注いだこと、また口話指導のための途切れの無い長時間が確保できたこと等の複数の要因によって成し遂げられたとし、それを一公立学校が同条件で成し遂げるには多くの課題があり、今すぐの口話法への転回は躊躇してしまうとした。二つ目は、聴児と同じく、自分の感情や観念、欲望といった気持ちを自己表現したいという人間の本能は聾啞児も持っているという点を強調している。予科（現在の幼稚部）に入学した子どもは、手話を知らなくても、本能的に自己流の手話で何とかして自分の話を相手に伝えようとする。それが予科2年生となれば、同じ年頃の子どもと同じような話ができるようになる。言語習得の速度の観点から考えると口話の習得は途方もない時間がかかるが、その一方で聾啞児にとって親しみやすく即時に学習可能な手話だと「聞きたいことを聞く」「言いたいことを言う」と日常場面にすぐ応用できる。手話の使用により、聴児と同じように聾啞児も年齢や発達段階に応じた会話のやりとりが可能になるとした⁷⁵。

そうした年齢相応の会話の積み重ねが、やがて感情陶冶や心の発育にもつながっていくのではないかと考えた高橋は、手話が与える聾啞児の心理について研究の余地が残っていると慎重な立場を示した。口話法が普及しつつある中で口話法を採用する聾啞学校を視察したものの、こうした二つの理由から大阪市立聾啞学校の方針を口話法に改めるのは時期尚早であり丹念な手話研究が必要であると結論づけたのである。

それから2年後の1927（昭和2）年、大阪市立聾啞学校が定期刊行する『会誌 第4号』の誌面に「おことはり」の中で高橋は次のように発表した。「聾啞者と信仰」という内容にて、同校の初等部（現在の小学部）三年以上の子どもたちが魂や死についてどのように考えているかについての調査を進めており、想像以上の事柄を聞くことができた、という報告である。更に年齢が小さい子どもにも神仏観を尋ねてみたいとし、本当であればこの号で報告する予定であったが、次号でお目にかかって頂きたい、として文を締めくくっている⁷⁶。結局、次号にこの調査結果が掲載されることは無かったが、その結果を高橋は様々な場で広く発表した。1928（昭和3）年1月17日、大阪聾啞教育後援会の定例評議員会にて「聾啞生の信仰心」の講演を行い⁷⁷、同年2月5日には渡欧から帰国した宮島茂次郎の歓迎会にて「聾啞者の宗教に就いて」を熱弁し⁷⁸、同年春には父兄会の集会でも、聾啞者の信仰について講演を行った⁷⁹。同年4月3日に、社団法人日本聾啞協会第3回総会を大阪市立聾啞学校で開催したときも、「聾啞者と信仰」の題目で講演を行った⁸⁰。また同年7月25日に函館で開かれた第4回聾啞教育協会総会の聾啞部研究発表の中でも「聾啞者の信仰調査」として発表し⁸¹、さらに1930（昭和5）年5月26日には、「聾啞

⁷³ 高橋「口話式聾教育に就て」14頁。

⁷⁴ 高橋「口話式聾教育に就て」3頁。

⁷⁵ 高橋「口話式聾教育に就て」10-12頁。

⁷⁶ 高橋潔「おことはり」大阪市立聾啞学校『会誌』第4号、1927年、174-175頁。

⁷⁷ 大阪聾啞教育後援会「聾啞教育後援会日誌抄録」大阪市立聾啞学校校友会他編『会誌』第5号、1928年、141頁。

⁷⁸ 大阪聾啞教育後援会「聾啞教育後援会日誌抄録」142頁。

⁷⁹ 高橋潔「『聾啞者は宗教的情操に乏し』といふ」、大阪市立聾啞学校校友会他編『会誌』第6号、1929年、126頁。

⁸⁰ 日本聾啞協会「第三回総会」日本聾啞協会編『聾啞界』第43号、1928年、11頁。

⁸¹ 函館盲啞院「会報 日本聾啞教育会第四回総会概況報告」日本聾啞教育会編『聾啞教育』第7号、1929年、62頁。

者と宗教教育に就いて」を世の人々にマイクロフォンで伝えた⁸²。同年11月9日には日本聾啞教育研究会近畿部会第二回例会が開かれ、その中で「聾啞者の持つ道徳観念の一面」についての発表を行った⁸³。また先述した『宗教教育に就いて』の発刊の契機となった、1930（昭和5）年11月25日から大阪府主催による小中学校教員の講習会が一週間行われ、その中でも「学校に於ける宗教教育」という題目で講演した⁸⁴。このように、多方面の場で少なくとも3年間で8回以上、「聾啞者と信仰」について高橋の口から熱弁されたのである。

この多数の発表の中ではっきりと具体的な記録内容が残っているのは、大阪府主催の小中学校教員講習会にて速記係が聞き写した『宗教教育に就いて』のみであった。5年前に「まだ研究の余地が残っている」と口話法への転換を慎重に考えていた高橋は、先の信仰調査を経て確信に変わったのである。その確信を同著の中で次のように記している。聾啞者は「まず感情の陶冶から始めて、道徳的観念の養成更に宗教的情操の涵養、進んでは宗教的信念の付与にまで行かなければならない」とし、そして手話は「生活者として彼等の精神的生活の糧」であると⁸⁵。口話法と手話法を比較したとき、前者は高橋の眼には日本語の会話学校、矯正所の手法としか映らず、それよりも聾啞者の生活言語ともいえる手話は、彼等の生活に寄り添い、多くの手話を交わす中で感情を育てる。それがやがて道徳的観念の確立へつながり、その延長線上にある宗教的情操の獲得へと延びていくのだと手話法による利点を確信し擁護した。その上で、高橋が強調したのは、従来の手話は非音楽的であるとし、より音楽性・芸術性を帯びた手話が、聾啞者の持つ感情を陶冶するために必要だと述べている⁸⁶。これは先述した「子供と音楽」で述べた具体例が分かりやすく、「音楽的な手真似

（手話、筆者注）」を具体的にいえば「やさしい、やわらかい、きれいな感じのよい手真似」で語り掛けることが聾啞児の優しい感情を育てるとした⁸⁷。同校の教員であった松永端も、高橋が物語を聞かせる時の手話は「無味乾燥のものでなく、一つ一つの指の屈伸、手の開き方の運動に、その物語に従って、調子（リズム）を帯びてなされる」とまるで無音の音楽のようだったという⁸⁸。また、1937（昭和12）年同校の創立者五代五兵衛の偉業を称えるために伝記『五代五兵衛』が編纂されたが、同著の本文の下段には、「解説」として大阪市立聾啞学校の情操教育の現状も紹介している。その中で情操教育と手話の関連性がよく表れている文章を引用する。

手まねは彼等の言語である。最も分り易く親しみ易い心の糧である。よく洗練された手まねは、簡潔雄弁にして意味深長、一語よく肺腑を貫き、一句よく万人の涙をそそるものがある。童話を劇として演じさせる。或いは名作を取って教師の手で演じて味わせる。彼等は分からなかったものの道理を知り、思ひもよらなかった人情の機微に触れる。言葉では言ひつけせない美しさや甘さを味ふ。かうして荒々しい感情は和み、暗い心は明るい爽やかな光に照らされて蘇る⁸⁹。

手まね、つまり手話は聾啞児者の言語であると冒頭で述べている。そして「最も」という用語は口話や筆談と比較した結果という暗黙の意味であろう。口話や筆談と比べると、手話は明瞭度が高く親和性が大きい言語であり、聾啞児の感情や情緒を育てるのに必要不可欠な「心の糧」であると断定しているのである。そして、文中にある「よく洗練された手話」は、高橋が度々主張する「音楽的な手話」と同義であろう。聴者が音や声を通して世界に触れるように、聾啞児もまたその洗練された手話を通して、童話や名作といった世界との接点を持ち、深い感動

⁸² 松永保雄「御挨拶」大阪市立聾啞学校校友会編『会誌』第8号、1931年、9頁。

⁸³ 大阪聾啞教育後援会「日本聾啞教育研究会近畿部会第二回例会」大阪市立聾啞学校校友会他編『会誌』第7号、1930年、189頁。

⁸⁴ 藤本敏文「編集後記」大阪市立聾啞学校校友会他編『会誌』第7号、1930年、218頁。

⁸⁵ 高橋『宗教教育に就いて』35、38頁。

⁸⁶ 高橋『宗教教育に就いて』38-39頁。

⁸⁷ 高橋潔「講話 子供と音楽」大阪聾啞教育後援会編『会誌』創刊号、1924年、10頁。

⁸⁸ 松永端「無音の音楽」大阪聾啞教育後援会編『会誌』第2号、1925年、43頁。

⁸⁹ 五代五兵衛翁頌徳会『五代五兵衛』1937年、161-162頁。

を呼び起こし、穏やかな感情が陶冶されるのだと考えた。そして「童話を劇として演じさせる」事を具現化するかのようになり、同校では校友会芸術部による演劇活動が活発になった。さらには1927（昭和2）年に大阪市立聾啞学校の卒業生、在籍生徒や教職員で構成される演劇団体「車座（くるまざ）」が設立されたのである。車座の演劇について簡潔に説明すると、舞台上立つ演者は聾啞者か聴者であるかは問わず、最初から最後まで音声の会話が無い無声劇であり、舞台上で盛り上げる効果音も一切使わず、台詞は全て手話で表現される演劇であった⁹⁰。そしてその車座が聾啞児の感情を育てる情操教育の一翼を担ったのである。その情操教育の結果がよく表れている出来事がある。それは、初期の作品である「悲しき風景」の劇を校内で発表したときであった。劇の主人公はぶらぶらと街を遊び惚けている青年Aだが、彼の父親の体調が芳しくなく、死のほとりにいる父親は息子であるAを一目見たいと言う。しかしなかなかAは父の前に姿を現さず、見ている観客は焦れに焦れる中で、とある一年の女の子が立ち上がった。劇が進行しているにも関わらずその女の子は舞台裏に行き息子役の先生を見つけると、「あんなところに、かくれているんだ。早く早く、お父さんが死にかかっていますよ。会いたい会いたいと言って泣いていますよ。早く早く」と訴えた。しかし、そうとは言えその先生は台本の筋書き通りに父親を死なせてから舞台上に登場する他なく、いざ劇が終わってみると、その先生はその女の子から「人でなし」「ばか野郎」「あんたはもう知らん」と罵倒されたとのことである⁹¹、⁹²。最期に息子の顔を一目見たいと願った、その父の感情をそのまま真剣に受け止めたその女の子は、なかなか出てこない息子に業を煮やし、いても立ってもいられない気持ちで息子を探しにいったのだろう。結局、父の願いが実現することなく終幕となったときに、その息子役の下に行き罵詈雑言をまくし立てたことから、女

の子はその劇に大いに感情移入させられたことがわかる。聾啞児にとって「わかる」演劇は、演者の洗練された手話によって心の奥深くに入り込み、激しく心を揺さぶり、聾啞児は深い感動を味わうこととなったのである。この車座の演劇活動に呼応するかのようになり、同校が定期刊行する『会誌』にも次々と感想が寄せられるようになった。この「悲しき風景」を鑑賞したある生徒は、自分もあの息子のようになり不良少年になって両親を心配させてはならないと投稿したように⁹³、心を大いに揺さぶられたとする児童生徒は少なくなかった。こうした車座の演劇活動について、高橋は「数時間かの講話にもまして彼等の心のどん底にまで刻み付けられる尊いものがある」として、手話を媒介に演劇の鑑賞を通すことで、聾啞児の心の奥にダイレクトに訴えかけ、数時間の講話に匹敵する情操教育の効果をもたらすと強調した⁹⁴。このように、高橋は、聾啞児の感情や情緒を育てることが可能であり、その聾啞児の心が芽吹くには、手話という豊かな土壌がかけがえの無いものであるとした。

しかしながら、高橋は先述した「日本語学校」「矯正所」と揶揄した口話法についても、全面的に否定せず、手話法を採用したからと言って口話法を排除しようとした訳でもなかった。高橋は「私は必ずしも口話法が悪いと言うものではありません。けれども手真似を一切用いずに口話法によって教育すれば聾啞者の全てが立派なものになるやうになり、耳の代わりに目でお話を読むことが出来、普通人と少しも変わらない迄になる。或いは口話法によって教育して居る中に聾啞者の残存聴力が次第に回復しては八年ないし九年の学校を卒業する迄には人のお話も立派に聞こえる様な耳になり、普通人と共に女学校や中学校に入学できる」というのは飛躍しているのではないかと、口話法が聾啞教育の諸問題を解決する万能薬と捉えることに警鐘を鳴らしたのである⁹⁵。そうした高橋の考えに触発され大阪市立聾啞学校の中でも手話と口話の併用の機運が高まり、「大阪市立聾啞学校は口話法を排除するものではない。児童の

⁹⁰ 大阪毎日新聞「雑録 はじめて開演した聾啞者のお芝居」日本聾啞協会編『聾啞界』第43号、1928年、59頁。

⁹¹ 松永端『ORAパンフレット第2編 聾啞教育と演劇』、大阪市立聾啞学校、1932年、9頁。

⁹² 藤井東洋男「聾啞教育に於ける心の方法」大阪市立聾啞教育後援会編『聾啞教育研究叢書 第1集』1929年、194頁。

⁹³ 北野孝一「哀しき風景を観て」、大阪市立聾啞学校校友会他編『会誌』第8号、1931年、25頁。

⁹⁴ 高橋『宗教教育に就いて』34頁。

⁹⁵ 高橋「『聾啞者は宗教的情操に乏し』といふ」124頁。

素質を知ってこれに応ぜよと主張するのである」とし⁹⁶、1932（昭和7）年4月から手話法に加えて口話法の学級を導入し⁹⁷、そして児童の素質に合った適性教育の提供を骨子とする「ORAシステム（大阪市立聾啞学校法）⁹⁸」が成立をみたのである。これは、同校の教員大曾根源助の米国視察や藤井東洋男の欧州視察、また1927（昭和2）年から始まった大阪市立聾啞学校手話法研究会の研究成果を基盤に、「口話に適するものは口話法にて、適しないものは手話法にて一人の落ちこぼれの無い教育謂ゆる適性教育」とする学級編成の基準のことであり⁹⁹、1932（昭和7）年10月に開催された大阪市立聾啞学校十周年記念祭¹⁰⁰の場で外部に向けて公表した¹⁰¹。具体的には、予科（現在の幼稚部）では感覚や簡単な手話、口話、指文字の混合を使った保育が行われ、その時にその幼児の適性は何であるかが観察される。そして初等部（現在の小学部）に進学すると、観察結果に鑑み、口話のA組、口話と指文字と手話を混合して使うB組、手話と指文字のC組に編入される¹⁰²。しかし、情操教育については口話による指導では限界があり、A組であっても修身（現在の道徳）の授業では手話を採用していた¹⁰³。このように、感情や情緒の涵養、そして人格陶冶を目指す点においては口話法よりも手話法が適していると考えつつも、口話法を完全否定せず、全ての聾啞児の教育を保障するためにその両方を組み込む適性教育を同校の指針とした。なお、余談ながら、1933（昭和8）年1月27日から4日間開かれた全国盲聾学校長会議においても、「全国各聾啞学校ニ於テハ、聾児

ノ口話教育ニ奮闘努力シ研鑽工夫ヲ重ネ」と口話法を国是とした鳩山文部大臣の訓示に対し¹⁰⁴、3日目の答申案審議にて高橋は意見開陳を求め、聾啞児は一人の落ちこぼれが出ることが無いよう上記の適性教育を施すことを力説した¹⁰⁵。その前日、大阪で夫の帰りを待っている妻の醜子に宛てた書簡にもあるように「我ハ、大臣ハジメ当局ノ認識不足ヲタダス方」と自分の役割を自覚し¹⁰⁶、口話法を推奨する大臣や当局に対して「口話の能を有するものもあり、手話の能に長ずるものもあり、指字に適するものもある」と見極めた聾啞児の適性に応じて必要な教育を提供する、適性教育の理念を胸に異議を唱えたのである¹⁰⁷。

IV-3 聾啞学校のあり方

最後に、高橋は大阪市立聾啞学校をどのような学校にしたいと考えていたのだろうか。同校に対する学校観が分かるところを『宗教教育に就いて』の文中から引用する。

普通の児童等が、今日は帰ったら誰と何して遊ぼうと考えつつ終業の鐘を待って登校の時は又異なった元気で校門を出るのに反し、聾啞の児童たちは学校へ来る時は早く友達に会いたさに急いで来ますが帰る時はなかなか帰ろうとしません。家に帰っても近所にそう沢山の聾啞者も無ければ同志の遊ぶ相手もなく話相手は勿論ありません。思いのままに話も出来、又何の心おきなく遊ぶ事のできる学校は、まさに彼等にとっては真に自由な楽天地であります。（中略）それ故学校はいわゆるしかつめらしい学校ではなくして、彼の子ども達の為には家庭の如き温かみのある楽しい嬉しい学校でなければなりません¹⁰⁸。

⁹⁶ 五代五兵衛翁頌徳会『五代五兵衛』155頁。

⁹⁷ 日本聾啞教育会「全国聾啞学校口話手話状況一覧 昭和8年5月20日」65頁。

⁹⁸ ORAとは、「大阪市立聾啞学校」をローマ字で書いた「Osaka RoA gakkou」を略称したものである。

⁹⁹ 高橋潔「藤井東君の面影」藤井ツヤコ編『聾教育に関する論文集 藤井東洋男遺稿 随筆・書簡』、藤井東洋男遺稿刊行会、1955年、154頁。

¹⁰⁰ 盲聾分離後、大阪市立聾啞学校が開校してから10年目を祝う記念祭である。

¹⁰¹ 大阪市立聾啞学校校友会「大阪市立聾啞学校十周年記念祭概況」大阪市立聾啞学校校友会編『会誌』第9号、1932年、60-61頁。

¹⁰² 五代五兵衛翁頌徳会『五代五兵衛』155-156頁。

¹⁰³ 井上彰夫「ORAシステム」、大阪市立聾啞学校編『研究紀要』第26号、1994年、61頁。

¹⁰⁴ 財団法人聾教育振興会「文部大臣訓示」西川吉之助編『聾口話教育』第9巻第3号、財団法人聾教育振興会、1933年、4頁。

¹⁰⁵ 樋口長市「論説 文相訓示の解釋方とその遵奉方」山岡勘一編『聾啞教育』第50号、日本聾啞教育協会、1939年、3頁。

¹⁰⁶ 川渕依子『手話讚美 手話を守り抜いた高橋潔の信念』、サンライズ印刷、2000年、303頁。

¹⁰⁷ 樋口長市「論説 文相訓示の解釋方とその遵奉方」3頁。

¹⁰⁸ 高橋『宗教教育に就いて』41頁。

聴児は自宅の最寄りの学校へ通うのに対し、聾唖児は自宅の徒歩圏内に聾唖学校があるケースはほとんど無く、多くの場合は遠方から電車や市街を走る市電に乗って通学するか、遠方すぎて通えない聾唖児は聾唖学校に併設する寄宿舎に入舎する 경우가多かった。そのため、自宅の近所に住む同年齢集団と交流する機会があまり無く、どちらかといえば、手話で意思疎通が可能な聾唖学校の友人と一緒に楽しい時間を共有することに喜びを見出すことが多かっただろう。実際遠距離のあまり寄宿舎に入舎する児童生徒も少なくなく、1925（大正14）年度のときは、315名中の2割にあたる児童生徒63名が寄宿舎に入舎していた¹⁰⁹。そうした聾唖児の実態から高橋は、学校をただ勉学に励む場ではなく、一日の大半を過ごす場として、一家団欒の空気を共有できる場でもあるべきだと考えていたのである。その一方、口話法を採用した聾唖学校の中には、閉塞的で窮屈な雰囲気醸し出す学校が少なくなかった。京都府立聾唖学校、京都市立盲学校の両校校長であった岸高丈夫は、同校に口話法を導入した際の弊害として、聾唖児は「手話を禁じ口話を強いる校長や教員や父兄に対しては少しも感謝の念を持たず、又親しみを感じず寧ろ警官の様にしか思って呉れない」「私が十ヶ年間発語教授を強制したが父兄からは感謝されたが児童生徒からは少しも感謝されず寧ろ警官視された」ことを回想している¹¹⁰。口話法を導入した聾唖学校では、発音や読唇の成績を少しでも良くしたいという気持ちが強いあまり、聾唖児が少しでも手話を使うことに敏感な反応を見せた教員もいただろう。しかし、聾唖児にとっては、それが自分を見張っている警官のようだと思われたのかもしれない。また、とある口話法を採用する聾唖学校に勤めていた永原富は、北海道から自分の勤務校に入学してきた6歳のきこえない女の子の不遇を嘆いた。その女の子は「二年間の間ただむつかしい発音やつまらない読唇のお稽古を無理にさせられて、出来ないといったら叱られ叩かれ通して無邪気に遊ぶ暇さへ

なかった」のである。そして永原はとある出来事に遭遇した。ある試験のとき、その女の子が取った成績が他の人より悪かったのである。それを知った叔母は立腹し、永原の前であるにも関わらず、その女の子をむごたらしく叱った。怒り狂う叔母に対し、女の子はただ手を合わせるしかより他なく、助けを求めるように永原を見てきた。やがて叔母は根負けし、その女の子はその聾唖学校を辞めさせられ、地元の北海道に帰されたのである¹¹¹。その理不尽な出来事に心を痛めた永原は、口話法の行き過ぎを疑問視し、やがてその聾唖学校を退職し大阪市立聾唖学校へ転任した。口話の成績が芳しくない聾唖児にとっては、いくら努力を重ねても発音発語や読唇の習得には限界があり、それでも厳しく指導してくる教員たちがいる聾唖学校では緊張状態を解くこともできず、とても自由気ままで快適に過ごせるような環境ではなかったのである。高橋が言う「治療所」「矯正所」は、こうした教員集団が作り上げる緊張感の漂う空気からイメージされたものであろう。このような治療所や矯正所ではなく、聾唖学校は家庭的でありたいという考えは、高橋だけでなく大阪市立聾唖学校全体の中で共有していた。同校の教員でもあり、先述した劇団車座を立ち上げた立役者でもあった藤井東洋男は、「我々はいわゆる教師としてではなく聾唖者の全生活の伴侶として日々働いている」と家庭的な立場を強調した¹¹²。また同校の教員であり劇団車座にも深く関わった松永端は、『聾唖教育と演劇』の中でこう述べている。きこえる子どもの場合は最小単位の社会集団である「家庭」の中でまず自分自身を発見、つまり家庭は性格や人格の形成が行われる最初の場であり、成長に伴い「地域（街）」、「学校」へ活動範囲を拡げる中で、その場所で生活するために新しい人格形成が行われる。しかし、聾唖児にとっては「家庭で得られるだけのもの、街で得られるだけのものを得るには至極不満足な境涯に置かれる」とし、愛といった家庭や街からの恩

¹⁰⁹ 大阪市立聾唖学校『大阪市立聾唖学校要覧 大正十四年度』、1925年、14、18頁。

¹¹⁰ 岸高丈夫「私の聾教育観」、山岡勘一編『聾唖教育』第65号、日本聾唖教育会、1940年、2頁。

¹¹¹ 永原富「思ひ出」大阪市立聾唖学校校友会編『会誌』第9号、1932年、7-8頁。

¹¹² 藤井東洋男「日本聾唖教育会第十四回総会記事 自由研究発表 聾唖教育と演劇」、山岡勘一編『聾唖教育』第47号、日本聾唖教育会、1938年、42頁。

恵を十分に享受しているとは言い難いとした。人格形成のために家族や地域から与えられるべき「欠けているもの」、つまり「話」が不十分であり、「聞く」「話す」という会話の行為がやがて聾啞児の人格陶冶に大きく寄与すると考えた。劇場のように、先生達は、母、父、兄弟、友人または隣人となり、聾啞児と「話」を交わして育てる家庭や地域（街）の機能を聾啞学校が担うことが必要であり、その場を松永は「聾啞の家」と呼んだのである¹¹³。また松永は『聾教育の主観と対象』の中で、口話法を採用する聾啞学校は「聾啞病院」の看板をかかぐべしだ、と主張した。その理由について、聾啞者は不具者であり、聴者と同等の能力を与えるというのが聾啞教育なのだとしたら、聾啞者を不具者と認めた時点で、その不具を除去するために治療を施さなければならず、それはもはや学校ではなく病院であるとした¹¹⁴。口話法はその出発点として聾啞者を「不具者」と設定しているが、一方高橋は「生活者」を出発点に設定した。『宗教教育に就いて』に記述がみられるように、聾啞者は彼等の言語である手話を精神的生活の糧として営む生活者であり¹¹⁵、「聾啞の家」のごとく家庭機能を包含した温かみのある生活空間の中で、「思いのまま話もでき、又何の心おきなく遊ぶ事の出来る学校は、まさに彼等にとっては真に自由な楽天地」と書かれている学校こそ¹¹⁶、高橋が目指した学校像であった。事実、楽天地の存在は全国各地に知れ渡るようになり、外部の聾啞者にとっても同校は安らぎのある憩いの場となったのである。1928（昭和3）年3月末から開かれた第三回日本聾啞協会総会が同校で行われた折も、その時は全会員の四分の一にあたる265名もの大勢の会員が出席した¹¹⁷。総会に出席し帰ってきた者から土産話をきき、総会は終わったにも関わらず、わざわざ大

阪を訪ねた聾啞者もいたほどである¹¹⁸。口話法の聾啞学校から排斥の対象にされて続けてきた聾啞教員たちもまたその恩恵を浴びた。1929（昭和4）年7月29日、全国の聾啞学校に勤める聾啞教員で構成される日本聾啞教員協会が成立し、初回となる第一回研究会が奈良の竹林院で開かれたときも、高橋は列席し本会を奨励したのである¹¹⁹。その翌年8月24日に京都の天龍寺で開かれた第二回でも講師として招聘された高橋の講演をきき、その後手話研究について話し合うなど、口話法が手話と聾啞教員を次々と蹂躪する中で、高橋は全国に散らばる聾啞教員を擁護し続けた。このように高橋は、校内外共に聾啞者から認められる家庭的な学校こそ、聾啞児にとって手話によって感情や情緒が養われる唯一の場であると考えたのである。

これまでに、高橋が聾啞教育で理想とするものを著書『宗教教育に就いて』から三箇所を引用して述べてきた。急激に全国へ普及する口話法に対して高橋は、聾啞児について知り心理研究を重ねた結果、聾啞児の感情と情緒は言葉によって養われることが可能であること、そしてその感情涵養とその先にある人格陶冶は口話ではなく手話により達成されること、そして生活者として過ごす聾啞学校は家庭のように温かみの溢れる学校であることが必要だと考えたのである。

V 貢献してきたその他の東北学院卒業生たち

ここまで、東北学院卒業生の中で特に高橋潔に焦点を絞って述べてきたが、高橋以外の卒業生も様々な分野で大阪市立聾啞学校に貢献し恩恵をもたらしている。例えば1919（大正8）年に東北学院を卒業後、1920（大正9）年に同校に奉職し、高橋の後を継いで七代校長に就任した大曾根源助もその一人であろう。大曾根もまた、爆発的に全国へ普及する口話法に接し、口話主義者の唱える「聾啞学校を卒業した聾啞者は聴者と同等になれる」という主張につ

¹¹³ 松永端『ORAパンフレット2 聾啞教育と演劇』、大阪市立聾啞学校、1932年、1-4頁。

¹¹⁴ 松永端「聾教育の主観と対象」大阪市立聾啞学校校友会他編『会誌』第5号、1928年、171-172頁。

¹¹⁵ 高橋『宗教教育に就いて』38頁。

¹¹⁶ 高橋『宗教教育に就いて』41頁。

¹¹⁷ 日本聾啞協会「総会概況」藤本敏文編『聾啞界』43号、1928年、14頁。

¹¹⁸ 高橋潔「後援会欄 感謝之辞」大阪市立聾啞学校校友会他編『会誌』第5号、1928年、95頁。

¹¹⁹ 藤本敏文「日本聾啞協会第一回研究会概況」藤本敏文編『聾啞界』48号、1929年、30-32頁。

いて懐疑的な考えを持っていた。そのため、1922（大正11）年9月から1924（大正13）年6月までアメリカ他3ヶ国に留学した川本宇之介が帰国後、早速上京して川本に面会し質問を投げかけたが、明確な返答が得られなかった¹²⁰。「ただアメリカでは実際そうだ」と言われた大曾根は、自分の足で現地を視察することを決意し、1929（昭和4）年9月に出張し1930（昭和5）年3月に帰港するまでの約6か月間、アメリカで合計51校の聾学校を視察した¹²¹。その視察結果は、帰国後1930（昭和5）年中の大阪市立聾学校手話法研究会にて報告された¹²²。また同年6月22日、日本聾教育会近畿部会第一例会でも報告され¹²³、その2年後の1932（昭和7）年10月に開催された大阪市立聾学校十周年記念祭でも、視察結果をORAパンフレットの冊子に収めて配付されたのである。大曾根の視察報告については、上記の三点の史資料が現存しているが、内容に大きな差異は無いものの、最後のORAパンフレットの冊子にだけ「結論」の章が挿入されており、そこには米国視察を通じた大曾根の口話法に対する結論が述べられている。大曾根にとって長年の疑問点であった「口話法で卒業した聾者は聴者と同等か」を払拭すべく、アメリカの聾学校卒業生を対象にした質問調査を行った。その結果、口話が実際に役に立つのは約2割位の卒業生で、また聾学校を卒業し仕事や結婚生活に入ると口話を使う場面が少なくなり、逆に手話を知らなければ生活できないという不便さがあることが分かったのである。アメリカの聾者が実社会の中で自活するにあたって、卒業し就職や結婚した後も安定した生活の営みが可能であるかと

というのが重要な課題であり、それを口話法で解決できないため「実用にもならぬ口話法のために長い努力は、その進路を変えて思想的に内容を充実させなければならない」と結論づけた¹²⁴。このように、大阪市立聾学校が推進する、感情や情緒を育てるための手話法は、聾児の卒業後における安定した生活を保障するという観点も取り入れることになり、同校の手話法の邁進に自信を深める補強材となったのである。「卒業後も自活できるように支援が必要」と考えた大曾根は、36年間同校に勤務する中で、卒業生のアフターケアにも力を注ぎ、270組の結婚式の仲人を務めた¹²⁵。また、1933（昭和8）年に設立した大阪聾基督教教会では高橋と共に顧問となり、教会成人科と人事相談部で成人した聾者の対応を行った。その実態はキリスト教の伝道というよりも聾成人の相談相手となるケースが多く、大曾根は生活の困りごとや悩みの相談相手を引き受けてきたのである¹²⁶。また卒業生の職業生活の保障のために、職業開拓や就職先を訪問するなど卒業後の延長線にある就労先の確保にも奔走していた¹²⁷。また、東北学院卒業生であり同校教員であった加藤金平は、聾児のために教職を辞するという英断をしている。昭和恐慌が尾を引き聾者の職業問題が苦慮していた折、1937（昭和12）年ダイヤモンド研磨工業株式会社の池田健六専務取締役の計らいにより、聾の青年と共に多数の大阪市立聾学校の卒業生が同社へ雇用されることになった。その折、池田専務から付添、監督、精神的指導者として一人入社してほしいという懇願に対し、加藤は自分から進んで手を挙げ、その役割を引き受けたのである。まもなく加藤は教員を退職して同社に入社し、卒業生の傍らで工具の扱い方や作業手順について手話通訳を行

¹²⁰ 大曾根源助「米国に於ける聾教育」大阪市立聾学校校友会他編『会誌』第7号、1930年、139頁。

¹²¹ 視察の道中、ヘレン・ケラーに面会し当時の日本の指文字について助言をもらった。帰国後、大阪市立聾学校の同僚と共に1931（昭和6）年「大阪市立聾学校式指文字」を考案し、同年の第七回日本聾教育研究大会にて発表した。これが現在我が国で広く使われている指文字となった。

¹²² 大阪聾教育後援会「研究会記録」大阪市立聾学校校友会他編『会誌』第7号、1930年、202頁。

¹²³ 関西聾教育会「日本聾教育会近畿部会第一回例会」岸高丈夫編『聾教育』第2号、1930年、41頁。同冊子には、大曾根源助の講演内容が掲載されている。

¹²⁴ 大曾根源助『ORAパンフレット第3編 米国に於ける聾教育』大阪市立聾学校、1932年、25-27頁。

¹²⁵ 朝日新聞「いま話す苦勞の半生 指文字を考案」『朝日新聞大阪15版 昭和42年11月3日』1967年、15頁。

¹²⁶ 木村洋一郎書簡、2017年、7頁。

¹²⁷ 斎藤富義「研究 大曾根源助先生と指文字」大阪養護教育史研究会『大阪養護教育史研究』第6号、1987年、38頁。

うなどして支援した¹²⁸。また木村勝七郎は、1933（昭和8）年に大阪聾啞基督教会が設立された時、毎週土曜に行われる教会で催しをする「日曜学校」の日曜学校長となり運営に携わった。その中で、聾啞児が手話を学び自分の心の内を語れるようになると、自分が何故聾啞者になったのか、何故自分の思いが伝わらないのかと悩みを持つ生徒が現れ始めた。そうした生徒から話を聞きながら、木村は彼等の心のケアを施していったのである¹²⁹。こうした東北学院の卒業生の功績を考えると、大阪市立聾啞学校の教師たちは、学業以外の場面でも、生活や職業の安定した保障のために苦勞をいとわず身を粉にして働き、卒業したからといってその校門を閉ざすことなく、まるで我が子のように聾啞児のために尽くしてきたといえる。

VI まとめにかえて

本稿では、口話法が全国へ浸透する時代の中で、高橋潔を始めとする大阪市立聾啞学校に奉職してきた東北学院卒業生はそうした時勢にどのように反応してきたか、そして荒んだ心を持つ聾啞児にどのように向き合ってきたかを述べてきた。高橋を始めとする東北学院卒業生の根源にあったのは、聾啞児を不具者ではなく生活者とし、同等の目線で接するというヒューマニズムな視点を持っていた点であろう。その視点は、聾啞児の感情や道徳観念を育てるために、聾啞児の外れた行動を正す「げんこつ」という対処療法や、聴者との同化を目指すために発音や読唇を強いる口話法という、外界からのアプローチではなく、聾啞児者の言葉である手話という世界を基盤に、内面からの心理的成長を萌芽させるというアプローチにつながったといえる。そうした内面からのアプローチは、東北学院の精神的基盤であるキリスト教の宗教的思想による影響があった可能性を疑う余地は無い。もしそうした宗教的思想を高橋が全く持っていなかったら、赴任後衝撃的な場面

であった「あいつらは犬猫同然だからげんこつが効く」と豪語する同僚に対して同調の立場を取るか、または関係ない事に巻き込まれないよう静観していたにちがいない。やがて口話法が全国を席卷し「手話法の最後の牙城」と嘲笑を受ける中で、大阪市立聾啞学校は手話を捨て去ることなく、むしろ同校の肝心要としてその攻勢から守り続けてきた。それは決して口話法の急勢力に対する反骨心からではなく、「地の塩、世の光」「LIFE、LIGHT、LOVE」という宗教心を持った東北学院の卒業生たちが、同校に奉職し、聾啞児の感情や情緒をどうやって育めばよいのか、学校はどうあるべきなのかという問いに真摯に向き合ってきた結果、聾啞児は手話による御伽噺から道徳とは何かを学び、手話劇で琴線に触れられながらも自身の感情や情緒を育み、第二の家庭とも言うべき「聾啞の家」の中で心豊かな人格を陶冶していくという、手話を心の糧とする彼等の幸せの希求こそが、大阪市立聾啞学校の取るべき羅針盤として確立されたのである。

¹²⁸ 加藤金平「ダイヤモンド研磨株式会社に入社せる聾啞者諸君と私」福島彦次郎編『会誌』第13号、大阪市立聾啞学校校友会他、1937年、20頁。

¹²⁹ 木村洋一郎書簡、2016年、4頁。

わが国ろう教育の曙光と大阪市立聾啞学校 ～高橋・大曾根からのメッセージ～

大阪ろう就労支援センター理事長

前田 浩

1. はじめに

1878（明治11）年の京都盲啞院開校をもって、日本最初のろう教育は始まった。それは障害児教育の夜明けをも意味する。しかし、ろう教育は忽然と京都の地に出現したのではない。幕末の欧州視察団、開明的な行政幹部、市井の篤志家らによってその前史が切り拓かれ、やがて京都盲啞院、樂善会訓盲院、函館訓盲院、長崎盲啞院、拾石訓啞義塾^{ひろいし}そして大阪盲啞院等、各地の盲・ろう教育機関の誕生につながっていった。学校運営における財政安定、児童生徒の確保、教育行政の認知等の課題を抱えていた盲啞院（訓盲院）を守るために、ろう児らの学びの場をそれこそ死守するために先人はどのような労苦を重ね、創意工夫をこらしたのだろうか。

そして、ろう教育の命題として、ろう児にコミュニケーションの力を身につけさせ、社会的自立を促していくために言語指導が重視され、その方法論をめぐる熾烈な論争があった。いわゆる「手話・口話論争」であるが、本稿ではとくに手話法を排除せんとした口話法推進グループと、口話法・手話法いずれも含めて適性教育の実践を進めた高橋潔ら大阪市立聾啞学校教師団の動きを追いながら、日本におけるろう教育の成立と様々な課題について俯瞰し、あわせてコミュニケーション指導に関する流れについて検討していきたい。

2. 日本の近代化と先進者の群像

1862（文久2）年 福沢諭吉ら幕府の第1回遣欧使節 仏英蘭露葡を視察

ロンドン聾学校視察より

「啞院は啞人を教ゆる学校なり。啞子数百人を集めて語学、算術、天文、地理学等を教授すること尋常の学校と異ゆるなし。その法初めて院に入る者には指を以てエ、ピ、シ、26文字の記号を為すを教ゆ。（中略）他人の言ふとき、その唇、舌、齒、喉の運動を見、或いは之を触れ、その運動の機を效て音声を発することを学ばしむ」

福沢諭吉『西洋事情』明治2年

幕末に、幕府の遣欧使節の一員としてフランス、

イギリス、オランダ等の視察に随行した福沢は、帰国後『西洋事情』を著し、ロンドン聾学校を視察した時のABC等の指文字や発音指導の様子を克明に記述している。福沢の観察眼の鋭さがうかがえる貴重な記録である。

1853（嘉永6）年、ペリーは米国大統領国書をもって神奈川沖に来航し、圧倒的な武力を背景に幕府に開国を迫った。その動きは倒幕を企図する薩摩藩、長州藩にも伝わったが、開明の志士、吉田松陰らは欧州の政治経済文化の摂取の必要性を考え、密航を図るも叶わず、長州藩の青年志士5名いわゆる長州ファイブが松陰の志を引き継いだ。周知のように、長州ファイブは明治政府樹立以降、帰国後各方面で日本の近代化を推進する中心メンバーとなっていくのである。

1863（文久3）年 長州ファイブ、英国へ密航

井上 馨^{かおる}（外務大臣）
遠藤 謹助^{きんすけ}（造幣局長）
井上 勝^{まさる}（鉄道庁長官）
山尾 庸三^{ようぞう}（工部卿 樂善会訓盲院）
伊藤 博文（初代総理大臣）



長州ファイブ記念写真（ロンドン市撮影）

山尾はのちに東京における盲啞院開校へと奔走す

るキーパーソンとなるが、そもそものきっかけはイギリスのろう者たちとの出会いであった。山尾はグラスゴー造船所で造船術を学んだが、造船所で働く人たちの中にろう者が混じっていた。堪能なイギリス手話で話し、英語で筆談するろう者の姿に、山尾は衝撃を受けたと述懐している。

当時の日本には学校もろう者コミュニティもなく、よって手話が言語として形成されようもなく、ろう者たちの大多数は就労や生産の場からもはみ出されていた。

盲啞学校を創立せられんことを乞ふの書 1871年

(前略) 彼の西洋各國の如きは不然、盲啞瘖啞と雖も救恤の方法、治く及ぶのみならず、又之を學校に入れ、文學算術工芸技術、各適宜の教導を施し(中略)曾て英國に在て造船所に入り、修行中親しく見るところ同所の図引大工鍛冶等の内啞なる者も亦不少人と談話応接皆指頭を発軀し、文形を模作して之を弁す(中略)是無他教育の善く及ぶところ以て彼國文教隆盛の景況推知すべし、依 是見之我國の盲聾と雖も教育宜を得ば亦何ぞ然らざらん 然るに是をして自を存する能はず饑寒に陥らむ豈皇國の欠典と謂わざる可けんや 故に今西洋諸國の式に倣ひ、先ず盲學啞學の二校を創建し、一校毎に男女二局を分ち教師を外國に招き、以て天下の盲啞を教導し、適宜の工藝を授與し、其成立に 隨ひ盲男盲女啞男啞女各適意婚嫁するを許し(中略)是れ無用を転じて有用と為し(中略)仰ぎ願はくは臣の鄙衷を御洞察被為在前 文盲啞の二校創建即今御許容の程奉希望候 (後略)

頓首謹言

明治四年辛未九月 工学頭 山尾庸三

『東京盲学校六十年誌』東京盲学校 1935年

山尾のその後の行動を追っていく。工学畑の技術者志向であった山尾は、帰国後、工部省設立を明治政府に上申し、工部卿に就任し、東大工学部の前身、工部大学校も設立させた。そのかわり「盲啞学校を創立せられんことを乞ふの書」、すなわち盲啞学校設立の必要性を述べた建白書を1871(明治4)年、明治政府に上申している。その格調高い建白書から、単なる憐憫の情ではなく、近代日本を築く上で盲人・ろう者の教育は国家政策上も必須であるという先進的な山尾の思想が読み取れる。

また、同建白書の後半で、山尾は盲人・ろう者の



楽善会訓盲院(東京・築地)
図説盲教育史事典 鈴木力二著 日本図書センター 1994

婚姻も奨励すべきと主張している。これは障害者を慈善や保護の対象としてしか見ない障害者観から抜け出している意味でも、近代化の息吹を感じさせ、注目に値する。

杉浦護(のち内務官僚)は1864(元治元)年の第2回遣欧使節からの帰国後、東京にて外国人宣教師たちと楽善会を設立し、訓盲院設立に向けて動き出した。設立への動きは外国人宣教師らが先導していたが、山尾庸三、木戸孝允ら明治政府の要人の援助を得て、1880(明治13)年、楽善会訓盲院は東京の築地に創立された。後援者には井上馨、郵便制度の基礎を築いた前島密、山県有朋、渋沢栄一らの名も見られる。

当時の盲啞院がかかえる最大の課題は財政確立であった。盲ろう教育が公教育として認可されていない中で、学校経営者は教員の俸給、施設設備の維持費等を寄付金から捻出するしかなく、その寄附金は自らの手で集める他なく、それにかかる労苦は想像を絶するものであったろう。楽善会訓盲院が設立された1880(明治13)年の入学生徒は2名であり、山尾が麻布区(現、港区)に働きかけ勧誘した盲生に、麻布から築地の訓盲院までの2時間前後付き添う保護者の負担も大変なものであったが、山尾らは通学に供する人力車の費用も寄付していたという。政府高官など多くの政財界人のバックをもった楽善会訓盲院ですら財政難に悩まされ続けた。盲児・ろう児の通学負担を軽減するために建てられた寄宿舎もその運営が財政を圧迫していた。こうした財政難の中から1885(明治18)年楽善会訓盲院は文部省直轄学校となり、日本初のパブリックな障害児教育機関はこうして生まれた。

3. 古河太四郎と日本初の盲ろう教育施設の創立



古河太四郎
(京都府立盲学校蔵)

京都盲啞院の創始者古河太四郎は、上京区第19区副区長熊谷伝兵衛からの、隣家にいるきこえない姉弟の教育ができないものかという提案に賛同し、盲児・ろう児の教育施設の設立に向けて奔走した。榎村正直知事の後押し、京都の寺社、豪商、町衆の寄付を得て、

1878(明治11)年5月、京都盲啞院の開校式が大丸呉服店の1階を借り切って挙行された。日本最初の障害児教育施設の誕生であり、それはド・レバガフ

ランスのバリーに世界初の聾学校を開いた1755年に遅れること120年であった。この開校式に関する「大阪日日新聞」の報道を引用する。

京都盲啞院の開校式

1878（明治11）年5月24日の午前9時に開く予定であったが、折からの雨天にて盲の子どもと父兄の便宜を考えて、11時頃まで延ばした。式場は、大丸呉服（＝大丸百貨店の前身）1階。来賓に、神官僧侶、上下京区総区長、横村正直知事らが臨席。生徒数は聾生31名、盲生17名の48名。古河太四郎が黒板に「動物ノ中何故ニ人ヲ貴シトスルヤ」と書いて、山川爲次郎（12歳）と山口善四郎（12歳）に質問した。山口善四郎は手勢（手話）で「人ハ万物ノ靈トテ感覚等他物ニ卓越スルガ故ナリ」と答えた。次に古河太四郎が質問した。「人間ノ智恵ハ何ニヨリ長スルヤ」これに対して、山川爲次郎が手勢にて「必学ナリ」と答えた。参加者一同が驚く中で、さらに二人のろう児が、黒板の「祝」の文字を示して「いわう」「いわい」と発音して感動を呼んだという。

教育関係者の期待を担って創設された京都盲啞院であったが、1890（明治23）年には盲啞院財政は破綻し、教職員のほぼ半数が人員整理の対象となり、43名の生徒が退学を余儀なくされた。その間古河は、商店主、知己に借財をしながら財政の立て直しに努めるも多額の債務を抱え、院長職を解任されたという（岡本稲丸『近代盲聾教育の成立と発展』（NHK出版 1972））。1900（明治33）年、大阪の商人五代五兵衛に請われ大阪盲啞院の初代院長に就任するまで、古河には失意の日々であったろう。

なお、目の見えない子ども、きこえない子どもそれぞれの教育内容と方法が全く異なるものであるのに、東京の訓盲院、京都盲啞院等のように、明治期の障害児教育機関が盲学校・聾学校と別々の施設形態とならなかったのはなぜだろうか。前述の山尾庸三の建白書に戻ってみると、

「今西洋諸國の式に倣ひ先ず盲学啞学の二校を創建し一校毎に男女二局を分ち教師を外國に招き以て天下の盲啞を教導し…」とある。

京都府知事横村に上申された遠山憲美の京都盲啞院の設立建議意見書にも、次の文言が見られる。

「本府下既ニ貧院ノ設ケアリト今要スルニ訓盲院訓啞院ノ二院ヲ設立在ラセラレンコトヲ思フニ尋常小学既ニ完全ヲ告ケ癡狂院貧院又之ニ次キ而レハ現ニ盲啞ノ二院相並ヒ立タサルヲ…」

山尾、遠山ら当時の教育関係者は、盲児・ろう児の教育施設がそれぞれ独立して設立されるべきと考えていた。盲啞院設立当時、盲児とろう児が同一施設で生活する形態となったのは経済事情によるものであり、まずは盲児・ろう児の学びの場を実現せんとする現実対応が優先されたであろう。

以上、東京、京都を中心に草創期の盲啞院について記述した。一方、宮城県仙台の東北学院を卒業し、中学教員を経て、1914（大正3）年に教員高橋潔が訪れた大阪の盲啞学校の初期形態はどのようなものであったのだろうか。

4. 五代五兵衛と大阪盲啞院



五代五兵衛

五代音吉

（大阪府立中央聴覚支援学校蔵）

大阪盲啞院の成立過程については、『近代盲聾教育の成立と発展』（岡本稲丸1972）、『五代五兵衛』（五代五兵衛頌徳會1937）の著作に詳しい。創立者五代五兵衛は自身15歳に失明しているが、父の病死後、銭湯経営、土地不動産屋を成功させ、没落同然の五代一家を立ち直らせた立志伝中の人である。五代五兵衛の事業成功の陰には物心両面から盲人の兄を生涯支え続けた末弟、五代音吉（のち六代目五代五兵衛家督相続）の存在があった。当時京都盲啞院長を解任されていた古河太四郎の講演を聴き、胸



大阪盲啞院 第2回卒業生（明治39年）

（大阪府立中央聴覚支援学校蔵）

を揺さぶられた五代五兵衛は私財をなげうって1900（明治33）年、古河を初代院長に招聘して私立大阪盲啞院を創立した。しかし、公教育ではなくまた私学教育への補助金も全くない中、盲啞院経営は薄水を踏むに等しかった。

五代五兵衛の大阪盲啞院に関する構想は、今日の社会福祉法人的な施設形態に近いものであった。尋常科と技芸科の2コースとして、炭団製造や印刷の実習を行う授産場、治療等を行う病院、そして盲啞院経営の基本となる資金調達^{たどん}の機関としての有隣舎^{ゆうりんしや}を擁する総合施設といった雄大な構想をもって、五代五兵衛は「私立大阪盲啞院設置願」を大阪府知事に提出している。貧困家庭の盲啞生を救済するために、食料、衣服、学用品を適宜支給する有隣舎の存在は五代と古河のユニークな着想である。毎月2銭を醸金する有隣舎の会員には1枚2銭の割引券を進呈、10銭醸金の会員には割引券5枚と無期限の賛成員証を交付するとの触れ込みで、商家、会社、病院等と賛成会加入の特約を結んでいった。会員となった市民は特約店で割引券使用による買い物ができ、特約店には顧客を増やすメリットができ、盲啞院は財政面で助かっていくという一種のクーポン券を五代らは普及させたのであるが、実利的、合理的な発想にもとづく商法であろう。

大阪盲啞院 生徒数の推移（岡本福丸、前掲書）

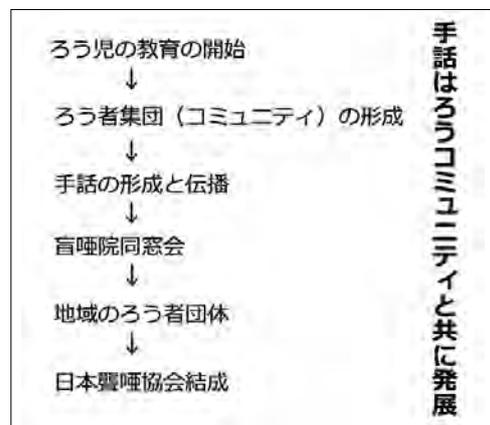
明治34年	盲児 6名	聾児 46名
35年	盲児32名	聾児 72名
36年	盲児33名	聾児103名
37年	盲児36名	聾児101名
38年	盲児50名	聾児105名
39年	盲児50名	聾児117名
40年	盲児70名	聾児101名

さて、1900（明治33）年に盲児3名、ろう児22名でもって開校した私立大阪盲啞院であるが、年々児童数はふくれあがる一方であった。子どもが増えたら学級の増加認定、教員の増員が検討されるという今日の制度などありえなかった時代であり、教職員の業務過多による疲弊度も増していった。日清戦争、日露戦争と相次ぐ戦役で国民経済は疲弊し、松方デフレが敷かれていた時期には、賛成会の資金集めも停滞した。こうした財政危機の中、五代五兵衛らは1904（明治37）年に「私立大阪盲啞院資格変更御願書」を上申している。

大阪市からの月額100円の補助金交付程度では経営状況は好転しようがなく、殊に生徒数が170名近

くふくれあがった1906（明治39）年には盲啞院も限界状況を迎えていた。五代、古河は「私立大阪盲啞院公立御引継至急懇願書」をもって、山下重威^{しげたか}大阪市長に請願する。大阪市参事会にて、山下市長は「（盲啞院は）市の補助なくしては解体せざるべし。故に必竟市に引継ぐ方可なりとの事なり」「現在の盲啞教育を市の経営に移し…」と力説し、かくして1907（明治40）年に私立大阪盲啞院は大阪市に移管され、「市立大阪盲啞学校」となる。悲願であった公立の聾啞学校の実現であり、障害のある子どもの公教育を自治体が担う意味で大きな前進であった。

- 1878 京都盲啞院
 - 1880 楽善会訓盲院
 - 1892 函館訓盲院
 - 1898 長崎盲啞院 拾石訓啞義塾
 - 1900 大阪盲啞院
 - 1878～1911（明治31～44） 25校 新設
 - 1912～1923（大正 1～12） 12校 新設
 - 1915（大正 4） 日本聾啞協会 発会式
- 各地にて日本聾啞協会の支部が結成



上の表《上》のように明治末までに約30の盲啞院（訓盲院）が新設されたが、ろう者が共に学び生活するコミュニティが確立されると、手話で結ばれたろう者の共同体が卒業後も同窓会として保持されるようになった。特に東京・京都・大阪の同窓会役員を中心に、ろう教育と福祉の向上を推進する趣旨にてろう者の全国組織の設立が起案され、1915（大正4）年京都市立盲啞学校にて日本聾啞協会が発足した。特筆すべきは、ろう教育機関（盲啞院）の創立がろう者コミュニティを生み出し、当事者団体につながってゆき、さらに全国組織に発展していったという他にあまり例を見ない現象である（上の表《下》）。

なお、日本聾唖協会総裁に山尾庸三、会長には東京聾唖学校長の小西信八のびはちと、三役はろう者当事者でなく聾唖学校長が就任したが、それは当時の障害者が置かれていた状況の反映でもあった。



高橋 潔
(大阪府立中央聴覚支援学校蔵)

さて、青年高橋潔は、この日本聾唖協会結成の前年1914（大正3）年に、大阪市立盲聾学校に就任した。そこで同校の卒業生で一足先に教員となっていた福島彦次郎と出会い、ろう児に囲まれ、ろう教員たちから手話やろう教育について学んだ。高橋はろう者の言語と文化の中で過ごす中で、ろう者に寄り添い手話を守る生き方を学んだであろう。高橋潔や大曾根源助が在学した当時の東北学院には、社会事業家の賀川豊彦、山室軍平ぐんべいらが来校してはキリスト教伝道を行っていたという。地域に入り社会的弱者を支えていく賀川や山室の生き方に感化された高橋、大曾根はマイノリティの言語として手話を捉え、社会全般にろう者と手話の存在を発信していった。彼らの足跡については後述する。

5. 盲聾分離への道

1923（大正12）年「盲学校及聾唖学校令」

草創期のろう教育の最大の課題は「財政確立」であったが、それに次ぐ課題は「盲学校と聾唖学校との分離」であった。1900（明治33）年の小学校令改正以降、一般児童の就学率が約90%に高まり、盲ろう教育も入学児童が年々急増し、狭隘化した校舎で盲児とろう児を教育することも問題視されていた。視覚障害と聴覚障害それぞれの教育の専門性が異なる中で、生活や学習空間の分離と専門教員の措置等が学校関係者の切実な願いであった。

1898（明治31）年にアレクサンダー・グラハム・ベルが来日し、彼の各地での講演は日本のろう教育関係者に大きなインパクトを与えた。ベルは米国におけるろう者の権利擁護、盲学校・聾唖学校の教育状況、教員待遇の改善、師範学校における専門教員の養成等を説いて帰国したが、ベルの示唆もあって翌年、東京盲聾学校校長小西信八が盲聾分離に関する意見書を文部大臣に上申し、1906（明治39）年には小西信八（東京）・鳥居嘉三郎（京都）・古河太四郎（大阪）の三盲聾学校長が公立の盲学校・聾唖

校の設置や盲ろう教育の義務化について牧野伸顕のぶあき文相に建議している。京都では鳥居嘉三郎とりい かせぶろう盲聾院長が「京都市立盲聾院を盲生と聾唖の二部に分離する」上申書を京都市長に提出し、1913（大正2）年に聾唖部校舎を新設して盲・聾校舎の分離が実現し、1925（大正14）年には、京都市立盲学校と京都市立聾唖学校とに完全分離された。



大阪市立聾唖学校 生野校舎（大阪府立中央聴覚支援学校蔵）

いっぽう、大阪市では盲学校及聾唖学校令を受けて大阪市立盲学校と大阪市立聾唖学校に分離し、1923（大正12）年、大阪市立聾唖学校は長堀の盲学校校舎から独立し、生野校舎として出発した。その年に高橋潔が聾唖学校6代校長に就任し、やがて手話擁護と適性教育を展開していったのである。

1878（明治11）年に日本初の盲聾院が出現して以来、教育関係者の悲願であった盲聾分離は、京都校等のように独立棟として果たされるまで30年前後の年月を要した。その後、盲学校、聾学校それぞれが子どものニーズに応じた教育を展開していくのであるが、今日というポイントに立つ私たちが聾学校の社会的役割を考えるにあたって、盲聾分離への足どりが示唆するものは大きい。

1923（大正12）年の「盲学校・聾唖学校令」で聾学校の設置義務が規定され、各都道府県にあまねく聾学校が設立されていった。しかし行政側の学校設置義務が課せられるも、子どもを就学させる就学義務は規定されなかった。そのため、学校教育を受けられる家庭環境にある子どもたちにしかその恩恵が受けられない不合理な状況が残され、けっきょく盲・聾学校の実質的な義務教育の出現には、戦後の1948（昭和23）年を待たねばならなかったのである。

6. 口話法の隆盛と「チーム高橋」

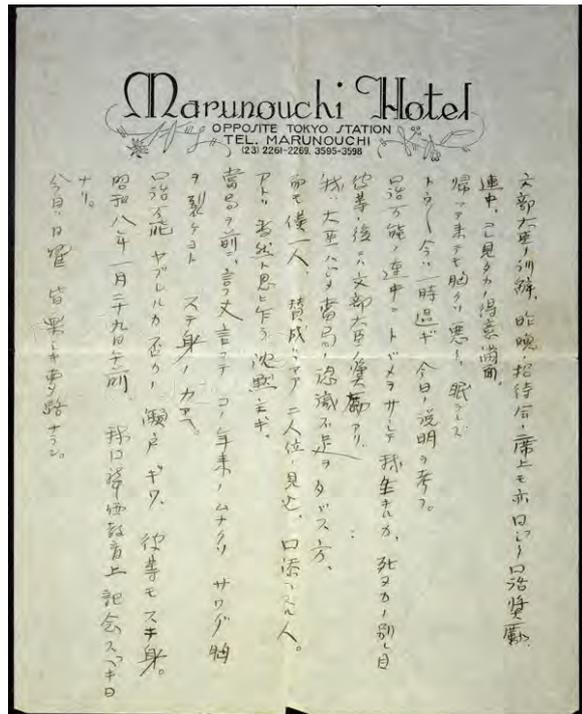
大正末期～昭和初期にかけて、口話教育が日本のろう教育界を席卷した。川本宇之介うのすけ（文部省編集局長、後に東京聾唖学校校長）、橋村徳一とくいち（名古屋市立盲聾学校校長）、西川吉之助よしのすけ（滋賀聾話学校校長）らが

日本聾口話普及会を設立し、手話法を駆逐するかのよう
に口話教育を全国津々浦々に広げていった。その普及会
発会式には、徳川義親、東京府知事、東京市長も臨席し、
1931（昭和6年）には聾教育振興会に発展した。

1933（昭和8）年東京で開かれた全国盲啞学校校長会
総会に、大阪市立校の高橋は病身の妻を残し、おそらくは
悲壮の思いにて出席した。この校長会総会にて、鳩山一
郎文相は「（前略）ろう児にありましては日本人たる以上、
我が国語をできるだけ完全に語り、他人の言語を理解し、
言語によっての国民生活を営まむることが必要でありま
して、（中略）全国各聾啞学校においてはろう児の口話教
育に奮闘努力し研鑽工夫を重ね、その実績を挙ぐるに一
層努力をせられんことを望みます（後略）」と訓辞を垂
れた。この訓辞の口話教育奨励の部分を取り取って口話法
推進グループは、手話法でなく口話法による教育実践が
国の方針（国是）として奨励されたものと勢いづき、手
話排除の風潮に拍車がかかっていったのである。

高橋は席上、発言を求め、口話教育の意義は是認す
るも、手話は口話教育に悪影響をおよぼすものと決め
つけ、手話を葬ろうとする流れに異議を述べた。口話法
を習得できるろう児はごく少数であり、個々の子ども
の適性に合わせて口話・手話・指文字の指導が進めら
れるべきであると力説した。孤軍奮闘同然の高橋であ
ったが、自身の実践に裏打ちされた彼の主張は気迫に
満ち、口話法推進グループの校長らの野次と怒号にか
き消されそうになるも、やがて静けさを取り戻し、誰
一人反論する者はいなかったという。校長会当日の夜
に、東京・丸ノ内ホテルにて、妻、高橋醜子宛にし
たためた高橋の書簡が大阪府立中央聴覚支援学校に保
管されており、紹介する。

（前略）連中、これ見たかの得意満面、帰ってき
ても胸くそ悪く眠られず（中略）口話万能の連中に、
とどめをさして、われ生きるか死ぬかの分かれ目、
彼らの後には文部大臣の奨励あり。（中略）当局の前
に、言うだけは言って、この年来の苦しみ、胸も裂
けよと捨て身のかまえ。昭和8年1月29日午前、我
が国聾啞教育史上記念すべき日なり。（大阪府立中央
聴覚支援学校蔵、妻醜子宛書簡）



1933年 高橋潔の妻宛書簡（大阪府立中央聴覚支援学校蔵）

この校長会を一つの節目に、日本のろう教育は口話教育へと大きく転回していったが、それはろう児
だけでなく、ろう者教員にとっても冬の時代の到来を意味した。口話法は、読話発語メインのコミュニケーションを基本にすえ、手話使用を口話学習の妨げになるものとして禁止する。よって、きこえない教員は口話法の指導になじまないものとされ、続々と聾学校から追われていった。



大阪市立聾啞学校 チーム高橋（1922年）

しかし、大阪市立聾啞学校は凜然と手話を守り、ろう者教員たちとスクラムを組んで、手話・指文字を用いて教育実践を重ねていった。大曾根源助、福島彦次郎、藤井東洋男、松永端、中川俊夫ら教員はいま風の表現をするなら「チーム高橋」として、手話のみならず口話法、併用法に関する実践発表等

を盛んに行い、ORAシステムを構築していった。同校からろう教員が解雇されることもなく、むしろ新たにろう教員を採用したりもした。

ORAシステムは、初等部上がる前の予科の段階で視覚や聴覚も含めてさまざまな感覚に働きかける総合的保育を実施し、手話、口話など多様な方法を用いた。初等部では口話に適する者には口話で、口話だけでは不十分な者には手話+指文字+口話で、口話に適さない者には手話+指文字でと、3グループによる学習形態をとった。この適性教育の実践は、個のニーズに応じた教育をめざす今日の特別支援教育の理念を、すでに昭和初期の時点で先取りしていたものと言えよう。

7. 大曾根と指文字誕生

1931（昭和6）年 大曾根式指文字発表 （大阪市立校 大曾根源助）

中世ヨーロッパの修道院内で「沈黙の行」といい、修道士らがサインや指文字でコミュニケーションを図っていたのが指文字の起源とされる。1545年にスペインのオーニャ修道院の修道士ベドロ・ポンセ・ド・レオンが名家の聾の息子2名の教育にあたり、指文字を使って書き言葉や会話を教えたものが、ろう教育への指文字導入の始まりと考えられている。18世紀にパリ聾学校で完成されたフランス指文字が同校のろう者教員ローラン・クレールによって19世紀にアメリカに伝えられ、英語26文字を表示するManual alphabetとなったが、日本の現在の指文字はその流れをくむものである。

高橋潔校長の意を受け1929（昭和4）年に渡米した大曾根源助はアメリカの聾学校を50校以上視察し、ヘレン・ケラーとの面会から得た知見を参考にして、帰国後市立校の教員らと大曾根式指文字を考案した。



1929年 神戸港より出港 ロンドン丸
（大阪府立中央聴覚支援学校蔵）

今日の日本の指文字の誕生までの経緯を述べたい。大曾根は米国各州の聾学校を視察するかたわら、ケラーへの伝手を採り、ニューヨークタイムズを通して面会の斡旋をしてもらえた。大曾根はニューヨークのフォレストヒルズにあるケラーの自宅を訪問する。

大曾根は、その日を「私の全生涯に於ける最も歴史的な感激の日」だったと後に語っている。ヘレン・ケラーは日本人として初めて会う大曾根を心から歓迎し、自身の言語習得について聞かれたところ「私が今日あるのはサリバン先生のおかげです」と語りだし、自身のことばの第一歩は指文字だったと力説した。そして大曾根に「日本にも指文字はあるのですか?」と問うた。

当時の日本には渡辺式指文字があり、手のひじを中心に上下左右に大きく動かすものであった。それを1914（大正3）年に大阪市立盲聾学校の巽芳太郎教諭が改良したトモエ式指文字もあった。しかし、いずれもなじみにくく普及していなかった。大曾根が渡辺式指文字を女史に実際に示してみると「腕をそんなに振り回す指文字は盲人には通じませんし、時間的にも不経済です。改良の余地がありますね」と言われた。大曾根は目を輝かせ「では、お約束します」と応えた。アメリカ指文字を参考に、盲ろう者にもわかりやすい指文字を創り出そう…。

大曾根とヘレンは固い握手で再会を期した。帰りの航海中、大曾根は船室にこもり指文字の案を練った。帰国後すぐに大阪市立聾学校に戻り、米国の聾教育の実情、指文字併用の教育実践を語り、そしてヘレン・ケラーのアドバイスをふまえて考案した指文字の案を高橋校長と同僚たちに示した。藤本敏文、福島彦次郎、藤井東洋男、櫻田茂、中川俊夫、松永端ら大阪市立聾学校の教員らが、大曾根の草案をもとに、日本語50音一つ一つについて知恵を出し合い「ああでもない、こうでもない」と試行錯誤を繰り返した。言わば「チーム大曾根」の彼らには共通の思いがあった。指文字は「聾者の国語の把握を正確にする。また一般人のサイン、ランゲージとしてもおおいに活用できる」と。

サリバン先生がヘレン・ケラーに授け、ヘレンが大曾根にその簡明なあり方を説いた指文字は、海を渡り、大阪市立聾学校のORAシステム実践に生かされていった。ちなみに、アメリカの指文字は26個あり、いずれもアルファベットの形をとっている。日本の場合、50個とアメリカの倍であり、また平仮名、カタカナいずれも形や線が複雑であり、濁



1923年発表当時の指文字パンフレット(大阪府立中央聴覚支援学校蔵)

音、半濁音、拗音、促音と変化が多い。そこに苦心の種があった。「き」はキツネの「き」、「ね」は木の根の形からとるなど、覚えやすさや流通性を図った日本の指文字は、大曾根らの創意工夫によるものであり、独創性に富んだものといえる。

高橋潔校長の息女、川渕依子は当時の思い出を語る。「夜帰ってきたら、父は指文字を教えてくださいました。父は左手で指文字を表し、それを私も右手で真似しました。そして、それぞれが作った指文字の手をくっつけては確かめ合ったのです」(2010年8

月川渕依子・前田 conversation)。

こうして完成した大曾根式指文字は1931(昭和6)年に発表された。しかし発表当時、指文字は、脚光を浴びるどころか、聾教育界の異端児同然であった。滋賀の西川吉之助・濱子父子が各地に招かれ、口話教育の意義を説いて回った口話法全盛期に、指文字は文部省にもどの聾学校にも祝福されることなく大阪市立聾学校でひそと誕生した。周知のように今日、大曾根式指文字は、日本の指文字のスタンダードとして全国のどこでも使われており、「大

曾根式指文字」の表記はもはや死語となっている。このような状況を大會根、高橋らは夢想だにしなかったに違いない。ちなみに、ヘレン・ケラーは戦前戦後と3回来日し、大會根との念願の再会を果たし、高橋とも面会した。そして日本盲人協会の設立者、岩橋武夫と共に各地で盲人・ろう者福祉の向上を訴えた。



向かって左より松永端・福島彦次郎・中川俊夫
(大阪府立中央聴覚支援学校蔵)

さらに、「ヴェニスの人」「リア王」「父帰る」等、戯曲を中心とした手話劇「車座」公演は、大阪市立聾啞学校の教員と卒業生による対社会的なメッセージであった。満州事変以降、日中戦争へと突入していく暗い世相の中、大阪市立聾啞学校は、車座すなわち、ろう者教員・聴者教員・聾啞学校卒業生が共同して演劇発表しながら、ろう者と手話の存在を社会一般に広く発信していったのである。これらの演目は手話表現でセリフが語られ、それを高橋潔が音声語に吹き替えていった。

東北学院在学時、欧州留学して声楽を学ぶ夢を果たせなかった高橋であるが、車座公演では朗々と響き渡るバリトンで観客を魅了したという。世界的にも車座が公演された1930年代の時点で、ろう者と健常者が協働して演劇を発表する、その表現媒体として手話と音声語が用いられたという状況は世界的にも例を見ない。

さて、1930年代以降、五・一五事件などを通して政党政治が崩壊し、日本は軍靴が街を闊歩するようになっていく。口話教育は軍国主義的風潮と結びつき、朝鮮、台湾、満州等における日本語以外の言語を排除する悪しきナショナリズムが瀰漫していった。そうした流れにあって、手話は長らく抑圧され、口話能力によって子どもたちの人間的可能性を図るという誤謬が犯されてきた。

聾学校にも、集団疎開、軍事教練、工場への学徒

動員の波が押し寄せ、1942（昭和17）年には聾教育振興会、日本聾啞学校長協会、日本聾啞協会、日本聾啞教育会が、戦時統制の名の下に聾啞教育福祉協会に統合され、戦争体制に突入していったのである。

戦後まもなく盲学校・聾学校が学校教育法第一条に組み込まれ、全ての盲児・ろう児が教育を受けられる義務教育の制度が実現した。いっぽう身体障害者福祉法など福祉施策の前進とろう者当事者団体たる全日本聾啞連盟結成の運動、手話に寄せる国民的理解の広がりによって、教育と福祉いずれの分野でも手話が復権してきた。高橋潔、大會根源助ら先人は、手話や指文字に対する今日の社会的言語的評価の高まりをいかほど予想していたのだろうかと思いを馳せつつ、本稿を終えたい。

参考文献

- 『西洋事情』 福沢諭吉 岩波書店 福沢全集第1巻
 『長州ファイブ』 山口教科書供給株式会社 2006
 『東京盲学校六十周年誌』 東京盲学校 1935
 『図説盲教育史事典』 鈴木力二
 日本図書センター 1994
 『五代五兵衛』 福島彦次郎編
 五代五兵衛頌徳會 1937
 『欧米聾教育通史』 荒川 勇 峯文閣 1970
 『わが国特殊教育の成立』 加藤康昭 中野善達
 東峰書房 1967
 『近代盲聾教育の成立と発展』 岡本稻丸
 NHK出版 1972
 『京都府盲聾教育百年史』 京都府立聾学校百年史
 編集委員会 1978
 『聾教育百年の歩み』 聴覚障害者福祉教育協会
 1979
 『大阪市立聾学校七十年史』 大阪市立聾学校 1972
 『大阪市立聾学校百年史』 大阪市立聾学校 2001
 『大阪市立聾学校百二十年史』
 大阪府立中央聴覚支援学校 2021
 『手話讃美』 川渕依子 サンライズ出版 2000
 『高橋潔と大阪市立聾啞学校』 川渕依子
 サンライズ出版 2010
 『シリーズ高橋とその時代』 前田 浩・堀谷留美
 「全聴教」全国聴覚障害教職員協議会2010～2015
 『東北学院英学史 年報』 櫻井祐子
 東北学院大学英語英文学研究所第30号 2009
 『歴史の中のろうあ者』 伊藤政雄 近代出版 1998
 『日本聾啞秘史 言はぬ花』 伊藤舜一
 教育研究会 1938
 『昭和初期手話—口話論争に関する研究』 清野 茂
 市立名寄短期大学紀要Vol.29 1997
 『大阪市立聾学校の適性教育観』 加藤嘉文1995
 『明治維新』 井上清 「日本の歴史」 中央公論社
 第20巻 1966

前田 浩プロフィール

MAEDA, Hiroshi

同志社大学法学部卒、大阪教育大学大学院修士課程
 修了。

大阪市立聾学校勤務（36年）、全国聴覚障害教職員協
 議会初代会長

大阪府立中央聴覚支援学校・大阪府立だいせん高等聴
 覚支援学校：学校運営協議会委員

著書『新しい聴覚障害の像』『聴覚障害幼児のコミュ
 ニケーション指導』『手話の歴史』等

東北学院の神学について—東北学院神学部と ユニオン神学校、ランカスター神学校との結びつきから

東北学院史資料センター調査研究員
東北学院大学文学部総合人文学科講師

藤野 雄大

1. 序論

東北学院の起源は、1886年に牧師養成を目的として設立された仙台神学校に遡る。1891年に東北学院と名前を改めて以降は、その働きは、東北学院神学部を引き継がれることになった。この東北学院神学部は、1937年に日本神学校との合同によって廃止されるまで、およそ50年に渡って存続してきた。その間、東北学院の三校祖（押川方義、W・E・ホーイ、D・B・シュネーダー）をはじめ、多くの合衆国改革派教会（Reformed Church in the United States）から派遣されてきた宣教師たち、あるいは日本人神学者たちによって、その神学教育の働きが担われてきた。

それでは、一体、彼らの神学的傾向はどのようなものだったのだろうか。言うまでもなく、50年間という長い期間、東北学院神学部に関わった全ての宣教師や日本人教師の神学的立場が、全く同一ということはある得ず、そこには自ずから多様性が存在していただろう。しかし、それでもなお、全体として見た時に、共通して見られる神学的傾向が存在しているのではないか。このような疑問の根底には、論者自身の中心的研究テーマであるマーサーズバーグ神学（Mercersburg Theology）と東北学院との結びつきを明らかにしたいという動機が存在している。

マーサーズバーグ神学は、19世紀半ば以降、合衆国改革派教会（当時はドイツ改革派教会、German Reformed Church, 1860年代に合衆国改革派教会と改称）¹の教派神学校で展開された神学運動であり、ジョン・ウィリアムソン・ネヴィン（John Williamson

Nevin:1803-1886）とフィリップ・シャッフ（Philip Schaff:1819-1893）を主要な指導者としていた。²その神学的伝統は、19世紀半ばにペンシルヴァニア州ランカスターに移転し、ランカスター神学校（Lancaster Theological Seminary）となった後も、受け継がれていった。今日では、ランカスター神学校関係者を中心として、マーサーズバーグ神学会（Mercersburg Society）が組織され、マーサーズバーグ神学に関する研究が進められている。

マーサーズバーグ神学の特徴は、本論でも触れるが、キリスト論的（Christological）、キリスト中心（Christ-centered）であり、キリストの受肉（incarnation）を神学的根幹として強調したことにあった。また「福音主義的公同主義」（Evangelical Catholicism）という言葉で表現されるように、プロテスタンティズムとカトリシズムの対立の調停、換言すれば、当時のアメリカのプロテスタント教会の分裂に対する批判と、教会（教派）の終末的再一致を展望した。³

しかし、このようにアメリカ教会史の中で独自の地位を占めているマーサーズバーグ神学の東北学院神学部に対する影響は、必ずしも明確とは言えない。管見によれば、東北学院神学部でマーサーズバーグ神学に関する講義がなされていた形跡は、史

¹ David Dunn, Paul N. Crusius, eds, *A History of the Evangelical and Reformed Church*, Philadelphia, Pennsylvania: The Christian Education Press, 1961, p.88.

² マーサーズバーグ神学という名称は、ドイツ改革派教会の教派神学校が所在していたペンシルヴァニア州マーサーズバーグという地名に由来する。南北戦争の激戦地ゲティスバーグに近かったこともあり、疎開する形で同州ランカスターに移転していった。George Warren Richards, *History of the Theological Seminary of the Reformed Church in the United States 1825-1934, Evangelical and Reformed Church 1934-1952*, Lancaster, PA: Rudisill and Company, Inc., 1952, pp.320-326.

³ Mark G. Toulouse and James O. Duke, eds., *Makers of Christian Theology in America*, Nashville, Tennessee: Abingdon Press, 1997, pp.228-240.

料の上で確かめることはできない。数少ない史料としては、1886年、ネヴィンが亡くなった年に、ホーイが合衆国改革派教会の教派誌『メッセンジャー』に、仙台神学校でネヴィンの神学を紹介し、学生や当時の牧師たちに感銘を与えたと投稿した記事を挙げるができる。⁴しかし、この記事は、合衆国改革派教会の重鎮でもあったネヴィンの追悼という要素が強く、この記事だけを根拠に、マーサーズバーグ神学が、東北学院神学部で自覚的に継承されていたと捉えることはできないだろう。

ホーイやシュネーダー、あるいは東北学院神学部やランカスター神学校でも教え、後に伝道に専念し、会津の使徒とも呼ばれたクリストファー・ノッス(Christopher Noss:1869-1934)らは、直接、ネヴィンやシャフに師事したことはなかったにせよ、ランカスター神学校において、若き日に、その弟子たちから神学の手解きを受けていた。あるいは日本人神学者や牧師たちの中にも、本論で触れるように出村剛や丹忠のようにランカスター神学校に留学した経験のあるものも少なくない。しかし、彼らが、東北

学院において、マーサーズバーグ神学を神学生たちにはっきりと教授した形跡がほとんど見当たらないのは、奇妙にも思える。この点に関しては、すでに拙論『『東北学院の神学』をめぐり一考察』などで論じてきたように、当時欧米の神学界に大きな影響力を持っていたリベラル神学(Liberal Theology 自由主義神学とも)の影響を抜きにして理解することはできないと考えている。⁵リベラル神学については、本論の中でも詳述するが、19世紀後半から1930年代まで、ドイツ、イギリス、そしてアメリカの神学界を席捲し、さらに日本でも海老名弾正と植村正久との間で戦われた有名な「自由主義神学論争」(キリスト論論争)に象徴されているように、教会史に大きな足跡を残した。リベラル神学は、19世紀後半からは、ダーウィンの進化論の受容の是非を巡って、いわゆる根本主義者(fundamentalist)との間で激しい論争を巻き起こすことになった。さらに1930年代以降には、バルト神学(弁証法神学、「危機の神学」とも呼ばれた)による激しい批判を受ける形で、その影響力を減退させることになったが、それでも今日に至るまで、一定の影響力を保持している。

結論を先取りすることになるが、東北学院神学部もまた、大きな意味で言えば、このリベラル神学の盛衰と歩調を合わせている。しかし、1930年代、神学界がリベラル神学から、バルト神学に転換していくのと、まさに同時期に、他の神学校との合同により、東北学院神学部は、その歴史に幕を下ろすことになった。

拙論『『東北学院の神学』をめぐり一考察』では、『東北学院百年史』やメンセンディークによる先行研究を参照しつつ、当時の歴史史料の中で、特に1930年代を中心とした東北学院神学部と日本基督教会東北中会との対立、あるいは角田桂嶽による批判や、『神と人』誌上に寄稿されている門馬清治郎の主張に注目しながら、当時のシュネーダーやE・H・

⁴ William E. Hoy, "Dr. J. W. Nevin," *The Messenger*, Nov. 17, 1886. この記事の中でホーイは次のように記している。「何日か前、私は神学生に対して、キリストの生命と、聖書の光について講義をした。神の言葉を完全に理解するためには、神にして人である方〔キリスト〕との霊的交わりが必要であることを示すために、私はネヴィン博士を引用することで、そのテーマについて具体例を提示することができる。私は、彼の写真を若者たちに見せた。そして彼の歴史を語った。彼がどのように学んだのか。どのようにしてキリストを知り、神の言葉を知ったのか。そして、どのようにそれを教えたのか。…若者たちは、その主題について、特別な関心を示した。彼らは、聖書を新しい光のもとで、ネヴィン博士の生涯から輝き出る光のもとで聖書を学んだのだ。マーサーズバーグとランカスターの最良の人は、6人の若者たちの思考と心を活気づけるだろう。以前記した仙台の牧師もまた、ネヴィンについての全ての記述を心から喜んだ。…アメリカ、イギリス、ドイツの神学に精通している、東京のある日本人牧師も、ネヴィンを最上級に高く評価した。」この記述からは、ホーイが、仙台神学校の神学生たちや、知己の牧師たちに、ネヴィンの生涯と並んで、おそらくマーサーズバーグ神学の中心とも言えるキリスト論、とりわけヨハネ福音書の受肉の理解を紹介していたことを読み取ることができる。しかし、同時に、それはマーサーズバーグ神学を日頃から体系的に教授していたのではなく、授業との関連の中で、ネヴィンについて「取り上げる機会があった」という程度だったと理解するのが適当なように思える。

⁵ 拙論「Mercersburg Theology and Tohoku」(邦題「マーサーズバーグ神学と東北」)、『宗教センター報告書』東北学院宗教センター発行、2023年。および『『東北学院の神学』をめぐり一考察-20世紀前半における東北学院と日本基督教会東北中会との衝突を通して』、『東北学院史資料センター年報』vol.8、東北学院編、2023年、37-47頁。

ゾーグら東北学院の教授陣が、リベラル神学の立場に立っていたことの論証を試みた。⁶ 本論では、その説を補強すべく、今度は視点を変えて、合衆国改革派教会の来日宣教師たちの多くを輩出していたランカスター神学校、そしてアメリカにおける神学界の動向の中で、東北学院の神学的立場を位置付けることを目指している。

このような研究の視座は、大きく言えば、近年、棚村重行や吉田亮らによって提唱されてきた研究方法に倣うものであると言える。⁷ 彼らは、とりわけ近代以降の教会史、神学思想史を理解するためには、一国史、つまり一つの国の中だけで、その歴史的展開を理解しようとするのではなく、「越境史」(トランスナショナル) 的歴史観、すなわち国際的な視座が求められることを強調してきた。その主張に倣って言うのであれば、東北学院という一校の歴史、特に東北学院神学部の神学的傾向を理解するためには、より国際的な神学(あるいは神学校)の交流史と評しうるような俯瞰的視座を踏まえる必要があるということである。本論では、この観点に立って、まずアメリカを中心としたリベラル神学の歴史的展開と神学的特徴を概観する。その上で、東北学院と、ランカスター神学校、および同校とつながりの深かったニューヨークのユニオン神学校(Union Theological Seminary)との密接な関係性を示す。そして、本論では最後に、1900～30年代までのランカスター神学校や東北学院が、リベラル神学に接近していった理由には、その教授陣たちが、ユニオン神学校との交流から影響を受けつつ、新しい時代の

変化の中で、神学の再建をする必要性を意識していたという背景が存在していたことを明らかにしたい。しかし、一方で注意しなければいけないのは、確かにリベラル神学の影響は、20世紀初頭のランカスター神学校および東北学院に見られるが、それは両校の教師陣が、無批判的、盲目的にリベラル神学に傾倒していたのではなく、近代という時代の中で、新しい神学的発展、神学の再建を推進するために、リベラル神学を一つの有益な方法論として捉えていたということである。

2. アメリカにおけるリベラル神学の展開

そもそもリベラル神学とはどのように説明できるのだろうか。これは、実は簡単ではない。なぜなら、リベラル神学とは、それ自体に多様性を持つものであり、後述するようにリベラル神学内部にも相違点が存在していたからである。しかし、それでもなお、その大まかな歴史的展開と全体に共通していた傾向を論じることは可能である。ここでは主にアメリカ教会史の大家であるオールシュトロームの古典的名著『アメリカ宗教の歴史』、およびアメリカのリベラル神学についての広範かつ綿密な研究で知られる、ドーリエンの『アメリカのリベラル神学の形成』を参照しながら、概観していきたい。⁸

リベラル神学とは広義には伝統からの解放を目指す運動であり、新神学(New Theology)や近代主義(Modernism)、あるいは進歩的正統主義(Progressive Orthodoxy)などと呼ばれることもある。歴史的にはイマヌエル・カント(Immanuel Kant:1724-1804)やヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel:1770-1831)の哲学、さらにフリードリヒ・シュライアマハー(シュライエルマッハー、Friedrich Schleiermacher:1768-1834)や、アルブレヒト・リツチュル(Albrecht Ritschl:1822-1889)の神学に淵源している。アメリカでは、19世紀半ばには、会衆派教会のホレース・ブッシュネル(Horace

⁶ 詳細は拙論を参照のこと。角田(1914年卒)も門馬(1911年卒)も東北学院神学部の卒業生であり、東北中会で活躍していた。角田がメイチェンの影響を受け、根本主義的神学の立場から、強烈に東北学院の神学を批判していた一方で、門馬の神学的立場は必ずしも明確ではなく、東北学院に対しても完全に批判的というわけではなかったが、東北学院の神学教育の不備と伝道への情熱が薄れているのではないかという懸念を提起していた。

⁷ 棚村重行『二つの福音は波濤を越えて－19世紀英米文明世界と『日本基督公会』運動と対抗運動』、教文館、2009年。吉田亮『アメリカ日本人移民キリスト教と人種主義－サンフランシスコ湾岸日本人プロテスタントと多元主義・越境主義、1877～1950年を中心に』、教文館、2022年。

⁸ 以下の記述は、Sydney E. Ahlstrom, *A Religious History of the American People*, New Haven, Connecticut: Yale University Press, 1972, pp.763-804, および Gary Dorrien, *The Making of American Liberal Theology, Idealism, Realism, & Modernity 1900-1950*, Louisville, Kentucky: Westminster John Knox Press, 1989, pp.1-42 を参考にしている。

Bushnell:1802-1876) が、その導入に先駆的役割を果たしたとされており、また先述したネヴィンやシャフらマーサーズバーグ神学者らも、ドイツとの関係の深さから、その影響を受けた。

19世紀後半には、リッチェル学派の中からアドルフ・フォン・ハルナック (Adolf von Harnack: 1851-1930) が出たことで、さらに影響力を拡大することになった。20世紀初頭に大きな影響力を持った社会的福音 (ソーシャルゴスペル、Social Gospel) 運動は、必ずしもリベラル神学者だけが担い手であったわけでもなく、また全てのリベラル神学者が関わったわけでもない。厳密に言えばリベラル神学と同一ではない。しかしその代表的な神学者である、ウォルター・ラウシェンブッシュ (Walter Rauschenbusch: 1861-1918) に象徴されるように、リベラル神学と多くの点で共通していた。また、ニューヨーク出身のバプテスト派の牧師で、後にコールゲート神学校 (Colgate Theological Seminary) でも教えたウィリアム・ニュートン・クラーク (William Newton Clarke: 1841-1912) の貢献も見逃すことはできない。クラークの著した『キリスト教神学の概論』は、リベラル神学の立場に基づいたアメリカ最初の組織神学的著作であった。⁹ クラークは、シュライアマハーと同様に、神学の出発点は、聖書の記述ではなく、宗教感情であり、あらゆる宗教が一定の真理を含むといった、宗教多元主義的スタンスに立った。クラークの著作は、アメリカのリベラル神学の古典と見做されるようになった。¹⁰

リベラル神学は、方法論的にも内容的にも多様性を持っていたが、ドーリエンが指摘するように、その本質は「調停的キリスト教運動」(mediating Christian movement) であった。19世紀半ばに、ダーウィンが提唱した進化論や、カール・マルクスの社会主義思想などに象徴されるような近代的な自然科学や社会科学の著しい進展の中で、「アメリカのリ

ベラル神学の創設者たちは、権威に基づいた当時のキリスト教正統性と、勃興する合理主義的理神論や無神論の間で、第三の道を生み出そうとしていた」のである。¹¹

リベラル神学は、伝統的な信条に規定される教義 (dogma) による束縛からは解放されていた。もちろん伝統的な教義全てが否定されたわけではなく、後述するように信条や教会の伝統に対しては、リベラル神学者の間でも見解の相違が存在していた。しかし特に人間理解に関しては、伝統的な原罪と人間の全的墮落の教えは後退していき、近代的な楽観主義的人間観に基づいて、倫理的説教や道德教育の重要性が強調されることになった。また新しい聖書学の方法論 (聖書の高等批評) を踏まえ、歴史的イエス研究に基づいたキリスト論を中心的命題として掲げており、山上の説教が聖書の中核的な教えとして理解されることになった。¹² このように伝統的な教義や教会という外的権威からは解放された一方で、歴史的批評 (historical criticism) や自然科学の進展などの近代の学術的探求には開かれており、個人々の理性や体験を重要視する傾向が見られた。¹³

アメリカにおけるリベラル神学の拡大に寄与したのが、神学校であった。19世紀終わりから20世紀初頭にかけて、ハーバード大学、イエール大学、アンドーバー神学校などアメリカの主要な神学校で、リベラル神学は急速に受容されていったが、中でも特に主導的な役割を果たしたのが、ユニオン神学校とシカゴ大学神学部 (The Divinity School of Chicago University) であった。

ドーリエンもオールシュトロームも共通して論じているように、アメリカのリベラル神学は、一枚岩ではなく、見解の相違する二つの学派に大別されていたことは特筆すべきである。この二つの学派の一方は、「福音主義的リベラリズム」(Evangelical Liberalism)、他方は「近代主義的リベラリズム」(Modernistic Liberalism) と称される。そして、福

⁹ William Newton Clarke, *An Outline of Christian Theology*, New York: Charles Scribner's Sons, 1898 (first edition).

¹⁰ Daniel G. Reid, coordinating eds., *Dictionary of Christianity in America*, Downers Grove, Illinois: 1990, p.292.

¹¹ Dorrien, *The Making of American Liberal Theology*, p.3.

¹² Ahlstrom, *A Religious History of the American People*, p.779.

¹³ Dorrien, *The Making of American Liberal Theology*, pp.3-4.

音主義的リベラリズムの立場を主導していたのが、先に述べたユニオン神学校であり、近代主義的リベラリズムの牙城が、シカゴ大学神学部であったのである。

「過去からの具体的な宗教的規範に基づいた近代的神学は可能なのだろうか」、「神は歴史を超越しているのか、それとも完全に歴史的領域の中に位置づけることができるのだろうか」両者の相違は、主に教会の伝統をどのように位置付けるかであったと言える。そしてドーリエンによれば、この問題に対する両者の見解は以下のように相違していた。

福音主義的リベラリストたちが、過去のキリスト教的伝統との根本的な連続性 (essential continuity) を主張した一方で、近代主義的リベラリストたちは、近代と前近代の非連続性を強調した。福音主義的リベラリストたちが、キリストの姿と福音を宗教的思考の基礎に用いた一方で、近代主義的リベラリストたちは、キリスト教の教えは、信頼できる信念かどうかの近代的試験を満たした、近代的哲学並びに（もしくは）近代的世界観によって再概念化 (reconceptualized) されなければならないと述べた。双方の立場はともに、宗教的主観は歴史的なものであり、神は創造と歴史の中に内在しているという点を強調し、宗教的客観と神が歴史を超えたところにあることを否定した。しかし福音主義的リベラリストたちが、キリストの人格とメッセージを神学を形成する歴史的啓示であるとする多様な意見を保持していたのに対し、近代主義的リベラリストたちは、啓示は信仰の信頼できる基礎ではなく、辛辣な批判の対象から免れる福音的真理は存在しないと反論した。¹⁴

このように二つの学派は、同じリベラル神学の中に含まれてはいるが、神学的には大きな相違点があった。福音主義的リベラル神学が、どちらかと言えば保守的であるのに対し、近代主義的リベラル神学は、より急進的な立場と要約することができる。1920年代から1930年代にかけて、アメリカの

リベラル神学は、このユニオン神学校とシカゴ大学の両陣営に大別されることになった。

しかし、この状況は長くは続かなかった。なぜなら、バルト神学の大波が、ドイツからアメリカの神学校に押し寄せることになったからである。バルト神学は、リベラル神学全般と異なり、近代的、合理的基準を神学の基礎に据えることを拒否した。また神の内在性 (Immanence) ではなく、神の超越性 (Transcendence) を強調していた。このようにバルト神学は、リベラル神学に対抗し、それを乗り越えようとする運動であったといえる。そして当初、アメリカのリベラル神学者は、このバルト神学を拒絶したが、1930年代の半ばになると、ユニオン神学校をはじめとする福音主義的リベラル神学者は、バルトおよび、そのアメリカにおける強力な支持者であったラインホルド・ニーバーによるリベラル神学への批判に対して、譲歩するようになっていったという。リベラル神学は、依然として近代にアプローチする有効な神学であると、預言主義的リベラル神学者は信じていたが、しかし、特に彼らのライバルであったシカゴの近代主義的リベラリストを念頭に、近代の世俗的文化に対して、あまりに順応しすぎてしまっていることを懸念していたからであった。一方、シカゴのリベラル神学者たちは、バルト神学に対して譲歩をすることよりも、対抗する道を選んだ。こうして福音主義的リベラル神学がバルト神学へと傾いていく中で、シカゴ大学が、リベラル神学の「旗艦」の地位を占めるようになっていったのである。¹⁵

3. ベルリン大学、ユニオン神学校、ランカスター神学校、そして東北学院

前節では、オールシュトロームおよび、ドーリエンの研究に基づいて、アメリカにおけるリベラル神学の歴史展開と特徴を概観した。その結果、ドイツから移植されたリベラル神学は、アメリカにおいて、特にユニオン神学校を中心とした福音主義的リベラル神学と、シカゴ大学を中心とした近代主義的リベラル神学という二つの大きな流れを形作っていると考えられてきたことが分かった。そして、1930年代になると福音主義的リベラル神学の流れは、リベラ

¹⁴ Ibid., p.14.

¹⁵ Ibid., p.19.

ル神学に代わって台頭してきたバルト神学に向かう傾向を持っていたことも指摘されている。

この二つのリベラル神学の内、ユニオン神学校を中心とした福音主義的リベラル神学こそが、20世紀初頭のランカスター神学校、および東北学院の神学的立場を理解する上で重要な鍵になっているのではないかと、論者は考えている。実は、ランカスター神学校や東北学院と、ユニオン神学校および福音主義的リベラル神学との関係については、先行研究においても明確ではないが、示唆されてきた。例えば、拙論『『東北学院の神学』をめぐり一考察』において、すでに紹介したように、メンセンディークは、シュネーダーの神学的傾向を「キリスト教リベラリズム」という言葉で表現していた。¹⁶ また『東北学院百年史』でも、ランカスター神学校と歩調を合わせて「穏健なりベラリズムの伝統」を受け継いでいたと記されている。¹⁷ ここでいう「キリスト教リベラリズム」や「穏健なりベラリズム」とは一体何だろうか。先行研究では、この点について踏み込んでいない。また拙論『『東北学院の神学』をめぐり一考察』の中でも、曖昧さを残したまま終わってしまった。しかし、本論において、改めてアメリカのリベラル神学の歴史的展開に照らし合わせるならば、先に述べたように、それはユニオン神学校が主導していた福音主義的リベラル神学を指すと考えることが妥当であろう。

本節では、この点をより説得的に論じるために、19世紀終わりから、20世紀初頭にかけてユニオン神学校とランカスター神学校がどのような結びつきを持っていたのかを示していく。その出発点として示したいのが、まず『『東北学院の神学』をめぐり一考察』からの繰り返しになるが、丹忠が1921年に『東北教会時報』に寄稿した「楓の都から」という記事の内容を確認しておきたい。丹は、1884年秋田県に生まれ、東北学院神学部を1914年に卒業した。その後、若松栄町教会など、長く東北地方の教会の牧師を歴任し、東北中会の議長も務めた人物であった。またランカスター神学校、ユニオン神学校でも一時

期学んでいたことがあった。

記事は、丹が、ランカスター神学校に留学していた際の出来事を記したものである。同記事で、丹は当時のランカスター神学校の学長ジョージ・W・リチャーズ (George Warren Richards: 1869-1955) が、アメリカでも有数の教会史家であると触れたのち、留学の際に自分を「弟の様に」世話してくれた旧約学のデロング博士 (おそらく Irvin Hoch DeLong のこと、1909年から旧約学の教授を務めていた) との会話を記している。いささか長くなるが、重要な証言なので以下に引用しておく。

(丹)「教会の見学には紐育[ニューヨーク]と市俄古[シカゴ]とはどちらがよいでしょう。」

(デロング)「いずれもよいが、リチャーズ博士[おそらくリチャーズの誤記]は冬になると上級生一同を紐育に連れて行って一週間程各教会を見学させる」

(丹)「学問の為にはどちらがよいでしょう」

(デロング)「双方ともよろしい。神学ではユニオンのブラオン博士[William Adams Browns, 詳細は後に触れる]とシカゴのスミス博士[おそらく Gerald Birney Smith: 1868-1929, シカゴ学派の代表的神学者の一人]とは米国の二大指導者である。」…

(デロング)「ユニオンは進歩派で停まることをしないが、プリンストンは保守派で進むことを好まない。」

(丹)「ユニオンが学者的か」と問えば、(デロング)「否プリンストンと同じだ」といわれる。

(デロング)「米国にはリフォームド[改革]派の神学校が三つあるが他二つは保守派で我が校は進歩派だ」ともいわれた。¹⁸

上記の引用からは、アメリカの神学校の中での、当時のランカスター神学校の神学的位置付けが理解できる。先に述べたリベラル神学の二つの拠点であったニューヨークのユニオン神学校とシカゴ大学の著名なりベラル神学者の名前が丹の記事でも挙げ

¹⁶ ウィリアム・メンセンディーク著、笹原昌・出村彰訳『シュネーダー博士の生涯－その人と時代－』、東北学院、1976年、205頁。

¹⁷ 東北学院百年史編集委員会編『東北学院百年史』、東北学院、1989年、640-656頁。

¹⁸ 丹忠「楓の都から－米国にて」『東北教会時報』第245号、1921年12月15日発行。読みやすいように、旧仮名遣いを改め、また話者の名前を冒頭に補った。また適宜訳注を施した。

られており、デロングが両陣営のことを念頭に話をしていることが推測できる。その上で、デロングは、ユニオン神学校と同様に、ランカスター神学校も改革派教会の神学校の中で「進歩派」と見做されていると発言している。そして、このようなアドバイスを受け、丹自身もユニオン神学校で学ぶことになった。この記事からも明らかなように、20世紀初頭のランカスター神学校はユニオン神学校と神学的に密接な関係を持っていたことが分かるだろう。

これは、1952年に出版された『ランカスター神学校史』でも裏付けることができる。同書は、長くランカスター神学校の校長を務めたリチャーズ（先述）によって記されたものであるが、それによると、1904年以降、ランカスター神学校の教授陣は、期間の長短はあれども、マーサーズバーグ神学者たちが影響を受けたリッチェル学派の調停的神学（mediational theology）をドイツのベルリン大学で学んだという。さらに1930年代～40年代までの間には、ランカスターの教授陣たちは、ユニオン神学校か、イエール大学で少なくとも1年間のコースを取り、「マーサーズバーグ神学者たちとは異なり、彼らはリッチェル学派であろうとなかろうと、リベラル神学者であると考えられていた」と記されている。そして、同書でも記されているように、そのリベラル神学者の一団の中には、クリストファー・ノッスも含まれている。ノッスは、宣教師として来日する前、フランクリン・アンド・マーシャル・カレッジの後、ランカスター神学校に進み、ユニオン神学校で1年間学び、さらにベルリン大学でハルナックに師事している。

ノッスは、ホーイ、シュネーダーに比べ、東北学院で実際に教育に従事した期間は短く、特に後半生は、会津地方を中心とした直接伝道に専念していたこともあり、東北学院では、その働きはあまり注目されてこなかった。しかし、ノッスは、当時のランカスター神学校では、いわば神学者養成コースを進んでいたものであり、また短期間ではあったものの東北学院とランカスターの両校で実際に教鞭を取った経歴を持つ数少ない例である。この点において、ノッスの業績は、これまで以上に注目されるべきであろう。¹⁹

¹⁹ Richards, *History of the Theological Seminary of the Reformed Church in the United States*, p.523.

このようなベルリン大学、ユニオン神学校、ランカスター神学校との結びつきは、遡れば、マーサーズバーグ神学の祖の一人であるフィリップ・シャフにまで辿り着くことは、容易に推察されることだろう。なぜならシャフは、ベルリン大学で学び、1846年にランカスター神学校の前身であったドイツ改革派教会の神学校の教授として渡米し、さらに南北戦争後の1870年から1893年に亡くなる直前までユニオン神学校で教会史を教えていたからである。それを考えるならば、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのユニオン神学校とランカスター神学校の教授陣の中には、シャフの弟子、ないしは孫弟子とでも言うべき人々が存在していたことが示唆されるだろう。

この点に関しては、例えば、ユニオン神学校では、丹忠の記事にも記されていたウィリアム・アダムス・ブラウンを挙げることができる。ブラウンは、イエール大学とユニオン神学校を卒業し、さらに1890年から1年間の間ベルリン大学で、ハルナックのもとで教会史を学んだ。その後1892年からユニオン神学校で教会史の講義を担当するが、後に組織神学の教授に就任することになった。そして、それ以降、30年以上に渡ってユニオン神学校に在籍し続けた。その神学は、キリストの歴史的な人格を信仰の中心と位置付けたという点で「キリスト中心的リベラリズム」(Christocentric liberalism)とも評されている。²⁰ このキリスト論的強調という点において、ブラウンの神学は、マーサーズバーグ神学者にとっては親近感を抱かせるものであったとも言える。

ブラウンは、当時「新神学」として知られたりリベラル神学の第一人者として、アメリカだけでなく、日本の神学界でも紹介されるような著名な神学者でもあった。例えば、1906年に出版されたブラウンの主著 (*Christian Theology in Outline*) はリベラル神学の古典的教科書として広く用いられ、日本でも『基督教要義』として翻訳・出版されている。同様に、ブラウンが1916年来日し、東京をはじめ、日本各地で行った講演録 (*Is Christianity*

²⁰ Toulouse Duke, eds., *Makers of Christian Theology in America*, pp.388-389. Robert T. Hardy, *A History of Union Theological Seminary in New York*, New York: Columbia University Press, 1987, p.99.

Practicable?) は、ユニオン神学校で学んだこともある柏井園によって『基督教の耐實行性』として、翻訳、出版されている。²¹ ちなみに、これらの著作は、原著、邦訳書ともに東北学院の図書館にも収蔵されており、東北学院の教授陣、神学生の目に触れた可能性は高い。さらに、ノッスの書簡には、ブラウンが来日した際、おそらくユニオン神学校のつながりからであろうが、求めに応じて、仙台で面会したことが簡潔ではあるが記録されている。²² もちろん、そればかりではなく、ノッスは、キリスト教における神秘的な要素と倫理的な要素について論じた論文の中で、「新神学」およびブラウンの言葉について触れている。²³

しかし、ノッスは、ブラウンらの主張を無批判で受け入れているのではなく、リベラル神学がしばしば過度に倫理的になり、神秘性とのバランスを見失ってしまうと指摘している点にも注意しなければならない。むしろ、ノッスは、同論文において、ネヴィンの聖餐論におけるキリストの神秘的な現臨という理解も取り上げており、神学の中で倫理的要素と神秘的要素を調和させることの重要性を指摘している。その意味で、ノッスはブラウンの著書を参照しつつも、決して無批判的に受け入れてるわけではないとも言える。

一方でランカスター神学校とブラウンの結びつきは、より一層明確である。1926年、ランカスター神学校の創立100周年を記念する特別礼拝が開かれたが、ブラウンは、その場に招かれ、「1世紀の間の神学教育とその後」と題する講演を行っている。100周年という神学校の歴史の中でも、ひときわ重要な式典における講演を依頼されることから、ランカスター神学校の教授陣のブラウンに対する畏敬

の念が表れていると言えるだろう。²⁴

20世紀初頭のユニオン神学校の教授陣の中で、ブラウンと並んで特筆すべきなのが、アーサー・C・マギファート (Arthur Cushman McGiffert: 1861-1933) である。マギファートは、ニューヨーク州に生まれ、1885年にユニオン神学校を卒業した後、ドイツ、フランス、イタリアを歴訪した。マールブルグ大学で学位を取得するとともに、ハルナックと親交を深めている。1893年にシャフが引退 (同年逝去) した後に、シャフの後任としてユニオン神学校の教会史の教授となった。1917年から1926年までは、ユニオン神学校の学長を務めている。マギファートは、シャフの学問的継承者と考えられていたが、方法論としては、実証主義的歴史学を取り入れるとともに、神学的には、リッチェルやハルナックに倣い、リベラル神学の立場に立っていたとされる。²⁵

東北学院の教授、院長も務めた出村剛 (1885-1949) は、『東北学院神学部報』第2号の中で、東北学院神学部図書室に新たに加えられた教会史関係の本として、このマギファートの著作 (*History of Christian Thought* Vol.1, 1932) を紹介している。²⁶ 同記事において、出村は、自分自身も、かつてユニオン神学校で、マギファートの元で学んだことがあるので、「特別な親みを感じるものである」と語っている。出村剛は、東北学院第3代院長出村悌三郎の甥であり、東北学院普通科、専門部を経て、ニューヨーク州のオーバーン神学校 (Auburn Theological Seminary) を卒業した後、ランカスター神学校、ユニオン神学校にそれぞれ1年間ずつ学び、1919年から東北学院神学部の教授に就任している。²⁷ 出村剛は、すでに1920年代後半には、バルト神学への関心を強めてはいたが、しかし少なくとも1930年代前半

²¹ シドニー・ギュリック、今泉眞幸共訳、『基督教要義』、警醒社書店、1912年。および柏井園訳、『基督教の耐實行性』、日本基督興文協会、1917年。

²² Christopher Noss, "A Letter to Dr. Bartholomew from Wakamatsu, Iwashiro, Japan," June 8, 1916. (東北学院史資料センター所蔵)

²³ Christopher Noss, "The Mystical and the Ethical," *The Reformed Church Review*, vol.XII, Lancaster, PA: The Reformed Church Publication Board, 1908, pp.1-11.

²⁴ William Adams Brown, "A Century of Theological Education and After," *The Reformed Church Review*, Fifth Series, Vol. V, Lancaster, PA: The Publication Board of the Reformed Church, 1926, pp.18-38.

²⁵ Hardy, *A History of Union Theological Seminary in New York*, p.100. Reid, coordinating eds., *Dictionary of Christianity in America*, p.686.

²⁶ 出村剛、「新刊舊刊」、『東北学院神学部報』第2号、東北学院神学部、1932年、30-31頁。東北学院大学図書館蔵。

²⁷ 『東北学院時報』第163号、1949年11月25日発行。

までは、リベラル神学を完全に放棄し、バルト神学に転向したと見ることはできない。それは先にあげたマギファートへのシンパシーにも現れているし、また『『危機神学』の一批判の紹介』では、バルト神学がルター神学とは相容れないとする主張を紹介しつつ、バルト神学では神の絶対的超越性が強調され、キリストの内在性（それはリベラル神学の中心的要素であった）が軽視されていると指摘している。その意味において、出村は、バルト神学の影響力に対して一定の評価をしつつも、ユニオン神学校の福音主義的リベラル神学の立場に基づき、距離を取っていたと言える。²⁸

ランカスター神学校のリチャーズにも、ブラウンやマギファートの影響を見ることはできる。すでに名前は紹介したが、ここで改めてリチャーズの略歴と神学的立場について触れておきたい。ジョージ・W・リチャーズは、1869年に生まれ、フランクリン・アンド・マーシャル・カレッジを卒業し、牧師を数年間した後、1899年からランカスター神学校で教えている。その後、ドイツのベルリン大学とエルランゲン大学で学び、1925年にハイデルベルグ大学で学位を取得している。1920年から1937年までの17年間は学長を務めている。要するに本論で中心的に取り扱っている期間の大半は、リチャーズの学長時代ということになる。

リチャーズは、バルトの著作（説教集）を翻訳するなど、後年にはアメリカにおける主導的なバルト神学者として知られるようになるが、本論でも示すように、元来は、福音主義的リベラル神学の系譜に属する神学者であった。²⁹ 第1節でも紹介した、福音主義的リベラル神学からバルト神学へとシフトしていった代表的事例であるとも言える。

シカゴ大学の近代的リベラル神学の中心人物の一人、ヘンリー・ネルソン・ワイマン（Henry Nelson Wieman: 1884-1975）は、世代や神学的相違を超えて、リチャーズとも親交を保っていたが、ワイマンが1936年に著した著作では、ユニオン神学校のブラウンが、ロマン主義的立場に立つ神学者として分類さ

れた一方で、リチャーズはニーバー兄弟と共に、新超自然主義者（Neo-supernaturalists、要するにバルト神学者）の一群に振り分けられている。³⁰ つまり、1930年代後半には、リチャーズは、ブラウンら福音主義的リベラル神学の影響から離れ、バルト神学者として知られるようになっていたことが分かる。しかし、それ以前のリチャーズには、やはり時代を反映して、リベラル神学の影響が表れている。この点については、次節で改めて論じたい。

4. 神学の再建: マーサーズバーク神学から

福音主義リベラル神学、そしてバルト神学へ

前節において、ユニオン神学校、ランカスター神学校、さらに東北学院の人的結びつきについて明らかにしてきた。当時のユニオン神学校とランカスター神学校、そして東北学院の人的結びつきは盛んであり、それは神学的結びつきにもつながっていた。20世紀初頭のランカスター神学校で指導的役割を果たしたリチャーズもまた、その例に漏れない。例えば、1914年にリチャーズが記した「神学再建の必要性」という論文では、近代的科学の進歩の中で伝統的な神学は時代の精神を反映していないという課題を示し、神学再建の必要性を語る。この主題そのものが、それより10年以上前、1902年にマギファートが行った講演「神学の再建」を前提にしたものと考えられることができるだろう。³¹ 同論文の中で、リチャーズは、マギファートやブラウンらの主張を紹介しながら、「プロテスタントのリベラル神学が、再建のための取り組みを『宗教的概念や神学的思考と近代的科学、哲学、そして生活とを調停させるための努力である』と定義」していることを評価し、「その努力の結果がどのようなものになろうとも、これらの人々の意図が良いものであることは認めざるを得ない」と語っている。³² さらにリチャーズは、同論文

³⁰ Henry Nelson Wieman, *American Philosophies of Religion*, Chicago, Illinois: Willett, Clark & Company, 1936.

³¹ Arthur Cushman McGiffert, "Theological Reconstruction," *The Christian Point of View: Three Addresses by George William Knox, Arthur Cushman McGiffert, Francis Brown*, New York: Charles Scribner's Sons, 1902.

³² George W. Richards, "The Necessity of Theological Reconstruction," *Reformed Church Review*, Fourth Series, Vol. XV, Lancaster, PA: The Reformed Church Publication Board, 1914, pp. 535-561, pp. 537-538.

²⁸ 出村剛『『危機神学』の一批判の紹介』、『學友會雑誌』第2号、東北学院神学部学友会、1928年3月発行、9-17頁。東北学院大学図書館蔵。

²⁹ Reid, coordinating eds., *Dictionary of Christianity in America*, p.1017.

において、キリスト論的強調、特にキリストの内在本質、聖書の歴史批評的研究、さらにヘーゲルの歴史的発展の理論やダーウィンの進化論に基づく発展的歴史観を認めることが、神学の再建に必要であることを示しつつ、最終的には、「福音は時代の知性や倫理的形態に投げ込まれることによってのみ、現代的生活の中で影響力を持つことができる。今日のキリスト教における二つの偉大な運動、つまり伝道と教会の一致は、神学の再建によって大きく前進することになるだろう」と結論している。³³

この主張もマギファートの「神学の再建」を思い起こさせるものである。なぜなら、マギファートは、伝道については述べていないものの、その講演の結論として「キリスト教神学が、もし本当にキリスト教的なものであるならば、分裂したものではあり得ず、一致に向かう力となるはずである。…さあ我々が一致できる神学を獲得しようではないか」と述べているからである。³⁴ 要するにこれは福音主義的リベラル神学の立場を示す言葉である。1914年の段階では、リチャーズは、伝道と教会の一致という大きなキリスト教的事業の進展のためにも、近代の時代精神に適応した神学の再建が必要不可欠であると考えていた。そして、リベラル神学にその解決を期待していたことが分かる。

しかし、先述のように1930年代になると、リチャーズは、バルト神学へと転換していくことになった。それは、一体なぜなのだろうか。その理由の一端を示すのが、リチャーズが1934年に記した『根本主義と近代主義を超えて』という本に示されている。³⁵ 同書は、キリスト教の根幹であるイエスの福音のメッセージについて、自然、聖書、歴史、神学などとの関係から考察したものであるが、その題名が示しているように、20世紀アメリカにおける根本主義（ファンダメンタリズム）と近代主義（モダニズム、リベラリズム）との分裂を乗り越えることを目指すものである。このおよそ300頁にわたる本の中で、リチャーズは、一つの観点ではなく、実に多

様な立場から福音を捉えようとしている。伝統的な神学から、シュライアマハー、リッチェルらリベラル神学者たち、バルトやブルンナーといった弁証法神学者たち、またカール・マルクスのような無神論的世界観、さらにイスラム教や仏教、儒教などにまで触れている。その広範な関心は、読む者を圧倒させる力を持っているが、それは、同時にリチャーズが、一つの神学的立場に固執していたのではないことを示している。誤解を恐れずに言えば、彼にとって、福音主義的リベラル神学は、「目的」ではなく、神学再建のための、あるいは伝道と教会一致のための「手段」であった。そのため、近代へのキリスト教のアプローチを巡って、リベラル神学と根本主義の間で激しい対立が生じ、教会の一致がむしろ妨げられている状況の中で、両者を乗り越えるための代替手段として、バルト神学の受容という選択肢が生じたと考えることもできるだろう。³⁶

5. 結論

これまでアメリカにおけるリベラル神学の歴史的展開、特にユニオン神学校を中心とする福音主義的リベラル神学の流れを概観し、その上で、福音主義的リベラル神学が、20世紀初頭、ユニオン神学校、ランカスター神学校、そして東北学院にも、人的結びつきを通じて、影響を及ぼしていたことを明らかにすることができたと考える。1930年代になると、バルト神学の台頭によって、福音主義的リベラル神学は、影響力を減少させていくことになるが、ランカスター神学校、東北学院にもその傾向は認められると言える。しかし、一方で、東北学院神学部は、まさにリベラル神学からバルト神学への転換期に廃止となっており、結果的に福音主義的リベラル神学の特徴を残したまま、歴史の幕を閉じることになった。

これまでの議論から分かるのは、ランカスター神学校の教授陣も、東北学院の宣教師たちも、マーサーズバーグ神学を軽んじた訳ではなかったということである。しかし、彼らは20世紀初頭の激しい価値観の転換の中で、神学の再建の必要性を強く意識

³³ Ibid., p.561.

³⁴ McGiffert, "Theological Reconstruction," p.47.

³⁵ George W. Richards, *Beyond Fundamentalism and Modernism: The Gospel of God*, New York: Charles Scribner's Sons, 1934.

³⁶ Reid, coordinating eds., *Dictionary of Christianity in America*, p.1017.

していた。その結果、近代に順応しようとするリベラル神学に向かうことになった。彼らがリベラル神学を受容することができたのは、ユニオン神学校を中心とした福音主義的リベラル神学が、シュライアマハー以来のドイツ神学の影響のもとに成立し、キリスト論的強調、歴史に対する深い関心、さらに教会の再一致を希求するといったマーサーズバーグ神学との共通点を多く備えていたということも一因であったろう。その意味で、ランカスター神学校および、東北学院は、マーサーズバーグ神学の伝統を放棄して、リベラル神学、あるいはバルト神学に乗り移っていったのではなく、むしろマーサーズバーグ神学に、福音主義的リベラル神学やバルト神学といった新しい神学を「接木」して、それを有機的に発展させていくことを目指していたと考えることが適切であろう。この点で、本論は、拙論「『東北学院の神学をめぐる一考察』」を補って、議論をより一層深めることができたと言える。とはいえ、またなお、東北学院の神学全体を捉え切ることができたとは考えていない。東北学院に関わりのある日本人神学者たちの神学的傾向はどのようなものだったのだろうか。あるいはシカゴ大学神学部で学位を取得し、東北学院の最後の神学部長を務めたゾーグの神学的傾向についても触れることができなかったが、これも非常に興味深い。さらに、東北学院が日本神学校に合流し、日本東部神学校を経て、東京神学大学へとつながる歴史的展開の中で、その神学がどのように変遷していったのかも今後の課題として残されることになった。このような点からも、一校の歴史は、まさに越境的に捉えていく中でより明瞭に理解されると言えるだろう。

藤野 雄大プロフィール

FUJINO, Yudai

1983年東京都生まれ。2018年アメリカ合衆国 Calvin Theological Seminary (Th.M)修了。2019年東京神学大学大学院博士課程後期課程単位取得済み退学。2020年東北学院文学部総合人文学科着任。

東北学院大学入試の歴史(2) 1984~2020

東北学院史資料センター調査研究員
東北学院大学法学部教授

齋藤 誠

はじめに

本稿は、本誌前号に掲載した「東北学院大学入試の歴史(1) 1949~1983」(以下、第1論文という)の続編であり、1984(昭和59)年度から2020(令和2)年度までの東北学院大学(以下、本学という)の入試(現在は入学者選抜試験という)を概観する。2020年度で記述を終えるのは、本学を含めて大学入試は2021年度から入試の名称が全面的に変わるなど、新たな時期に入ったのではないかと筆者が考えるからである。

以下では、第1論文と同じように、「年度」をたんに「年」と略記する。したがって、たとえば入試に関して「1990年に***が実施された」と記述がある場合、それは1990(平成2)年度入試で実施されたことを意味し、推薦入試などでは、実際に実施されたのは前年の1989年ということになる。

本稿が対象とする37年間において、本学の入試は大きな変化をとげ、多様化し、複雑化する。それを整理し、変化の全体像を把握することが本稿の目的である。入試の多様化と複雑化は、おもに3つの要因によって進んだ。第一に、入試の種類が増えたこと、第二に、同じ種類の入試でも複数の日程が設定される場合があったこと、第三に、同じ種類の入試でも学部学科によって実施されたりされなかったりしたことである。したがって、本稿においても、これらに関する記述・分析が中心とならざるをえない。その点で、入試といえば今日という一般入試でしかなかった時期を対象とする第1論文とは、まったく異なる視点が必要となる。

本稿では、対象とする37年を3期に分けて入試制度の変化をたどる。第1期は1984~1994年の11年間、第2期は1995~2004年の10年間、第3期が2005年以降の16年間である。この時期区分にはさまざまな要因が関係しており、詳しくは本論でふれるが、基本的には本学における志願者数の動向と対応する。第1期は志願者急増期であり、第2期はその反動による急減期、第3期は安定期である。3期に分けたのは、志願者数の状況が入試に対する考え方や

具体的対応の最も基本的要因であったと考えるためである。これも第1論文にはなかった視点である。

こうした視点をもちえたのは、この時期は、毎年の本学入試に関するデータをまとめた『入試資料』が残されていることにより、志願者数の推移が簡単に把握でき、それと入試制度の変更との関連が考えやすいためである。それだけでなく、本稿では、第1論文の基本資料とした『東北学院時報』(以下、『時報』という)に加え、『入試資料』掲載のデータを利用することにより、入試制度だけでなくその実態・機能に関する分析を付け加えることが可能となった。以下、本稿において、志願者数などの具体的な数字を挙げている場合は、別の典拠を示さない限り、それらはすべて当該年の『入試資料』にあるもの、あるいはそこから算出したものである。

さらに、本稿には、第1論文にはないもう一つの要因がある。それは、本稿が扱う全期間にわたり筆者は本学に在職しており、しかも、そのうち20年以上は直接的・間接的に入試に関わる仕事にたずさわってきたことである。そこから、筆者は、資料からだけでは得られない情報・知見を補足できるかもしれない。思い込みによる事実歪曲・曲解にはじゅうぶん注意しながら、そうした補足にも試みたい。

1. 推薦入試・特別入試の導入(1984~1994年)

1984(昭和59)年は、本学において推薦入試と特別入試が全学的に導入された年である[時報398]。それ以前から工学部には推薦入学があったが、この年に、スポーツに優れた者の推薦入学(以下、スポーツ推薦という)、キリスト教関係者の推薦入学(以下、キリスト者推薦という)、学業成績による推薦入学(以下、学業推薦という)が全学部学科で導入された。さらには、前年の1983年には二部(夜間部)有職者特別入試、1993(平成5)年には外国人留学生特別入試、その翌年には帰国子女特別入試が導入される。

こうして、現在本学が実施している推薦入試、特別入試のほとんどはこの時期に導入され、本学入試

の多様化が始まる。文部省の大学審議会が「大学入試の改善に関する審議のまとめ」において「特色ある多様な入学者選抜」の必要性を強調するのは1993年であるが、それは本学ではすでに始まっていた動きを追認し、後押しするものであった。

しかし、同時に、この時期、受験関係者において「特色ある多様な入学者選抜」への共感がかなり限定的であったことにも注意しなければならない。学力試験を課された入学者選抜こそ入試であり、入試の中心は一般入試であるべきだという意識は、依然として強かった。一般入試による入学者のほうが高い「学力」があることがわかっているにもかかわらず、わざわざ推薦入試や特別入試を導入することは、大学にとっても、社会にとっても損失ではないかという考えも根強かった。

こうした状況を反映しているのが当時の「学生募集要項」（以下、募集要項という）である。募集要項は、大学が入試について広く社会に情報提供するものであるが、それをみても記載があるのは一般入試に関することだけである。推薦入試・特別入試についてはそれぞれ別に要項が作られ、推薦入試要項については高校長に、特別入試については希望者に配付された。本学の募集要項に推薦入試・特別入試に関する情報が記載されるようになるのは1996年からである。

この背景にあったのは、この時期における大学志願者の急増である。推薦入試の全学的導入から2年後の1986年から、本学を含めた全国の大学は経験したことのない志願者急増に直面する。本学では、1985年には11,044人だった志願者が、1990年には18,924人となり、1993年には25,441人に達する。この大学「買い手市場」の状況は、推薦入試・特別入試に対しても一般入試に対しても大きな影響を及ぼす。

以下では、推薦入試・特別入試の導入、志願者急増に対する推薦入試・特別入試および一般入試における対応を詳しくみていく。

（1）推薦入試・特別入試の導入

1984年（昭和59）は、本学が推薦入試を本格的に導入した年である。すべての昼間学部（文学部一部、経済学部一部、法学部、工学部）でスポーツ推薦とキリスト者推薦が、工学部を除いた3学部で学業推薦が導入されたからである。工学部は学業推薦を導入しなかった。すでに長い歴史のあった工学部推薦は実質的には学業推薦であったが、その要項



「昭和59年度大学入試要項決定」（『時報』第398号）

には文系に新設される学業推薦とは異なる部分があり、それを変更して学業推薦として一本化するよりは、工学部推薦として存続させたほうがよいと判断したためである。両者が一本化されるのは2000（平成12）年のことである。

推薦入試は、高校長の推薦を出願要件としているが、実態としては、現在では明確に区別されているように「指定推薦」型と「公募」型に分けられる。前者は、推薦できる高校と人数を指定し、高校がそれに応じるタイプで、後者は、大学からそうした指定はなく、生徒が推薦希望を出し、高校が特に問題ないと判断すれば推薦するというタイプである。本学の学業推薦は前者であり、スポーツ推薦とキリスト者推薦は後者であったが、後者については、上述のように、推薦入試の要項が一般に公開されていなかったため公募として不完全だったといえよう。しかし、後述のように、それでも志願者は集まった。

夜間学部（文学部二部、経済学部二部）は推薦入試を採用しなかった。前年の1983年に二部（夜間部）有職者特別入学を導入し、夜間教育機関としての設置趣旨をふまえて、有職者が入りやすい入試制度をすでに準備したと考えてのことである。

募集定員（当時は募集人数という言葉を使用して

いる)は、大学全体で、スポーツ推薦が65名以内、キリスト者推薦が40人以内、学業推薦が230人、工学部推薦が160人、有職者特別が70人程度とある[時報398]。スポーツ推薦、キリスト者推薦に「以内」、有職者特別に「程度」がついているのは、出願者が少ない場合のことを考えて、やや曖昧にしたのであろう。ともあれ、これらの募集定員を合計すると565人であり、本学の当時の募集定員全体(2,300人)の25%にあたる。本学は、入学者の4分の1を学力試験によらない方法で選抜することを決めたのである。ちなみに、この当時は、東北学院高校、東北学院榴ヶ岡高校からの「内部推薦」は、募集要項にもとづく入試として位置づけられていない。

また、募集人数で注目すべきは、スポーツ推薦における募集人数が学部間で大きく異なっていた点である。募集人数65人の学部別内訳をみると、経済学部が45人と圧倒的に多く、残りの20人は、文学部と法学部で各10人となっている。さらに、工学部は人数を明記せず「若干名」としている。募集定員の偏りは今日も残っているが、制度導入当時のほうが学部間格差は大きかったことがわかる。

これらの推薦入試・特別入試の選考方法は、すべて書類審査、面接および小論文であった。学力試験を課さないという文部省の方針は守られていた。ただし、工学部推薦では、「面接資料作成」という名称で、数学と理科に関する簡単な試験が行われていた。それをもとに面接を行い、学力をチェックする材料とするというものであった。

制度導入直後の推薦入試、特別入試にどの程度の出願者があり、合格するためにどの程度の競争率があったのかについては『入試資料』にデータが掲載されていないが、1983年の『時報』[時報402]によると、導入初年度の受験者は全体で708人であった。募集人数との関係でみると1.25倍であり、それなりの競争があったことがわかる。当時は、現在のように、推薦入試は原則として不合格にしないという考えは強くなく、何らかの試験による競争によって選抜されるのが当然と考えられていた。

(2) 推薦入試・特別入試の変化

推薦入試と特別入試は、その後、1994(平成6)年までにどのような変容をとげたのであろうか。

まず、2つの特別入試が追加された。1993年には「外国人留学生特別入試」、翌94年には「帰国子女特別入試」(その後、帰国生特別入試と改称される)が、すべての学部で導入される[時報510]。いずれ

も、国際化の進展の中で多くみられた留学生や帰国生が、日本で激化する「受験戦争」に巻き込まれないようにするための措置として、当時の文部省が導入を推奨したものである。もっとも、本学では、多くの出願者が見込めたわけではないので、募集人数はともに「若干名」とした。

若干名という表記について補足しておく、大学はさまざまな入試の入学定員を合計して全体の入学定員と一致させなければならないが、定員を若干名としておけば、その分は定員の合計から外すことができた。しかし、そこには濫用の危険性もあり、文部省は、この頃から、推薦入試については定員を若干名ではなく数字として明確化することを求めるようになる。ただし、特別入試については若干名が認められたということであろう。

つぎに、推薦入試についてみると、1989年に教養学部が新設された際に、教養学部部分の募集人数が増えたことに加えて、スポーツ推薦に関して募集人数と選考方法に重要な変更があった。

まず、募集人数をみると、1984(昭和59)年の制度発足時65人であったスポーツ推薦の募集人数は、1991年には138人と倍増している。そのうち、教養学部新設による増加分は20人であり、残りの53人は既存学部での増加である。その内訳は、経済学部が30人、法学部が15人、工学部が8人である。工学部の増加は「若干名」だったものを各学科2人と明記した。上述の「定員化」要請に応えたものである。

スポーツ推薦の選考方法が変更されたのは1990年である。それまでの書類審査、面接および小論文に加えて「スポーツテスト」が新たに導入された[時報467]。これは、書類審査ではよくわからないスポーツ実技能力を実際にみるためのテストであり、面接と小論文の試験の前日に、午前中は運動能力測定、午後は種目ごとの実技テストが行われた。これにより、スポーツ推薦の試験は2日間に及ぶことになった。

スポーツ推薦の募集人数、選考方法が変更される背景にあったのは、この推薦制度への志願者の多さであった。1988年までのデータはないが、1989年には、スポーツ推薦への志願者は408人であり、合格者・入学者は145人、実質倍率は2.8倍であった。募集人数65人では受け皿としてあまりにも少ない、また、書類審査だけではスポーツの能力の優劣をつけるのがあまりにも難しい。そこで、募集人数を増やし、スポーツテストを導入したと推測できる。

なぜスポーツ推薦に志願者が殺到したのか、その

原因も容易に想像がつく。上記のように、学業推薦は指定推薦型であり、志願者数を大学がコントロールできる。キリスト者推薦は公募型であるが、キリスト者でなければ出願できないという制約が大きい。それに対して、スポーツ推薦は典型的な公募型推薦であり、一般入試での入学が厳しさを増すなかで、一部の受験生はこれを大学入学への「近道」と捉えたとしても不思議ではない。しかも、小論文の成績は、そうした受験生の方が出来がよいかもしれない。スポーツテストの導入は、そうした制度「悪用」への対策であったと考えられる。

ちなみに、スポーツテスト導入後もスポーツ推薦の競争率は高い状態が続き、1990年から1994年の平均でみると2.3倍である。これは同じ期間のキリスト者推薦の平均倍率1.1倍、学業推薦（工学部推薦を含む）の1.4倍、有職者特別の1.3倍と比べても、顕著に高い。

（3）一般入試の変化

1980年代半ばから90年代初めにおける大学志願者増加の原因は、いわゆる「団塊の世代」の子どもが大学進学期を迎えたこと、バブル経済を背景に大学進学率、とくに女子の4年制大学進学率が高まったことにある。それに対して大学の 신설は進まず、既存の大学に受験生が殺到した。その一部は推薦入試・特別入試を利用することができたが、ほとんどは一般入試を受験するしかなかった。本学でも、一般入試の志願者数は1986（昭和61）年の11,433人から1993（平成5）年には23,713人と急増する。7年間で2倍以上、平均すると毎年10%以上の増加率で志願者が増え続けたことになる。

こうした状況の下で、大学は、規模を拡大し募集定員を増やすことが歓迎された。本学では、1989年に教養学部を設置したことで入学定員を200人増やし、1991年には経済学部と法学部で臨時的定員増を申請して入学定員を2学部合計で150人増やした。教養学部の設置はあくまで東北学院創立百周年記念事業の1つであり、大学志願者急増に対応することを念頭に置いたものではなかったが、結果としてはそうした機能を果たした。とくに、学部の性格上、急増する女子の大学進学者の受け皿となったため、多くの志願者を集めることに成功した。

入試実施方法についてもいくつかの変化がみられた。

まず、試験日程についてみると、昼間学部の一般試験の日程は、それまでは3日間が長く続いていた

が、教養学部を設置した1989年に4日間に増やし、翌90年には5日間とした。そうしなければ、受験生を受け入れる教室数が足りなくなったからである。また、文・経・法3学部の入試は土樋キャンパスで行われていたが、教養学部の試験会場は泉キャンパスとしたため、工学部の多賀城キャンパスと合わせて、本学だけで3会場が設置された。日数が増え、場所が増えることによって、入試の準備と運営実施は格段に難しくなる。しかし、この時期は、いわゆる「地方入試場」は札幌・青森・東京の3か所のみであり、それが増えるのは1998年以降である。

つぎに、志願者急増への対応として、1993年、一般入試の「面接」が廃止された。それまで、本学の一般入試では、学力試験の終了後、すべての受験生を対象に面接が行われていた。その趣旨は、本学の建学の精神の確認とくに大学礼拝への参加意志の確認であり、時間的には2～3分で終わるものであった。しかし、受験生の急増によって、面接までの待機時間が長くなり、受験生の負担が深刻化していった。そこで、1993年からは面接を廃止し、その代わりとして、試験開始前に大学礼拝の説明を行い、試験終了後にそれに対する質問を受け付けるという現在まで続く方法が採用された。また、面接の廃止によって、試験開始時刻はそれまでの午前9時30分から10時30分になったことも受験生に歓迎された。

さらに、1992年、英語の解答方法がそれまで記述式からマークシート式に変わったことも志願者急増への対応である。英語は全受験者の必須科目であり、採点には多くの時間を要していたが、これによって、英語教員は採点業務から解放されることになった。

最後に、志願者増への対応ではないが1993年、一般試験の開始時期がそれまでの2月中旬から2月1日へと大幅に早められたことにもふれておかなければならない。当時、一部の私立大学が一般入試の時期を1月まで早めることで志願者を増やしていたなか、文部省が一般入試の時期を2月1日以降とすることが望ましいという行政指導を行った。これを契機に、本学では、一般入試を許される範囲でできるかぎり早期に実施することを決断したのである。一般入試が2月1日に始まることは現在も続いている。多くの大学では、志願者増のピークが1992年だったのに対し、本学では1年遅れて1993年となったことには、この時期変更の効果があったと思われる。



「平成12年度大学入試要項」〔時報 第573号〕

2. 入試多様化の加速（1995～2004年）

この期間は、入試に特化した新しい組織のもと、本学における入試の多様化は最盛期を迎える。一般入試、推薦入試・特別入試に多くの変更が加えられるだけでなく、2000（平成12）年にはAO入試が導入され、本学入試において重要な役割を果たすようになる。

その背景にあったのは、1993年までの急増の反動としての志願者急減である。志願者の減少は、基本的には、18歳人口の減少によるもので全国的にみられた現象であった。しかし、本学の場合、それを補うはずであった大学進学率の上昇率が東北地方では伸び悩んだこと、公立大学など競争相手となる大学の新設が相次いだことによって、より深刻なものとなった。

本学では、1993年に25,441人でピークに達した志願者は、その後毎年減少し、2001年には11,788人となる。この数字は、志願者が急増する前の1980年代前半における志願者数11,000～12,000人とほぼ同じであるが、この間、教養学部を設置して入学定員を200人増やしていたことを考慮に入れると、実質的には以前の水準を割り込んでいたことになる。さらに、2000年以降、AO入試の導入の効果もあり、減

少率はかなり穏やかになるが志願者減は止まらず、2004年には10,556人まで減少する。

こうした志願者急減に対応するために、本学では、入試における工夫・改革が喫緊の課題となった。そのため、1995年には東北学院大学入学試験センター（以下、入試センターという）が設立され〔自己点検・評価白書2000〕、本学における入試改革に中心的役割を果たすようになる。入試センターの設置によって、本学の入試に関する調査研究および企画立案機能は大幅に強化されることになる。これらの機能強化は、2002年に入試部（現在はアドミッションズ・オフィス）が設置されることによってさらに進む。実際、この時期に実施された入試改革のほとんどは、入試センター、入試部から提案されたものであった。

志願者数の急減による、大学の「買い手市場」から高校の「売り手市場」への転換は、本学関係者の入試への関心を高めるとともに、入試制度に関する意識に大きな変化をもたらす。

第一に、志願者急減は一般入試において顕著であったため、一般入試以外の入試方法への関心が高まる。一般入試に大きな期待ができない以上、ある程度の質をもった入学者を安定的に確保できる別の入試方法がないかという関心である。新しい推薦入試、さらにはAO入試への着目は、そうした意識変化によるものであった。

第二に、入試はカリキュラムと同様に学部学科の重要決定事項と考えられ、しかも学部学科間で意見はしばしば対立した。一般入試における後期日程の設定のように、入試センターや入試部からの提案があっても、それを受け入れる学部学科もあれば、拒否する学部学科もあった。しかし、この時期の本学では、学部学科ごとの立場の違いを認めあい、入試の全学一律化にはこだわらなかった。その結果、入試制度は複雑になった。

入試制度とは直接関係しないが、入試情報と入試広報についても大きな変化があった。

入試情報については、情報開示の必要性が強く意識されるようになる。それは、文部省（2001年から文部科学省）の指導への対応という面もあったが、基本的には、それが大学への社会的信頼を高め志願者を増やすことにつながるという認識が本学において強まったことによる。高校や予備校に配付される『入試資料』においては、1997年から入試別に学部学科ごとの志願者・受験者・合格者・入学者の数が明示され、2000年からは一般入試における補欠合格

数が明示されるようになった。そのほかにもさまざまな入試情報が開示され、「入試の透明化」が進んだ。

受験生に対する大学・入試広報のあり方は、現在でも行われているオープンキャンパスが登場することで大きく変わる。それ以前は、高校・予備校あるいは業者が設定する入試説明会に入試担当者が出向き、大学や入試に関する情報を提供することが広報活動の中心であった。この方式は現在も続いているが、対応人数、提供できる情報の質と量には限りがある。それを解決したのがオープンキャンパスであり、1990年代半ばから、各大学で入試広報の中心となっていく。本学では1999年8月に初めての本格的なオープンキャンパスが泉キャンパスで行われた[時報573]。これ以降、オープンキャンパスは、全学をあげて大学・入試広報に取り組み場となった。また、大学を紹介する冊子『大学案内』の内容も充実されていった。

以下では、この志願者急減期において、本学の一般入試および推薦入試・特別入試にみられた変化を概観するとともに、新しいタイプの入試であるAO入試の導入についてみることにする。

(1) 一般入試の変化

入試センターが新設された1995（平成7）年以降、本学志願者の急減は一般入試において顕著であったため、入試センターがまず着手したのは一般入試の改革であった。2000年までの6年間に多くの変更が加えられたが、なかでも重要なのは、1996年に行われた「後期日程」の設定と1998年以降の「地方試験場」増設である。

まず後期日程であるが、それまで、一般入試は、昼間学部は2月に、二部（夜間学部）は3月に行うことが通例となっていた。後期日程の設定とは、この3月の二部入試を昼間学部の2回目の入試としても利用し、受験生の受験機会を増やそうとするものであった。しかし、その効果の大きさへの疑いと二部入試への悪影響の心配から、1996年に導入したのは法学部と工学部だけであった。ちなみに工学部は、すでに1994年には、一般入試での受験機会を増やすため、それまで1日だった試験日を2日に増やしており、後期日程の導入にも積極的であった。

導入初年度は、法学部は募集定員15人に対して志願者305人、工学部は募集定員38人に対して志願者247人と予想以上に多く、二部入試への影響も限定的であった。しかし、その後も他学部学科の参加は

進まず、ようやく4年後の2000年に文学部キリスト教学科を除く全学部全学科が導入した。同年に文学部、経済学部とも二部が廃止され、二部入試への影響を心配する必要がなくなったためである。これ以降、3月入試は昼間学部の後期日程としての意味をもつだけになった。

後期日程では、試験科目に関する工夫も図られた。1999年には、受験科目を2科目とし英語を必須から外した。英語が必須で、ほかに2科目選択の3科目による学力試験という本学の一般入試の長い伝統に変更が加えられた。

つぎに地方試験場であるが、既述の通り、本学の一般入試において地方試験場は、長らく札幌、青森、東京の3か所であったが、しかし、1998年の秋田、盛岡を皮切りに、翌年には郡山、その翌年には山形と、東北全県に試験場が設置されていった。東北地方の受験者を重視したためである。他方、東北地方以外では、地方試験場を増設しても志願者数回復の見通しが立たない状況になっていた。実際、志願者がピークの1993年には東京会場で2,686人、札幌会場では708人が受験していたが、2000年には東京での受験者は255人、札幌では126人まで減っていた。

地方試験場が増設される一方、志願者数減少の現実をふまえ、前期日程の期間短縮と本学試験会場の統合が行われた。1998年、前期日程の期間がそれまでの5日から4日に短縮されるとともに、教養学部の試験場は泉キャンパスから他の文系学部と同じ土樋キャンパスとなった。有限な学内資源を地方試験場に集中的に投入するための合理化であった。

一般入試における工夫・改革としては、後期日程と地方試験場のほかに、試験科目の見直しも行われた。1999年には、一般入試前期日程の試験科目に「商業」が加えられた。商業系高校からの受験生に配慮した科目としてはそれまでも「簿記」（現在は簿記・会計）があったが、さらにそれを強化するねらいがあった。また、同年、後期日程の試験科目に「小論文」が加えられた。文章力に長けた受験生へのアピールをねらった。その後、商業は2018年に廃止されたが、小論文は現在も残っている。

しかし、こうした努力にもかかわらず、一般入試の志願者減に歯止めがかかるとはなかった。

(2) 推薦入試・特別入試の変化

一般入試による大学入学がそれほど難しいことではなくなれば、当然ながら、推薦入試・特別入試への志願者も減少傾向となる。そうしたなか、本学の推

薦入試・特別入試にはどのような変化があったのだろうか。

まず、新しい推薦入試が登場する。1997（平成9）年、経済学部商学科（現在の経営学部）が導入した資格取得による推薦入試（以下、資格取得推薦入試という）であり、簿記検定による資格取得者を対象にした公募型の推薦入試である。この推薦入試で注目すべきは、これまでの推薦入試が全学部学科一律導入だったのに対して、ひとつの学科が独自の観点から「質の高い」入学者を確保するために提案し、実現した推薦入試だという点にある。

他方、既存の推薦入試では、高校の「売り手市場」化が明確になった2000年以降、学業推薦とスポーツ推薦において、それに対応した選抜方法の変更がなされる。

学業推薦では、1999年までは、書類審査、面接、小論文試験によって不合格者を出しており、1999年には受験者526人中49人が不合格であったが、2000年からは原則として不合格者を出さないこととした。その方が「優秀な生徒を安心して推薦できる」という高校からの声に応じた形であるが、その背景にあったのは、大学入学それ自体が大幅に易化したことである。

スポーツ推薦では、1990年から実施されていた「スポーツテスト」が2001年から廃止される。その理由は、スポーツテストが受験生の大きな負担となっていたということであったが、その背景には志願者減があった。代わって、強化指定部の設定とスポーツ実績評価の制度が導入された〔時報585〕。受験生のスポーツ実績は一定の基準で評価され、高い評価を得た者は、その時点で合格がほぼ保証される仕組みとなった。これも、基準を明確にすることで「優秀な選手に声をかけやすい」という学内および高校の各運動部関係者の声に応じたものであった。そこには、なにもしなくとも志願者が集まっていたかつてのスポーツ推薦の姿はもはやなかった。

こうして、推薦入試といえども何らかの試験による競争によって選抜されるのが当然と考えられていた時代が終わり、推薦入試は基本的には不合格者を出さない入試という認識が一般化していった。

推薦入試については、この時期、もう一つ重要な変化がある。それは東北学院高校、東北学院榴ヶ岡高校からの推薦、いわゆる「内部推薦」が2000年から募集要項に定員化されたことである。それまで文部省は、系列校からの推薦を募集要項の対象外とすることを認めていたが、2000年からはそれが許され

なくなる。本学では、内部推薦に「TG推薦」という名称を与え、入試制度として募集要項に公示した。定員も明示し、実際の推薦者よりはやや少ない241人とした。試験は12月に小論文によって行うこととした。しかし、不合格者を出さないという方針はそれまでと同じであった。

特別入試については、二部（夜間部）有職者特別入試に大きな変化があった。1996年に二部（夜間部）社会人特別入試と名称を変え、1998年にはそれまでの11月（A日程）に加え、3月にも行う（B日程）こととした。しかし、2000年には文学部二部、経済学部二部が廃止され、それに代わり文・経済両学部が昼夜開講制を導入したため、夜間主コース入学希望者のため「夜間主コース社会人特別入試」と名称を変え、2009年まで存続する。

（3）AO入試の導入

1994（平成6）年から続いていた志願者減は、2000年を境に減少率がやや鈍化する。この年、アドミッションズ・オフィス入試（以下、AO入試という）が全学部学科で導入されたことによる。この入試は、誰でも出願できる公募型入試であるが、学力試験を課さないという点で、推薦入試・特別入試とも一般入試とも異なる新しいタイプの入試であり、当時、すでにいくつかの大学で導入されていた。2021（令和3）年に「総合型選抜」と改称された入試方法の前身である。

本学のAO入試は、申請書類の審査とそれにもとづく面接（30分）による第一次選抜、再度の面接と小論文による第二次選抜からなるが、第一次選抜における評価（A～Dの4段階評価）が可否に大きな影響を与えた。Aは合格がほぼ確実、Bは合格の可能性が高い、Cは不合格の可能性が高い、Dは不合格であった。受験生は第一次選抜の評価について通知を受けてから第二次選抜への出願を決めることができた。評価がAとBの者はほぼ全員が第二次選抜に出願するが、Cで出願するのは半分ほどであった。

AO入試は、一般入試における志願者急減を背景に、一般入試受験生とは異なる層からの出願者を開拓しようとするものであった。そこには、一般入試に対応できないカリキュラムや環境で学ぶ非進学校の生徒のなかに、さらには進学校にいながら一般入試に向けた勉強にためらいを感じている生徒のなかに、本学入学者にふさわしい能力・資質をもった者が相当数いるのではないかという見通しがあった。募集定員は全学で249人と入学定員全体の約1割を

占め、かなり多めの設定であった。

導入初年度の2000年は志願者は474人、合格者が354人、倍率は1.3倍であった。翌2001年は志願者が553人に増え、合格者は351人、倍率は1.6倍となった。注意すべきは、ここでの志願者数とは第二次選抜への志願者数であり、第一次選抜への出願者はそれよりはるかに多いということである。第一次選抜では受験料を取らなかったため、志願者として算入していないのである。2002年のデータでは、第二次選抜への志願者が512人なのに対して第一次選抜への出願者は955人であった。こうして、AO入試は志願者を増やすのにかなりの効果があった。

また、AO入試の合格者からは入学辞退者が出ず、入学者の確保という点でも有効であった。実際、AO入試からは毎年300人以上の入学者を確保できた。それは学業推薦による400人を超える入学者数には及ばないものの、一般入試の不調に直面する本学にとっては大きな数字であった。こうして、AO入試は、本学入試の新たな柱となっていく。

最後に、AO入試が、各学部学科に入学者選抜の基本方針を意識させることになったことにもふれておく。AO入試を重ねるなか、従来型の学力試験によらず、受験者のどのような「能力・資質」に着目するのか、それを書類審査や面接でどう引き出し、評価していくのかについて、各学部学科をはっきりとした方針をもたなければならなくなった。そして、その方針は、2003年以降、各学部学科の「AO入試における重要評価点」として公表されることになる。それは、その後、文科省が唱える「アドミッション・ポリシーの明確化」の先取りであり、本学で2016年からすべての入試について明示している「重要評価点」の先例といえるものである。

3. センター利用入試の導入（2005～2020年）

AO入試の導入によって、本学の志願者数減少ペースは鈍化するが、「底を打つ」には至らなかった。それが感じ取れたのは、大学入試センター試験（以下、センター試験という）利用入試の導入によって志願者が前年度比1,800人増となった2005（平成17）年であった。実際、それ以降2020（令和2）年まで、本学の志願者の数は、年ごとの変動はあるものの10,500～12,700人の幅で動き、傾向としての増減を見て取ることはできない。

このように、志願者数の安定に貢献したセンター利用入試であったが、その意義・効用については学部学科の意見が異なったため、導入それ自体も遅れ、



「平成17年度大学入試要項」（『時報』第628号）

導入も全学一律とはいかなかった。1990年代後半から学部学科にみられた「入試独自論」はここでも続いていたのである。センター利用入試に全学部学科が参加するのは、導入から7年後の2012年である。ともかくセンター利用入試が導入されることで、現在の本学入試の根幹となる4つの入試、一般入試、推薦入試、AO入試、センター利用入試が出そろえることになる。

その後、志願者数全体は比較的安定していたにもかかわらず、一般入試の志願者は2010年代半ばまでは減少傾向が続く。センター利用入試を導入した2005年の一般入試志願者は9,220人だったが、2010年には7,610人、2015年には5,536人とかなり大きな減少である。しかも、それにともなって、それ以前の志願者急減期でもみられなかった新しい状況が生じた。実質倍率を一定水準に保つことで入学者の質を維持するためには、一般入試による合格者・入学者を減らすしかなかったのである。これをどの入試の入学者で埋めるのかは、この時期の大きな問題となる。ちなみに、2016年以降は、この状態をなんとか維持できている。

こうした入試の実態とは別に、大学入試については、2005年頃から本格化し現在まで続いている注目

すべき変化がある。それは、この時期に進められる大学の教学改革の一環としての入試改革である。

教学改革の基本的考え方は、つぎのようなものである。各大学そして各学部学科は「理念・目的」にもとづいて「人材養成の目的」をたてなければならない。さらに、それにもとづいて「教学上の3つの方針」（学位授与方針、教育課程編成・実施方針、入学者受入方針）をたて、さらにそれにもとづいたさまざまな方針をたてなければならない。それらの方針は社会に公表され、それらの方針に従って教学改革は進められなければならない。そして、改革の進捗状況はつねに自己点検・評価され、必要に応じて修正を加えなければならない。さらに、そうした過程全体が社会に公表されなければならない。

こうして、入試制度は、各大学・学部学科の「理念・目的」「人材養成の目的」「入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）」「求める学生像」にかなった入学生を得るために、適切な選抜方法を用いる「目的・方針適合的」制度として構築・運用されなければならないということになったのである。

本学では、2009年に「入学者受け入れの方針」を定めるが〔改革の経緯と現状Ⅲ〕、それが入試改革として具体化するのは2017年からである。この年から、『受験ガイド』と『学生募集要項』には、各学部の「入学者受け入れの方針」、各入試における「重要評価点」、各学部学科の「理念・目的」「求める学生像」が明記されるようになる〔改革の経緯と現状Ⅳ〕。

また、こうした「目的・方針適合的」入試システムは、それを進め、点検するための組織整備も求める。本学では、2018年には、入試部がアドミッションズ・オフィスと改称され、入試実施・入試システム・入試企画・入試広報の4係制に移行したほか、入試制度・学生募集の企画、選抜方法の評価・検証などを仕事とする専門職アドミッション・オフィサーが置かれた〔改革の経緯と現状Ⅳ〕。

しかし、こうした諸改革が実際の入試実務や受験生の行動に与えた影響は、基本的には限定的であった。そのなかで、比較的大きな影響を与えたものとして、「入学定員は守られなければならない」という要請がある。入学定員と実際の入学者数の乖離を小さくすることは、この時期、入学定員全体だけでなく各入試の定員についても求められた。これによって、各入試の入学者数の多寡はあまり気にせず、入学者全体数でつじつまを合わせればよいとした従来の考え方は通用しなくなる。

以下では、センター利用入試の導入とその後の拡大、2005年以降にみられる一般入試、推薦入試・特別入試、そしてAO入試の変化についてみていく。

（1）センター利用入試の導入

センター試験は、前身の「大学共通一次試験」の後を受けて1990（平成2）年から実施されるが、最大の変更点は、私立大学もそれを利用できるようにしたことである。したがって、1990年代を通じて、私立大学の入試改革においては、センター試験を利用するかどうか大きな論点になった。

本学では、センター試験利用を進める声は、工学部には根強くあったが全学的には決して強くなかった。他大学の様子を見ても、センター利用入試を導入することで志願者が増えることはほぼ確実であったが、強くためらう学部学科もあった。その理由は、おもに下記の2つである。

第一に、センター利用入試の受験者は、ほぼ全員が他（国公立）大学を第1志望にしており、本学に合格したとしても、そのうち入学する者の割合（いわゆる歩留率）はきわめて低い。また、その入学者も不本意入学者である。少なくともそうした心配が大いにある。

第二に、入試にセンター試験を使用する大学は、試験会場の提供・設営、試験監督の配置などセンター試験の実施に全面的に協力する責任がある。このコストはセンター利用入試から得られるメリットを本当に上まわるのかという疑念がある。

その結果、本学におけるセンター利用入試の導入は2005年まで遅れ、導入の際も、学部の足並みは揃わなかった。学部として導入したのは法学部と工学部、導入しなかったのは経済学部であった。文学部と教養学部では学科によって対応が分かれ、文学部では歴史学科だけが導入、教養学部では地域構想学科だけが導入しなかった。募集定員も全学で62人と少なく、「お試し」導入としての意味が強かった。当時の『時報』をみても、センター利用入試はトップ見出しになっていない〔時報628〕。また、初年度は、本学が責任をもつセンター試験会場としては本学ではなく仙台一高が使われた。本学土樋キャンパスが会場となるのは翌年からである。

導入初年度の2005年、全学の募集定員62人に対して志願者は1,706人、合格者617人に対して入学者は110人、歩留率は18%であった。ちなみに、この年の一般入試前期日程の歩留率は43%である。これら数字をどう解釈すべきかについても学部学科の意見

は異なり、全学部がセンター利用入試を導入するまでにはなお長い時間を要した。

しかし、部分的にせよセンター利用入試が導入され、志願者が増えたことで、12年におよぶ本学の志願者減少期間は終わるのである。

(2) センター利用入試の拡大

センター利用入試は、導入から2年後の2007（平成19）年、利用者を増やすために後期日程を設けた。前年には文学部キリスト教学科と教養学部地域構想学科が加わり、この年から文学部英文学科が加わったので、導入していないのは経済学部だけとなった。経済学部が加わるのは2009年であるが、前期日程に限定しての参加であった。経済学部が後期日程にも加わり、全学部学科が揃うのは2012年のことである。

センター利用入試は導入してから順調に志願者を増やし、2010年には3,530人に達した。翌年の2011年には、震災のため少し減るものの、2012年からは3,000人台を維持し続け、2019年には4,119人を記録した。これは同年の志願者全体12,446人の33%を占め、志願者の獲得という点では、センター利用入試は本学にとって不可欠の入試となったのである。

入学者の確保という点でも、センター利用入試は重要度を増していった。合格者の歩留率が、ある程度の水準を維持したからである。とくに経済学部が参加した2009年から7年間の歩留率は、17～20%で安定し、センター利用入試による入学者は2011年から3年間は300人を超えるまでになった。これは入学者全体の1割以上を占め、AO入試による入学者数とほぼ同じであった。その後、2016年以降は歩留率が15%前後に落ち込み、入学者数は250人前後となるが、有力な入学者確保源であることに変わりはない。

(3) 一般入試の変化

一般入試では、2007（平成19）年、前期日程に大きな変更が加えられた。まず、期間をそれまでの4日から3日に短縮し、1日目は「全学部型」、2・3日目は「学科分割型」とするというものであった。ねらいは、日程を短縮しつつ、受験生の第1希望学科の受験機会を増やすことにあった。

それまでは、どの学科を第1志望として受験する場合でも、前期日程での受験機会は指定された日の1回だけであった。もちろん、他日に実施される他学科を受験することはできたが、それは第1志望ではない。新しい方式では、受験生は初日の全学部型

で第1志望学科を受験し、2・3日目の学科分割型でその学科の2回目の受験ができた。もちろん、学科分割型の別の日に設定された他学科を受験することもできた。この方式は2021（令和3）年まで続けられた。

地方試験場の増設も続けられた。2007年には八戸、鶴岡に試験場が新設され、東北地域での試験場整備は一段落する。その後、新設の重点は北海道に移り、2011年には旭川、帯広に試験場が設置されたが、旭川は2015年、帯広は2016年に廃止された。2015年に設置された函館は、以前からあった札幌とともに現在まで続けている。

しかし、こうした対策にもかかわらず、一般入試の志願者は減少傾向に歯止めがかからなかったこと、しかも、実質倍率を維持するために、一般入試による合格者・入学者を減らすしかなくなる状況が生じたことは上述のとおりである。

具体的な数字でみると、一般入試による入学者は2005年が1,806人（入学者数全体の59%）なのに対して、2010年には1,348人（同46%）、そして2015年は1,005人（同35%）まで減るのである。事態の深刻さは、それ以前の志願者急減期と比較するとわかりやすい。1993年から2000年にかけて、一般入試の志願者は23,326人から11,490人に減っているが、一般入試による入学者は2,150人から2,026人とほとんど変わらず、入学者全体に占める割合もともに62%で同じであった。そうした時代、つまり志願者が減っても十分な合格者・入学者を確保できた時代が終わり、志願者の減少が合格者・入学者数の削減に結びつく時代が始まったのである。本学の入試にとって新たな時代である。

こうした志願者減を背景に、本学試験場の統合も進められた。2009年には、前期日程における工学部の試験場が多賀城キャンパスから土樋キャンパスに移された。1964（昭和39）年の学部設置以来、一般入試を一貫して多賀城で実施してきた工学部にとっては、1つの時代が終わる変更であった。これによって、かつて土樋・泉・多賀城の3キャンパスで実施されていた一般入試の試験は、すべて土樋キャンパスに統合された。そうしても、教室の容量になんの問題もないほど受験生が減っていたのである。

ところが、それまで減少を続けていた志願者が2017年に6,707人と前年より1,000人以上増えるという事態が生じた。原因は、この年から採用したweb出願であった。web出願者は、出願が簡単なうえ受験料が5,000円安く設定された。入試部の分析によ

ると、これによって本学を志願する実受験者が増えたこともあるが、同じ受験者による併願数が増えたことが大きな要因であった。この効果は3年間続いたが、2020年には5,504人と2016年の水準まで戻っている。ちなみに、web出願はセンター利用入試でも採用されたが、一般入試のような効果はみられなかった。

ついでに、このような情報技術の進歩によるこの時期の入試の変化について、ほかに2つ挙げておこう。第一は、合格発表の仕方である。本学では2008年から、従来の学内掲示板への掲示に加えてインターネット上の「合否照会システム」から合否結果を見ることができるようになった。これによって、合格発表日に学内掲示板前に黒山の人だかりができる光景は消える。第二は、受験生の大学・受験情報の収集源が『大学案内』といった紙媒体から大学webサイトへと移ったことである。これによって大学・入試広報の手法も大きく変わることになる。

最後に、2020年に導入された英語外部試験利用入試についてふれておく。これは一般入試を受験する者がさまざまな英語外部試験を受験して獲得したスコアについて、英語の得点に換算するため一般入試の英語を受験する必要がないというものである。英語外部試験を大学入試に利用することを推進する文科省によって導入が促された。本学ではまず文学部が導入し、翌2021年からは英語資格・検定試験利用入試と改称して全学部学科が導入した。

以前であれば学部学科ごとに対応が異なっても不思議ではない新しい入試を全学部学科がそろって導入したことは注目される。現在進行している入試改革が、全国の大学の教学改革の推進という大きな枠組みのなかで、その一環として進められていることはすでに述べたが、この教学改革では、学部学科の自律性を認めながらも、学長のリーダーシップや学長の責任による大学全体の「教学ガバナンス」の重要性が強調され、そのための法令改正も行われている[改革の経緯と現状Ⅳ]。それによって、本学では1990年代から続いていた「入試制度は学部学科の決定事項」という意識は急速に弱まりつつあるのかもしれない。

(4) 推薦入試・特別入試の変化

2005(平成18)年以降、推薦入試にみられた変化はそれほど多くない。もっとも注目すべきは、2013年に導入された「文化活動に優れた者の推薦」(文化活動推薦)である。スポーツ推薦とバランスを

とっての推薦制度であるが、志願者は少なくスポーツ推薦が100人以上なのに対して毎年10人程度である。

キリスト者推薦は、2009年にキリスト者等推薦と改称する。キリスト者でなくともキリスト教学校に在籍し、キリスト教にもとづく活動に熱心な生徒を推薦の対象にするものであった。文化活動推薦の新設とキリスト者推薦の拡大の背景にあるのは、学内文化活動サークルや、キリスト教活動の低迷であり、推薦対象を増やすことによって、入学後、これらの活動に参加する学生を確保しようとしたのである。

前述のように、2013年、推薦入試は「公募推薦型」と「指定校推薦型」の区別を明記しなければならなくなった。本学においては、学業推薦だけが指定校推薦型であり、その他は公募推薦型であった。しかし、経営学部は、この期をとらえて、資格取得推薦に指定校型を新たに導入した。

特別入試の変化としては、2009年に「社会人特別入試」が新設される。当初は経済学部と経営学部だけの導入であったが、2011年には全学部で実施されるようになる。これともなって、「夜間主コース社会人特別入試」は2010年に廃止され、社会人特別入試に統合されることになる。

制度の変更ではないが、学業推薦については、運用面で注目すべき変化があった。それは、2013年から指定校を増やし学業推薦による入学者を増やしたことである。2006年から2012年までの学業推薦入学者は平均で477人であったが、2013年には637人と大幅に増やされ、その後2020(令和2)年までの平均は695人となっている。上述のように、一般入試からの合格者・入学者を減らさざるをえなくなった分は、学業推薦の指定校・指定人数を増やすことで埋めていったのである。

(5) AO入試の変化

AO入試は、2000(平成12)年の導入以来、順調な滑り出しを示していた。それをうけて、2005年には、11月に第二次選抜を行ってきたこれまでのA日程に加え、12月に第二次選抜を行うB日程を設定した。

それまで、AO入試の第一次選抜は、8月末から始まる面接の実施期間を何度かに分けて、それぞれを第Ⅰ期、第Ⅱ期…とよんでいた。これらの第一次選抜でA～Cの評価を受けて出願した者の第二次選抜は、すべて11月の推薦入試と同じ日にまとめて実施していた。これがA日程であるのに対して、B日

程は12月の短期間に第一次選抜と第二次選抜を行うものである。第二次選抜は、12月後半に実施されていたTG推薦入試と同じ日とした。B日程は、他大学の推薦入試で不合格になった者にAO入試の受験機会を与えるためのもので、募集定員も少ないが現在まで続けられている。

この変更以降、AO入試には大きな制度上の変更はない。それだけでなく、志願者数と入学者数において大きな変化がみられないのもAO入試の特徴である。第二次選抜への志願者数でみると、導入初年度の2000年は474人であったが、その後5年ごとの推移をみても、2005年は566人、2010年は544人、2015年は608人、2020（令和2）年が483人となっている。入学者数で見ると、2000年は354人、2005年は324人、2010年は387人、2015年は424人、2020年が354人である。前述の学業推薦と同様に、2015年には一般入試の合格者を減らすために合格者を増やしたこともあったが、2016年以降は300人台に戻っている。他の入試と比べて、安定した入試となっていることがわかる。

おわりに

本稿の目的は、対象とした1984（昭和59）～2020（令和2）年の37年間において、本学の入試に起きた大きな変化の全体像を把握することであった。そのために、本稿は、その変化の中心となった入試の多様化・複雑化の過程を示すとともに、それを進めた要因・背景の分析を試みた。とくに、一般入試が中心であった本学入試に、1984年から推薦入試・特別入試が加わり、さらに2000（平成12）年にはAO入試、2005年にはセンター利用入試が加わった経緯、その現実的意味・役割について論じることが最大の課題であった。紙幅の関係上、さらに詳しく説明すべき多くのことを省略せざるをえなかったが、大きな変化の全体像を把握するという目的は達成できたと自己評価している。

その際、対象期間を志願者数の動向に着目しながら3期に時期区分し、入試制度の変化をたどったことも有効だったと考えている。第1期では急増、第2期ではその反動としての急減、第3期は安定という志願者数の状況が、入試に対する考え方や具体的対応と深く結びついていることを示せたからである。AO入試やセンター利用入試の導入は、当時の志願者数の減少状況を知ることなくして、その意味を理解することは難しい。推薦入試は、導入それ自体は当時の志願者状況とは直接的関係はなかった

が、その後の運用については志願者の増減状況に大きな影響を受けている。いわんや一般入試の工夫・改革は志願者状況への対応そのものである。

ただし、第3期については、センター利用入試が導入され全学部学科で採用され定着していくなかで、一般入試の役割低下が顕著になっていく2005～15年とそれ以後に分けたほうがよかったのではないかといまだに自問している。2016年以降は、それ以前の変化が落ち着きを見せ、本論で説明した入試制度の「目的・方針適合化」が本格化する時期として特徴づけられるからである。しかし、志願者の増減を重視した本稿ではあえて一つの時期区分とした。

いずれにせよ、本稿が志願者動向をふまえた状況分析を行うことができたのは、毎年の入試に関するデータをまとめた『入試資料』を利用できたからである。とくに、本学が実施するすべての入試について、志願者・受験者・合格者・入学者の数字が掲載されるようになった1997年以降は、具体的数字、掲載されている数字やそこから簡単な計算によって得られた数字を挙げることによって、状況説明に説得力をもたせることができた。

学内関係者のみならず高校や予備校の受験関係者に配付されることを念頭に置いて作られる『入試資料』は、1990年代前半までは、誤解をおそれずに言えば、いかに入試の実態を隠すかという観点からデータが並べられていた。その端的な例が、学部学科ごとの競争倍率を示す表で、表には一般入試、推薦入試を区別することなく、各学部学科の志願者・受験者・合格者・入学者の数が掲載されていた。一般入試、推薦入試どちらを受験する受験生にとっても、そして筆者のように入試の歴史をふりかえろうとする者にとっても、ほとんど意味のない数字である。そうした状況を改め、意味のあるデータを掲載するようになった1997年以降の『入試資料』の意義はきわめて大きい。

しかし、その『入試資料』にもデータがないのがTG推薦である。本論でも指摘したように、2000年からは募集要項にTG推薦とその入学定員とともに明記されるようになる。しかし、それ以降も、TG推薦の志願者・受験者・合格者・入学者の数が掲載されたことはない。そのため、本稿でも、TG推薦に関する分析はない。分析のために利用できる公開資料がないからである。地道な資料収集・整理から始めなければならないが、毎年多くの入学者を受け入れているTG推薦の研究は、本学入試の歴史研究において今後の重要な課題である。

本稿では、筆者が直接的・間接的に入試に関わる仕事に関わってきたことで得られた情報・知見を生かすことも課題であったが、これもある程度は達成できたのではないかと自己評価している。本学の入試を複雑化する一要因となった「入試制度は学部学科の決定事項」という意識とその背景、AO入試に込められた志願者獲得戦略、センター利用入試の導入をめぐる議論などは、まさに筆者の入試実務経験にもとづく情報で、入試に関する資料にはまったく出てこないものである。しかし、これらの情報を示すことで、本学入試の変化のダイナミズムはよりわかりやすいものになったはずである。

最後に、本稿で概観した入試の歴史は、これからの本学の生存戦略にどのような示唆を与えるかを考えてみたい。

まず、大学の生存戦略にとって重要なものは「志願者」ではなく「実志願者」の確保・増加であることを確認したい。10人の志願者がそれぞれ2つの学科に出願すれば、志願者数は20であるが、実志願者数は10である。学内併願が可能な一般入試やセンター利用入試では、志願者数が増えているが実志願者数は減っているという現象は起こりうる。重要なのは実志願者数を増やすことであって、志願者数を増やすことではない。

本稿では実志願者数についての記述はまったくない。資料がないからである。しかし、志願者が増えても実志願者が増えなければ、あるいは逆に減っては大学の生き残りに意味がないことを考えると、実志願者数の動向を把握できるためにデータ整備は不可欠となるはずである。学内関係者が簡単にみられる『入試資料』に実志願者に関するデータを掲載するのがもっとも適切な措置であろう。

つぎに、本学において、実志願者を増やすための入試上の工夫・改革の余地はまだ残されているかと考えると、答えは否定的にならざるをえない。もちろん、小さな工夫・改善はまだ可能であるし、その努力を続けることは大切である。しかし、実志願者をはっきりと増やすような新たな入試制度を考え出すことは難しいように思われる。とはいえ、この難題に挑戦し続けることは入試関係者の重要な仕事である。

けっきょく、入試の歴史は入試の限界の歴史であるように思われる。商品とその購買者との関係に例えれば、入試は購買方法であり商品そのものではない。購買方法（＝入試）の工夫・改善で増やせる購買者数（＝実志願者数）には限界がある。実志願者

数を増やすには、大学が提供する教育プログラム、教育内容・方法、教育成果を魅力的なものとし、それによって社会的評価を上げるほかないのである。その意味で、本学が現在進めている教育組織（＝教育プログラム）、教育内容・方法および教育成果に関する諸改革は実志願者を増やすための正攻法なのである。あとは、それが結果を出せるかどうかを注意深く見定めることであろう。

【参考文献】

東北学院大学入試資料 1984～2022

東北学院時報 第398号(1983年)

：昭和59年度大学入試要項決定

同 402 (1983)：「受験の季節」到来

大学で推薦入試実施

同 467 (1989)：平成2年度大学推薦入試

スポーツ推薦で実技テスト

同 510 (1993)：帰国子女対象の特別入試実施へ

同 573 (1999)：平成12年度大学入試要項

オープンキャンパス

同 585 (2000)：大学入試要項決まる

同 628 (2004)：平成17年度大学入試要項

東北学院大学—現状と課題《自己点検・評価白書》

(2000)：入試改革の現状と今後

東北学院大学における改革の経緯と現状Ⅲ (2013)

：学生の受け入れ

東北学院大学における改革の経緯と現状Ⅳ (2019)

：入試改革

齋藤 誠プロフィール

SAITO, Makoto

1954年宮城県生まれ。1981年東北大学大学院法学研究科（政治学専攻）満期退学。

同年東北学院大学法学部講師（1991年教授）。1993年仙台市史編さん調査分析委員、2008年同専門委員。

押川方義の「高橋伝五郎伝」(英文) ーイーデン神学校での資料調査からー

東北学院史資料センター 客員研究員

日野 哲

はじめに

昨年(2023(令和5)年)の3月初め、元本学教授鐸木道剛氏(当時理事長特別補佐)と共に4年ぶりにランカスター神学校を訪問した。今回の目的は、同神学校が同じペンシルヴェニア州にあるモラヴィア大学・同神学校との統合を進めていることから、「今後のランカスター神学校との交流継続と推進(の可能性)を図ること」で、鐸木氏の担当、そして「ランカスター神学校内のERHS(福音・改革派歴史協会 Evangelical & Reformed Historical Society)の資料がイーデン神学校に移管されるとの情報」を基に、その状況を確認すること」で、日野の担当であった。



写真1 ランカスター神学校内ERHSのアリソンさんと共に(2023年)

関係者と面会して確認できたことは、前者については、ランカスター神学校の校長をモラヴィア大学の学長が兼務するなど人事面の変更はあったが、カリキュラムなどの教育面では従来通りの体制が維持されており、本学との交流もこれまで通り進めることができることであった。また後者については、ERHS理事会が2022(令和4)年7月に幾つかの選

択肢の中からイーデン神学校への移転を決定したが、同神学校との最終手続きがまだ済んでおらず、当分の間は現在のままランカスター神学校のキャンパス内に置くこととなったことであった(詳細は、東北学院宗教センター『2022年度宗教活動報告書』第4号(2023年7月31日発行)にて報告)。

我々は、ランカスターでの調査を終えて、ERHS資料の移転先となっているミズーリ州のセントルイスにあるイーデン神学校に向かった。このイーデン神学校のアーカイヴで、我々は今回紹介する押川方義による英文の“A SKETCH OF THE LIFE OF DENGORO TAKAHASHI”(以下、「高橋伝五郎伝」と表記)と出会うこととなった(写真2,3)。

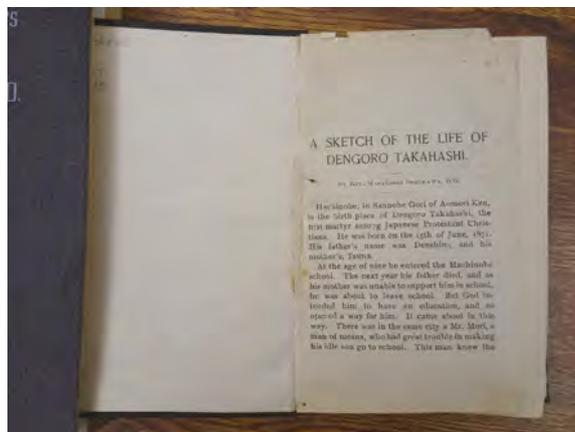


写真2 押川の「高橋伝五郎伝」(英文)

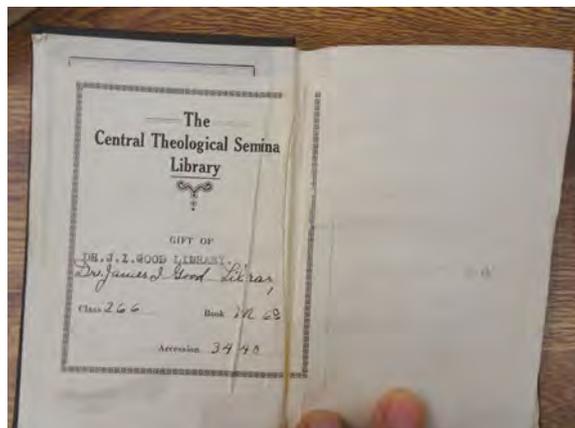


写真3 裏表紙には“The Central Theological Seminary Library”の表示が貼付されている。

イーデン神学校のグッド・コレクション

初めて訪れたイーデン神学校のアーカイヴには、ドイツ改革派教会の外国伝道局長として1906（明治39）年に東北学院を訪れたグッド（James I. Good 1850-1924）の膨大なコレクションが保存されている。16世紀初頭からの宗教改革及び改革派教会の歴史を中心として、その内容が次のように紹介されている（*The Life and Labors of the Reverend Prof. James I. Good, D.D., L.L.D., A memorial Volume.* The Old Orchard Publishers, Missouri, 1944）。

…this is a very rich collection: some 6,700 to 7,000 volumes, 11 shelves of pamphlets, perhaps 1,000 or more slides, some 400 pictures (mounted), and several cases of curios. In addition there are numerous scrap books : 8 relating to events in his life from 1873 to 1921, several containing clippings of his articles. Then there are two boxes of considerable size filled with miscellaneous correspondence.

7000冊に及ぶ書籍類をはじめ、パンフレット、スライド、写真、骨董品、スクラップ、文書類など、グッドが牧師、神学校教授、外国伝道局長などとして仕えた約50年の貴重な資料である。



写真4 J. I. グッド（イーデン神学校アーカイヴ）



写真5 PROFESSOR JAMES I. GOOD
CENTRAL THEOLOGICAL SEMINARY

グッドの来日については、本年報の前号（Vol. 8, 2023年）の拙稿で紹介しているが、イーデン神学校の図書館とアーカイヴには彼の写真が掲げられており、その肩書は、“PROFESSOR JAMAS I. GOOD, CENTRAL THEOLOGICAL SEMINARY”と表示されていた（写真4, 5）。またイーデン神学校の年表には、歴史上の重要事項の一つとして次のように記されている（Robert O. Laaser, *Our Beloves Eden, The Story of the Seminary.* Eden Theological Seminary, Missouri, 1993）。

1934—Central Seminary , Dayton, Ohio, joins Eden.

The James I. Good Library is received.

イーデン神学校は1934（昭和9）年にセントラル神学校と合同した際に、グッドがセントラル神学校に寄贈した書籍類をそのまま受け継いだのである。押川による「高橋伝五郎伝」もその中の一つで、B6判程度の黒表紙の小冊子に、9つの小論考の一つとして収録されている。小冊子には“MISSION TRACTS”というタイトルが付されており、“NINE TITLES BOUND TOGETHER”という記録もあることから、これらは個別に伝道用のトラクトとして活用された後に一冊にまとめられたものと思われる（写真6）。ちなみに、他の小論考は、オランダ改革派（Reformed Church in America）からインドに宣教師として派遣されたJ. チェンバレン（Jacob Chamberlain 1835-1908）のヒンドゥー教に関するものがほとんどである。

このグッド・コレクションについては、イーデン神学校のデボラ・クラウス学長（Deborah Krause）を通して閲覧を希望していたが、アーカイヴを管理するスコット・ホール氏（Scott Hall）があら

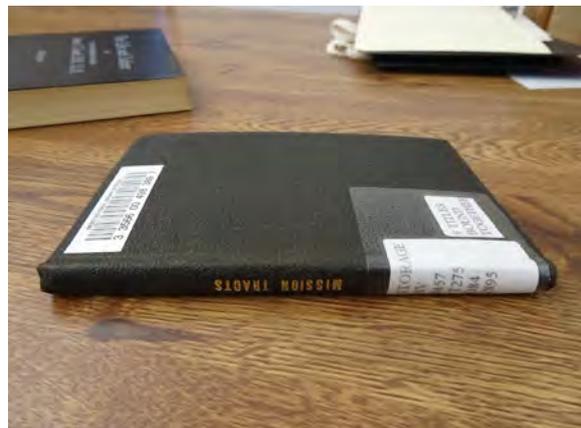


写真6 小冊子 "MISSION TRACTS"

かじめこの中から日本関係の資料をいくつかリストアップして下さっていた。このリストの中に“MISSION TRACTS”が含まれていたのである。

押川方義の「高橋伝五郎伝」(英文)

“MISSION TRACTS”の内容については、別に説明書きが残されており、9つの論考の著者、タイトル、発行者がそれぞれ記されていた。しかし、発行年についてはいずれも「？」が付されており、押川の論考については、次のように説明がなされている。

Oshikawa Masayoshi, 1849-1928. A sketch of the Life of Dengoro Takahashi. Mechanicsburg, Pa. : Board of Commissioners for Foreign Missions, Reformed Church in the U.S., [1895?]

ドイツ改革派教会の外国伝道局によって発行されたものではあるが、なぜ発行年を1895(明治28)年と推定したのかは、他に資料が残されていないので不明である。

東北学院史資料センターに保存されている資料の中に、押川の記述と極めて類似した「高橋伝五郎伝」がある。労働会の機関誌である『芙蓉峰』第14号(1897年5月発行)の付録として、当時労働会塾長であった川合信水が記した「高橋傳五郎君傳」である(写真7)。この号には「故高橋傳五郎氏追悼会」の記事があり、以下のように報告されている。

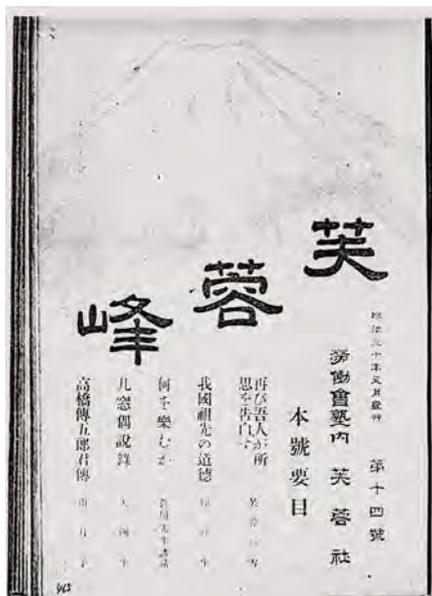


写真7 『芙蓉峰』第14号(東北学院史資料センター所蔵)

(以下、本文で引用する資料はできるだけ旧字体を新字体に変えている。)

同氏は、旧と労働会の一員なりしが、慨然伝道の大任を感じ、遠く千島の絶域に入り、遂に殉教の死を為せしは、既に三歳の昔となりぬ。今般、尊師押川方義氏、及び長老佐伯陽一氏、同氏の為めに、其遺霊を弔せん為め、四月廿三日、日本基督教会に於て、追悼会を催されたり。

川合は高橋の死(1893(明治26)年12月)から3年を過ぎて1897(明治30)年に開催された追悼会を機に、東北学院神学部の同期生であった高橋の生涯をあらためて記したものである。高橋伝五郎とは一体何者なのか。それは、以下に紹介する二人の「高橋伝五郎伝」を比較しながら、その生涯を辿っていただきたい。両者が記す内容が一致あるいは類似するものはできる限り対比を試みた。なお「山月」は川合信水の号である。川合の文には差別用語(跛者)があるが、あえて原文のまま全文掲載することとした。



写真8 初期の神学生たちに囲まれた高橋伝五郎(中央)
(ランカスターのERHS所蔵)



写真9 高橋伝五郎送別会の記念写真(1893年)
前列中央が押川、2列目左から2人目が川合、
同列左から4人目(押川の真後)が高橋

A SKETCH OF THE LIFE OF
DENGORO TAKAHASHI
BY REV. MASAYOSHI OSHIKAWA, D.D.

Hachinohe, in Sannohe Gori of Aomori Ken, is the birth place of Dengoro Takahashi, the first martyr among Japanese Protestant Christians. He was born on the 15th of June, 1871. His father's name was Denshiro, and his mother's, Tsuna.

At the age of nine he entered the Hachinohe school. The next year his father died, and as his mother was unable to support him in school, he was about to leave school. But God intended him to have an education, and so opened a way for him. It came about in this way. There was in the same city a Mr. Mori, a man of means, who had great trouble in making his idle son go to school. This man knew the character of young Takahashi and the circumstances in to which he had fallen, and he thought it would be a good plan for him to have the young man in his home, and get him to go to school with his own son. This he thought would be killing two birds with one stone, it would solve the difficulty about his son, and it would be helping a worthy boy to an education. So he invited Dengoro to live with him.

While young Takahashi lived in Mr. Mori's family, he took the son regularly to school, and was very kind to him. Meanwhile also, by his uniform kindness, diligence and faithfulness, he won the admiration of all who knew him.

One day he heard that his mother was ill with a contagious fever, and was left alone, as no one dared to go near her. Immediately he obtained permission from Mr. Mori, and went to see her. He watched over her night and day, and, by his tender care, finally brought her back to the road toward recovery. Yes, she recovered, but alas! for her dearest boy. He caught the infection from

高橋傳五郎君傳
山月編

仙臺市を去ること殆んど百里、青森縣陸奥國三ノ戸郡八ノ戸下粗町五番地は、我が日本基督新教最初の殉教者高橋傳五郎君の生地なりとす、

君は明治四年六月十五日を以て、呱呱の聲を地上に放ちぬ、父の名は傳四郎、嘗て八ノ戸領主にして二萬石を領しける南部遠江守に仕へて足輕たりき、母の名は綱子、君十歳にして父を喪ひ、十五歳にして母を失ひ、早く可憐の孤兒とはなりぬ、

君、二兄二姉あり、君を合せて同胞五人なり、一姉は既に歿し、他の一姉は嫁して小林某氏の婦たり、名をリセといふ、兄歌古氏、父家を繼げり、他の一兄は竹花惣三郎氏と稱し、千葉縣葛飾郡市川町四丁目に移住し、大工を職とし、今猶健在なり、

君九歳の時、八ノ戸小學校に入りしが父歿せしより家計豊からず、半途退學の止むべからざるに至りぬ、時に町内に森某氏あり、其子頗る學校を好まず、某氏よく傳五郎君の學を好むを知る、今其窮して退學せんとするを見て、心に思へらく『彼をして我が家に寄食せしめ、我が子を伴ひて學校に行かしめば、我が子は彼によりてよく勉強するに至るべく、彼は又我が家によりて廢學せざるを得べし、是れ双方の爲めなり』と、乃ち君を招きて其家に置きぬ、

君親切を盡して、日々森氏の子を携へ、小學校に昇降す、人其忠實に感ぜざるはなかりしといふ、

森氏に寄食中、君の母熱病に襲はる、人皆傳染を恐れて、共看護を憚る、君之を聞きて悲痛止まず、即ち森氏に暫時の暇を乞ひ、歸りて母の側に侍し、誠を盡して看護す、共効空しからず、母は全愈を見しも、君又同病に感染し、一時は危きにまで至りぬ、而も幸にして又愈え、母子相見て喜びの笑をなしぬ、母は死に至るまで、一日も、傳五郎の孝養深きを、口にせざるとなかりしとぞ、

his mother, and soon was very critically ill. But it pleased God to spare his life, and he recovered. It is said that after this the mother did not allow a single day to pass over her head without speaking of the love of her son.

He studied in the Hachinohe school for six years and completed the required course there. Soon after this his beloved mother died, and he was thrown out upon the wide world without money and without friends that could help him.

There was now nothing for him to do at home to earn his living and he determined to go to Tokyo to try his fortune there. He sold his books and clothing, and with very little money started alone on foot for a journey of over five hundred miles. While yet on his way his purse became quite empty, and he did not know what to do. But just at this critical time he met a friend who knew him well, and by whose help he was enabled to reach Tokyo.

Just about this time the great reactionary movement against things foreign was sweeping over the land, and young Takahashi fell in with the movement with intensity. And he hated Christianity from the depths of his heart.

He had from boyhood been anxious to see the military power of the Empire strong, and longed to devote his whole life to the furtherance of that end, and with this purpose in mind he took an examination for entrance into the Imperial Military School; but unfortunately he failed.

There was left to him now no way of pursuing his studies in Tokyo, and he therefore, though unwillingly, started back again toward his native place. Stopping on his way back at Yonezawa, however, he became acquainted with Mr. Gennosuke Motokawa, at whose recommendation

君八ノ戸小學校に居ること六年、中等科を卒業す、年十五歳、此一年是れ君が心身に、異常の動搖變化を與へたり、卒業免狀を貰ひける小供らしき喜は、慈母の死といふ大なる悲の爲めに打ち消されぬ、濃情なる君が胸中、抑も如何なりしぞ、

加之種々の事情は、君をして安んじて郷地に止らしむることを許さず、君慨然として志を決し、己の書籍、衣類等を賣りて、僅かに旅費を整へ、丈夫大志を成すの地と夢想せし東京に向て出で立ちぬ、二百里の行程、少金を以て達すべからず、途中旅費に窮して進退に迷ひしが、幸に之を知る者あり、其情を憐み、補助して東京に出で■■■

國粹保存論の起るや、君は之が熱心なる■■■にてありき、基督教は其甚だしく嫌ふ所なりき、常に慷慨壯語して日本の國防を憂ひ、身を軍籍に投ぜんことを思ひぬ、

一日、千葉縣に赴き、兄惣三郎氏に面して自己か志を告ぐ、兄氏大に之を嘉し、其大工の手によりて得る所の金を以て、毎月五圓を給することに約しぬ、

君學資の途を得て大に喜び、刻苦勉勵して、陸軍士官學校入學試験に應じたりしも、不幸にして合格せず、兄氏爲めに其學資を與ふることを止め、旅費五圓を與へて、君に歸省を命じぬ、

君歸りて羽前の米澤に在り、^(ママ)元川源之助君(注)の推薦によりて仙臺に來り、押川方義先生の門を叩きぬ、先生一見、君か人物を知り、直に許して勞働

(注)「本川源之助」が本名。明治学院神學校を卒業後、宮城中会で米沢講義所を担当。1892(明治25)年押川等から接手札を受けた後、秋田に転じて開拓伝道を行った。その後、韓国、アメリカのサンフランシスコでの働きを経て、1901年からハワイの教会の牧師となり、1921(明治34)年に召された。
 (『宮城中会記録』及び『ハワイ・メソジスト・エピスコパルチャーチ 第17回年会(1922年)公議事録』による)

he came to see me in Sendai. I met him, and soon recognized him to be a worthy young man, and permitted him to enter our Industrial Home.

Before this, however, while he was in Tokyo, he met Revs. Masahisa Uemura and Yoshiharu Iwamoto, under whose influence he began to study Christianity. After he came to Sendai he diligently searched into the truths of the Gospel, and having become convinced of the power of Jesus to save even to the uttermost, he was baptized.

As time went on, he grew in his faith in Jesus Christ, and finally determined to become a messenger of the Gospel, and entered the Theological Department of the Tohoku Gakuin.

His character was strong and simple; he was sympathetic and self sacrificing; he was also physically strong.

He was a friend of the poor, and was always trying to help them. At the same time he was judicious, and never gave them money, nor asked others to do so. He always found some work for them to do, and helped every one to make a success of whatever he undertook. To give an example of his method: There was a poor lame man who could not walk, but who knew how to make *sasara* (a small brush made of split bamboo, used for cleansing kitchen utensils) (注); but he had no money to get the necessary materials. Mr. Takahashi supplied the man with bamboo, and had him make *sasara*, which in his leisure hours, after his duties in the school and in the home were over, he himself peddled among the people of the city. The profits were enough to keep the poor man in rice. (下線は筆者)

(注) “sasara” (ササラ) は、細く裂いた竹を束ねた小さなブラシで、台所の鉄製品の汚れを取り除くために用いられた。

會員となしぬ、君が心靈の修養は、此間に於てせられたり、

之より先き、君の東京に在るや、植村正久、巖本善治、二君の勸により、基督教を研究し始めたりしか、仙臺に来るに及んで、いよいよ基督を確信し、心を決して洗禮を受く、其信仰進むに随ひ、願ふて東北學院神學生となりぬ、

余が初めて君を見しは、明治二十六年二月にあり、當時余東京より仙臺に来る、未だ労働會の會員ならず、東北學院神學生として、一年級教場に着席せる時、君後れて入り來りぬ、一友、余を君に紹介す、君莞爾として曰く『前日、卿が此地に來らんとする由を聴きしが、今幸に相遇ふ』と、無頓着に櫛らざる五分刈りの頭髮は、延びて二寸にも餘り、衣服の襟は垢にて光り、「ゴロウ」の羽織は、褪めて色なし、朴素の風采、今猶見るが如し、

君、身幹肥大にして頗る壯健なり、天性養俠にして磊落に、温良にして親切なり、殊に甚だ貧民を憐み、常に之を助けたり、されど之を助くるに、金錢を投ぜず、又他人の義捐を乞はず、貧民をして自ら業を勵みて共生を得せしめんことを計りぬ、榴ヶ岡貧民の中、一人の跛者あり、君之が爲めに時々二三里外に廉價なる青竹を求め來り、之をしてサ、ラを持ちて仙臺市内に賣り、其所得を跛者に與へたりき、而して貧民をして、其労働は自己の生活を得る所以を悟らしめんとせり、

明治二十六年春、榴ヶ岡の櫻花満開の時、押川先生及び其夫人と余と高橋君と、共に花見に赴く、櫻花の爛漫を見了りて後、君、余等を誘ひ、俱に共に貧民の家を訪ふ、最後に彼の跛者の處に行く、屋、屋に非ず、僅かに彼の一身を容れる彼れ高橋君を見

His happiest hours were those spent sitting with the poor in their dark, filthy huts, singing, praying and reading the scriptures.

But this was not all. He also was eager to tell the glad tidings of salvation to his old friends by letter. But he did not have enough money to buy the necessary postage stamps, and so he worked as tutor to my son, by which means he earned enough to carry out his purpose.

るや、恭く一禮す、中風にして足腰立たず、作りたるサ、ラは、二ツ三ツ膝の邊りにあり、臭氣紛々たる座蒲團を出し、高橋君をして之に座せしむ、座蒲團は屋外の板の上に置かれたり、そは屋内、一蒲團を敷くべき餘地だに存ぜざればなり、先生と夫人と余とは立ちて居りぬ、高橋君は彼の爲に聖書を読み、又祈禱をなしぬ、別れ歸る時、彼は拜まぬばかりに、高橋君に感謝せり、

斯の如く貧者と共に座し、共に讚美歌を歌ひ、共に聖書を読み、又共に祈禱することは、君が尤も楽しみとする所なりき、

一日、先生突然に君が室に入る、君顔色常ならず、眼に涙を湛ゆ、先生問ふて曰く『如何にせしや』と、君曰く『生が恩を蒙りたる先輩にして、道ならぬ事を行へる人あり、之を忠告せんと思ふも、或は先輩に對して失禮には非ずやと考へ、之を止めんと思へば、我義心之許さず、心緒兩端、自ら決すると能はず、求は祈り、或は考へ、さて忠告の書を認むるに決し、紙に對すれば、筆拙くして意を寫さず、女の書きやうにて、又他を礙かしめんことを恐る、如何にして、我が意を貫徹せしめんかと、徹夜祈り、或は考へ、或は泣きたり、然るに圖らず先生のお出でに會す、抑も之を如何にせば可ならん乎、願くは明教を垂れ給へ』と、先生答へて曰く『それ程の志ならば、思ふ通りに書いてやるべし、汝が誠、よく他に徹すべし』と、君乃ち其如くなしぬ、君が心は貧民を思へるのみならず、其先輩を思ふと、亦斯の如く切なるものありき、

而して君が一生の抱負は、東洋の大傳道にあり、而して其端緒を先づ我國の上流社會に開かざるべからずと信ぜり、之が爲めに先生に請ふて曰く『願くは成るべく久しく東北學院に學び修むることを許し給へ』と、或る時、先生を訪ひ、席を更ためて衷心の決意を露白し、其最後の一事の爲めに、有らゆる經驗を積み、有らゆる鍛鍊をなし、期至らば挺然進みて、一死其決意を陳せんことを語りぬ、

又君一日先生に到り、滿面誠意を表はし、『願くは一ヶ月三十五錢を受くべき内職を得せしめ給へ』と請ふ、先生『何事に用うるや』と問へば、『心を凝めて使ふとのあればなり』と答ふ、『されば予が手より五十錢づゝを與へん』といふに、君歡ばずして曰く『否、之を恵まれんことは、本意に非ず、眞とは、知己舊友に手紙を贈り、近來自ら得たる所の生命を傳へんことを欲してなり、されば其金を得るにも心血を絞らざるべからず、何事かの内職にて此金を得、毎月出すべき事狀の紙筆と、郵便切手との料に充てんことを欲す』と、乃ち爾來、先生の一子に讀書を授くることとなり、毎日二時間丁寧反覆教

When Lieutenant Gunji organized his Colonization Society, and was on his way from Tokyo to the Kurile Islands, he stopped at Sendai, and I met him. My heart then overflowed with a deep emotion, and with tears I spoke to him about the relations between the national defence, the union of the people, and their religion. The Lieutenant was deeply moved and in a solemn tone of voice said, "I comprehend all that you say, and sympathize with you thoroughly. For a long time I have been hearing of you, but now on seeing your face and hearing your words I am moved more than ever.

Now you have told me your plans, and is there any one among your students who is willing to offer himself to go with me to the Kurile Islands?" I answered him, "Yes, we have many," and Mr. Takahashi, being by and hearing the conversation, promptly cried, "Here am I; I will go." It was then decided that he should go to the islands as an evangelist.

He was ready to go in the face of anything. Death was nothing to him. He expected to die. To live he did not hope.

While making preparations for his departure he asked me for the loan of an American suit of clothing, which I used to wear, to have his photograph taken in. At the farewell meeting, held in the Sendai church, he said among other things, that he hoped to make his bones the pillars of a church, and his flesh its walls.

導し、其金を得て所懐を達しぬ、

郡司大尉、報効義會を組織し、千島拓殖の壯圖を懷きて、櫻花雲の如く、送客霞の如き墨陀堤を發し、路すがら仙臺に来るや、押川先生之と會して語る、説いて拓殖に宗教の切要なるを言ふ、談一とたび國家の事に及べば、慷慨淋漓、至誠禁じ難きの狀あるもの、先生の常なり、先生感慨無量、涙を揮て堂々國防團結と宗教との關係を説く、郡司大尉、大に感動し、席を更ため、肅然として曰く『足下の設斯の如し、吾輩誠に同感に堪へず、吾輩も亦宗教の切要なることを知れり、東京を發する頃ひ、或る名僧も亦其説を述べられ、而してあとより教僧を送らんことを約せられたり、蓋稍や人煙地になれて、土地幾分の開拓を経たる後と言はるるものか、素よりそれにて可なり、されど吾黨は元來事業としての成算あらざる者なり、先づ身を北海の孤島に獻じて、千島拓殖の道を啓き、屍を此帝領極北の端に埋めて、此處亦帝の民が住ふべきものたることを證明せば足れり、事業としての細考精査は、後の其人に頼るべき耳、故に吾黨今回の行たる、初より死を決す、生還の意なし、こゝを以て何人をも誘はず、たゞ其人の好んで征かんとするに任せたるのみ、されば假令道を傳ふる人と雖も、吾黨之を誘はんことを欲せざるなり、然るに足下國家的問題を以て、斯の如き説あり、久しく足下の名を聞たりと雖も、現に高説を聞きて、感激一層に切なり、足下既に斯の如き精神を以て、盛んに宗教を弘布せんとす、さらば足下は、平生また斯の如き精神を子弟に鼓吹せらるゝなるべし、

試に足下に問ふ、直に身を挺して千島に傳道せらるゝが如き門下生ありや』と、先生答へていふ『もとより多し』と、時に高橋君、先生に隨ひて座にあり、此時卒然語を挿さんで曰く『私が居ります、私が参りませう』と、先生顧みて曰く『さらば汝征け』と、即時、千島傳道者は定められたり、時に明治二十六年四月三十日、

此事の定まる、突作の瞬間にして、大尉が船を出さんとする一時間前の事なり、到底此處より同行せんと難しとて、君は陸行して、函館に相會することとなりたり、

三十日夜、仙臺日本基督教會に於て送別會あり、君謂て曰く『願くは我が骨を以て教會の柱となし、我が肉を以て教會の壁となし、以て千島に新教會を創立せん』と、

翌夜、東北學院講堂に於ける送別會に於ては、君

We bade him good-bye at the Sendai station, and he went over land and sea, and after a long and dangerous journey landed safely on one of the Kurile Islands. This was in the fall of 1893.

Upon the arrival of the colonists at their destination, Lieutenant Gunji divided the company into several groups, and appointed each to a different island.

There was some difference of opinion as to the advisability of settling on Shashikotan Island, as it was a dangerous place. But nine of the company followed the advice of Gunji and landed there.

One of the nine was our hero, Takahashi. It is not clearly known why he chose to remain on Shashikotan Island, but it was probably on account of its being more convenient for preaching during the winter than the other islands. How successful he was in working for Christ among the settlers of this island is known from his last letter.

When the officers and crew of the imperial

悲壯の躰にて、起て劍舞す、自ら吟じ且舞ふ、曰く、
孤軍奮鬪破圍還 一百里程壘壁間
我劍既折我馬斃 秋風埋骨千島原

と、蓋其『故郷山』の三字を改めて、『千島原』とせしは、君が當意即妙なり、

君當時、衷心を告白して曰く『生や學淺く、年若し、一百二十名を救はんとするに足らざる者尙多かるべし、されど一片の誠忠あるあり、確かに或る者を天より得て、此事を成就し得べしと信ず、但だ生還せんことは、全く望みなし、熊に食はるゝか、凍へ死するか、再び故友と相見ることなからん』と、乃ち押川先生が平生着用せられし洋服を請ひ受け、之を着して撮影したり（注：写真9）、

其後余等同級生と共に撮影し、又東北學院春季大運動會の列に加はりて相馬中村の地に赴き歸る、斯て大尉等の行に後るゝこと一週日、忽ち飛報あり『大尉の一行、鮫ヶ港沖合に於て暴風波に遇ひ、船覆りたり』と、君時に外に在り、飛び歸て先生に謂て曰く『事既に斯の如し、小生は大尉に代て、其遺志を引うけ申すべし』と、翌朝出發に決しぬ、

時は來り、晩の汽車は君を乗せぬ、停車場に送りし雲の如き多くの人に、君は窓より頭を出して懇ろに一禮し、勇ましき汽笛の聲と共に仙臺を出で立ちぬ、

途にて聞けば、大尉は幸にして無事なりき、高橋君は行く處有志に歓迎せられ、配送せられ、多くの饒を得たり、君乃ち手拭一筋の小さきに至るまで、悉く之を記録し、一々先生に告知したり、其父の如き先生を喜ばしめんとてなり、

其故山を過ぎける時、嘗て君を寄食せしめし森氏の家を訪ひ、懇ろに當時の事を謝しければ、其家人皆頗る君の志に感ぜしといふ、

函館より大尉と共に發し、千嶋に到るや、大尉は遠征軍を分ちて小隊となし、千嶋の群嶋に一冬を過さしめ、以て將來拓殖の方策を建てんとせり。然れども其のシヤスコタンに居を試むることに關しては、異論ありき、そは尤も危険なるが故なり、其中慷慨の士九名、『大尉の命聽くべし』となし、他の一行に別れて此に止まり、嚴酷なる冬を此處に過さんと決しぬ、九名の一人は高橋君なり、神に忠誠に人に信愛なる君は、此冬ごもり中に、他の八名の靈の爲めに殊更に盡さんことを欲せしなり、

軍艦磐城號、此九名の消息を聞きて、深く之を危

man-of-war *Iwaki*, then cruising about the islands, heard that nine of Gunji's party had settled on Shashikotan, they tried to go to the rescue of the settlers, believing them to be necessarily in great danger of their lives. But, on account of long-continued stormy weather, they were not able to approach the island, and had to abandon the attempt. When this report of the *Iwaki* reached Mr. Takahashi's friends, many prayer meetings were held in his behalf.

One day, early in June, 1894, there suddenly came the sad news that Mr. Takahashi was dead. It is supposed that his death occurred on the 11th of the previous December, in a hut which the settlers had built on the island. His diary contains a record of daily happenings as far as December 10th.

His death, of which Mr. Takahashi spoke so often, has, alas! become a fact. His body has turned into dust on the lonely ice-bound island of the north. But his spirit, filled with truest love for his country and with consuming zeal for the evangelization of the Orient, led by the Holy Spirit, believing in our Heavenly Father, and trusting in our Lord Jesus Christ, shall never perish. Some of his friends have established a missionary society in memory of him, and the work which he began will continue and abide.

We thank God with all our hearts that the influence of Mr. Takahashi's self-sacrificing spirit is not dead; that in many of the students of the Tohoku Gakuin, and in the members of the Industrial Home, a similar spirit is, by the blessing of God, fostered by his example.

I close this brief sketch of Mr. Takahashi's life with a portion of his last letter to me.

SHASHIKOTAN ISLAND, OCT. 23, 1893.
REV. MASAYOSHI OSHIKAWA,

Dear Father:— I am on this island with eight adventurers, and have never yet forgotten the commandment of our Lord. I love these brother men, and am sure that my love toward them is daily increasing.

I am not learned and have no wisdom, but you assured me that we cannot by mere

ぶみ、歸航の途、こゝに立寄らんとせしも、激浪岸に碎けて近づくべくもあらず、其まゝにして歸りぬ、東北の知人は、深く君が上を氣遣い、屢々君の爲めに祈禱會を開き、榴ヶ岡の跛者は、君が出發の後、毎日七度、時を定めて君が爲めに祈りをなしぬ、

明治二十七年七月、君が訃音は俄然として、各人の心撲ちぬ、余は餘りの事に半信半疑にてありき、而も不幸にして其事や實なりき、

氷海路通ぜず、君が死の何日なるやを明かにせず、たゞ君が日記の残れるものあり、其筆十二月十日にして絶えたるを見て、其永眠の日を推すべきのみ、寒風雪氷、屍躰を圍みて、翌年大尉等到り、葬を行ふまでに保ちけるは、慘中の一喜ともいふべきか、

君が千島行を決せし時、押川先生謂て曰く『君は洗禮のヨハ子になり給へ』と、いふこゝろは『彼の如く千島傳道の先驅たるべし』となり、而して其の傳道に於てヨハ子の如く先驅たりしが如く、其死に於てヨハ子の如く早かりしは、抑も亦何の因縁ぞ、

君年を享くる二十有三歳、北海の波、長へに岸を洗ふて、半ばは青春妙齡の死を惜み、半ばは日本基督新教最初の殉教者を讃む、

君が先生に贈れる最後の書に曰く、

愛する師父よ吾無人の島に八名の探檢者に伴ふて此に在り夙夜未だ嘗て主の命を忘れず己の如く今左右に在る兄弟を愛せんとし其愛日に加はるを自から疑はず吾學淺く識足らざるは師父の熟知し玉ふ所なり即ち又説教の人を導くあるに足らざるも特に吾に許容し玉ふ所なり而も吾は主に在りて師父を大概顯はせり是れ聊か誇る所

preaching lead men to Christ. I believe that my work here will be successful. I always pray thus: "Grant, O Lord, that I may love these brother men, and love them as I love myself. Pardon their sins, and chastize me in their stead. I am willing to give my life, if it be for their salvation, but Thy will be done." I am trying to live in harmony with this prayer. On Monday, the 9th of October, five of our number, Hyo Horie, Jukichi Nakamura, Sakichi Kimura, Kynjiro Tsurumi and Kinichi Shimamura, took a bushel of rice, a little *miso* (bean sauce), four guns, about sixty cartridges and three blankets each, in a small boat and started to Ekaruma Island to catch walrus. For some days now we have been waiting for their return. During these days though there were times when the sea was too rough for them to leave the island, there have also been calm days on which they could have safely returned, but they have not yet made their appearance. It may be that some accident has happened to them. I wish to go and see after them, and though the boat which we have left is only nine feet long and not fit for the trip across, yet if any become willing to follow me, I will go. But those who know anything about boating say that our boat would not do for the trip. So I cannot urge any one to go with me, for if I should urge any one and he were lost, I would be guilty of homicide. I have a life within me in the Lord, and that life is as great as our Mt. Fuji. I always intended to give my life for my brothers, and now I am in a situation to do so. I will go to search for my brothers. It is the Lord who has moved me to this action. I know I shall die; I doubt it not *

DENGORO TAKAHASHI.

*Dr. Oshikawa has omitted mentioning the circumstances under which Mr. Takahashi lost his life. And lest it should be inferred from the above, that it was in an endeavor to rescue his imperiled companions, we state the following, given by one of our missionaries. In the spring or early summer of 1894 a vessel of war visited the island, and on entering the colonists' hut, the dead bodies of Mr.

あらんとする所なり而して吾傳道の結果必らず擧るあるべしと信ずる所なり吾常に祈りて曰ふ此兄弟を愛し之を愛して己の如くならしめ玉へ願くは彼等の罪を免し玉へ彼等の罪の爲めに此僕を鞭ち玉へ、彼等の罪の免されん爲には吾生命を捨つるも可なり唯だ御心のまゝに爲し玉へと而して出来得る丈は此祈りの幾分を實行しつゝあるなり

明治二十六年十月九日月曜日報効義會員堀江彪(高知)中村重吉(福岡)木村佐吉(神奈川)鶴島久次郎(島根)島村金一(島根)の五名越年探險島シヤシコタンよりトゞ取りの爲め對岸なるエカルマ島に小舟を艤して發す米二斗と味噌少許銃四挺此丸凡そ六十發等を供し又毛布一人前凡三枚嗚呼我等此遠征者の歸るを待つこと茲に十五日其間尤も海荒くして舟のエカルマを發す能はざるの日ありと雖ども靜穩の日亦少からず而して今尚歸らず其れ或は變あらんか吾於是乎之を見舞はんと欲す尤とも一間半許のボート一隻あり然かも之れはエカルマに行くに任へず任へざるも同意者あれば行くべきも如何にせん經驗あるの人此舟は遠きに用ゆべからずと且つ強て人を伴ふも亦此人を死なしむるものありては吾に人を殺すの罪あるなり吾に生命あり主に在りて生くるもの量蓋し富岳の重きあり(師父よ吾慢なるか願くは免せ)然かも常々此兄弟の爲には生命をも與へんと思へ居る折柄今は是れ毛よりも輕き吾生命なり吁吾彼の五名を探らん主は死せるものをして死せるものを葬らせよど仰せられたるを信知す而も吾をして彼五名を探らせんとの心を持たしめたるものは主也蓋し知る吾は死ぬるものなり吁又何ぞ疑はん*

十月廿三日認 高橋傳五郎

(注：以下、左の英文の拙訳を挿入する)

*押川氏は高橋が命を落とした経緯については言及を省略している。これまでの記述から、それが危険にさらされた仲間を救おうとしたためだと推測されないように、私たちの宣教師から得た情報を基に、以下のように説明する。1894年の春か初夏に軍艦が島を訪れ、入植者の小屋に入ると、床に高橋とその仲間3人の死体が発見された。彼らのうちの一人が早朝に飯を炊く炭火を起こし、その燃えるのを

Takahashi and his three companions were found on the floor. *It is supposed*, that one of them, in the early morning had made the fire of charcoal, to prepare their rice, and awaiting its burning, he had lain down again, without ventilating the room, and falling asleep, he with his fellows slept the long sleep of death, having been suffocated by the fumes of the burning charcoal.

待って、部屋の換気もせずにまた横になって眠りに落ちてしまった。そのまま燃える炭の煙で窒息し、仲間たちとともに長い死の眠りについてしまったと考えられる。(拙訳と下線は筆者)

先生當時涙を揮て君を吊ひし演説に曰く、

彼は愛國正義の人なりき、眞率と献身と大膽とは彼の特色なりき、東洋の大傳道は、彼が抱負なりき、屢々予を促がして共に祈りすれば、『日本皇帝陛下、日本帝國』は、其熱誠の進む所なりき、彼は潔白の士なりき、彼は精神の士なりき、彼は多血多感の士なりき、彼は義の爲めに身を献じ、道の爲めに殉死したり、獅子に噛まれたるリビングストンの骨は榮えある國葬を受けたり、傳五郎の骨は北海に埋められたれども、其精神、其事業其感化は、リビングストーンに劣ることなし、彼は新教殉教者の最初の者なり、彼が志は永久滅せず、幾多の志士を蹶起せしめん、予は彼の爲めに『高橋傳五郎紀念傳道會』を創立す、千島の名を加へざるは、彼が精神抱負の千島のみならず、と。

明治三十年四月廿一日夜、先生及び佐伯陽一君、發企となりて、君が爲めに紀念會を開きぬ、紳士貴女集る者堂に滿つ、此由を聞きて、榴ヶ岡の跛者、其日車に助け乗せられ、先生の家にとり、

今夜は教會で、傳五郎さんのお祭があるそうですが、私も何か持て参りたいと思つて、いろいろ考へましたが、御覽の通り貧乏で、仕方がなく、僅かの物を賣て、少しばかりですが、之を持って來ました、

といひて、十數個の餅を出しぬ、此餅は當夜君が遺髪の前に供へられ、貧女の「レブタ」の如く、天父の聖意と、集會者の心情と、君が在天の靈とを感ぜしめぬ、

高橋傳五郎紀念傳道會は、曩きに先づ君が郷里八ノ戸に向て傳道者を遣はしぬ、而して君が嘗て寢食修養せし労働會、及び君が道學勉強せし東北學院は、なほ多くの有望なる人物を有し、君が朋友なる傳道者は、益々奮發して道に働き、君が献身犠牲の精神は、永くアベルの血の如く言ふ、

嗚呼義人は死せず、永遠の生命は、永遠に人を動かさん。

高橋伝五郎の千島開拓伝道

ここに紹介した押川と川合の「高橋伝五郎伝」の類似性をどう評価するかは、他に資料がない以上極めて困難である。高橋の死が日本に知らされた1894（明治27）年7月以降、何らかの高橋の生涯に関する文書が作成され、押川がそれを基にして、自分の体験を含めた英文による伝記を記述し（1895（明治28）年）、その後川合がさらに自分との関りも含めた「伝五郎伝」を執筆した（1897（明治30）年）とも考えられる。いずれにしても、押川の「伝五郎伝」作成に関しては当時日本に在任した宣教師が関与したと考えるのが自然だと思われる。

二人の文からは、必ずしも高橋の千島開拓伝道への決意から死亡までの経緯が判然としないので、以下時系列にまとめてみた。

1893（明治26）年

- 4月29日 押川、郡司大尉と会談
高橋、千島行きを決意
- 4月30日 仙台日本基督教会で送別祈祷会
- 5月1日 東北学院講堂で全校による送別会
- 5月12日 高橋、仙台を出発し、
函館で郡司一行と合流
- 7月21日 千島列島最南端の択捉島から
帆船泰陽丸にて出港
※途中立ち寄った捨子古丹（シャシコタン）島に、悪天候のため一ヶ月以上碇泊
- 8月26日 一行17名は引き返すことにしたが、
高橋を含む9名は島に残ることを決意
食糧等を二分し、残る8名は泰陽丸にて出港
- 10月9日 9名中5名、トド狩りのため小舟で
対岸のエカルマ島に向けて出発
（その後、消息不明）
- 10月23日 高橋、押川宛に「最後の書」を記す
- 12月10日 高橋の日記がこの日をもって絶筆となる
※高橋は8月15日から欠かさず日記を付けており、この日の午後9時以降の記述がないことから、翌12月11日に死亡したと推測される。

1894（明治27）年

- 6月26日 軍艦磐城の一行、捨子古丹島にて
高橋等4名の死亡を確認
- 7月6日 高橋等死亡の電報が押川に届く

高橋が捨子古丹島に遺した日記は、その後仙台に送られた。高橋をキリスト教信仰に導いた巖本善治は、女学雑誌社発行の小冊子『高橋傳五郎』（1895年1月15日）に「彼が遺せし日記」と題してそのまま転載している。

高橋の遺体は捨子古丹島に埋葬されたが、1929（昭和4）年になってその遺髪が労働会内から発見された。『東北学院創立七十年史』（以下、『七十年史』）は、「多分捨子古丹島に埋葬の際伝えられた遺髪の一部を押川方義の許に送られたものであろう」と推測する。遺髪は仙台市北山キリスト教墓地にある押川方義之墓側の高橋傳五郎之碑に納められている。

押川方義と高橋伝五郎

本稿は、これ以上高橋伝五郎の生涯を明らかにする意図はないが、その壮絶とも言える死が恩師押川



写真10 押川方義之墓と後ろの高橋傳五郎之碑
（仙台市北山キリスト教墓地）



写真11 高橋傳五郎之碑（同上）

とアメリカの外国伝道局にもたらした影響は決して少なくない。特に押川に対する衝撃は大きかった。『東北学院百年史』（以下、『百年史』）は、「大日本海外教育会の創設」の中で次のように記す。

その前年（1893年）五月、押川は対露北辺防備を意図する退役海軍大尉郡司成忠の組織した報効義会に、東北学院の神学生高橋伝五郎を隊員の一人として参加させ、千島へと送り出している。当時高まるばかりだった北からのロシア脅威論に乗じて、高橋伝五郎の「壮挙」は大いに喧伝され、キリスト者を含めて国民の民族意識の昂揚に役立った。ことに高橋がその年の千島越冬中に、捨子古丹島で他の隊員と共に不慮の死を遂げたことは、国民各層の紅涙をそそるに十分であった。（カッコは筆者が補記）

また、『七十年史』は、高橋の訃報が押川のもとに伝えられた経緯を次のように記している。

翌廿七年（1894年）六月、軍艦「磐城」が再び同地巡行に向かった時始めて捨子古丹の残留組は越冬中死骸に化しているのを発見した。かくて高橋伝五郎の訃報が内地に齎されたのは実に七月六日のことである。この時恰も東京築地新栄教会で日本基督教大会の最終日であった。而も当時の基督教界で人目を集めた所謂「日本の花嫁」問題が裁決された日で、議長は前に学院の理事や教授であつた藤生金六であり、この議題に対する攻撃の急先鋒は押川方義であつた。

この熱論が漸く裁決を見て大会のまさに終わらんとした所に一通の飛電あり、押川方義の口から満堂に伝えられた。「シヤスコタン、タカハシ、ソノホカ、ミナシンダ」（軍艦磐城の一員が根室局から打電したもの）大会に出席した基督教界の要人等はこれがため皆流涕嗚咽、植村正久の如き声を発して泣いたと伝えられている。（カッコは筆者が補記）

『東北学院時報』第83号（1929年6月27日）には、当時中学部長であった五十嵐正が「高橋傳五郎君を憶ふ」と題して、自分もこの大会に同席して「親しく其光景を目撃したが、其時位先生の雄弁に感激したことはない。瞑目すれば其倂今尚眼前に彷彿する。（中略）其後押川先生は、海外教育会を組織し

東洋の教化を企てられたが、高橋君の死は先生が兼て抱懐せる大理想を実現せしむべき動機となったものと予は信じて居る」と記している。

果たして、大会終了日の翌7月7日、「押川方義は巖本善治、本多庸一、松村介石、原田助らと語り合つて「大日本海外伝道会」の結成を議し」（『百年史』）、12月には彼らを發起人として「大日本海外教育会」を結成する。こうして押川の胸中にあった壮大な大アジア主義への道が開かれて行き、ついには東北学院を去り、キリスト教界からも離れて行くことになる。

おわりに

今回初めて訪れたイーデン神学校は、元々福音派（Evangelical Synod of North America）の神学校であったが、1934（昭和9）年に福音派がドイツ改革派（Reformed Church in the US）と教派合同して以来、同神学校を卒業した宣教師が何人も来日しており、いずれその資料も調査する必要は感じていた。その代表は、本院の創立者であるホーイとシュネーダーの二人の伝記を執筆した元本学教授のウィリアム・メンセンディク（C. William Mensendiek 1925-2006）である。今回のイーデン神学校訪問に際しては、ご自身も同神学校の卒業生であり、現在も日本で宣教活動をされているご子息のジェフリー・メンセンディク師に仲介していただいた。ちなみに、メンセンディク家は、ジェフリー師の祖父Richard Mensendiek師（牧師）から親子三代にわたってイーデン神学校の卒業生とのことである

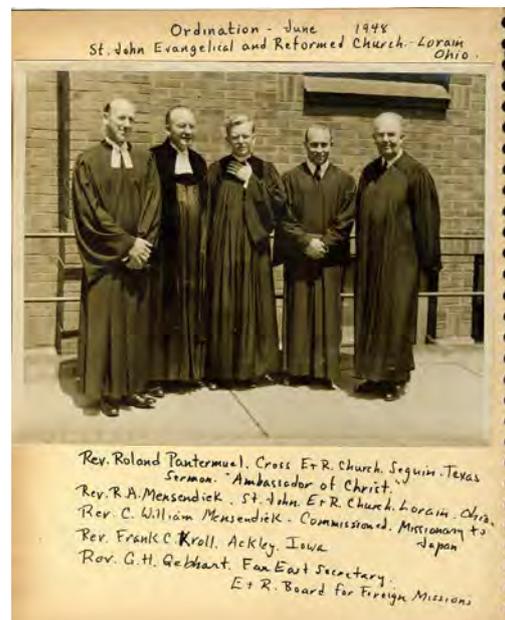


写真12 中央がウィリアム、その左隣が父リチャード（1948年）

(注：写真12)。

ERHS (福音・改革派歴史協会 Evangelical & Reformed Historical Society) は、文字通りE (福音派) とR (改革派) の歴史的資料を収集・保存する機関であり、イーデン神学校にはE (福音派)、ランカスター神学校にはR (改革派) の資料がそれぞれ保管されている。冒頭に紹介したERHS理事会が2022 (令和4) 年7月に幾つかの選択肢の中からイーデン神学校に移管することを決定した理由の第一は、「歴史的な意義」(Historical Significance) として「福音派と改革派の両資料を一か所に集約する念願が実現すること」であった。このイーデン神学校で、ERHSの責任者 (President) スコット・マイヤー・キューカン氏 (Scott Meyer-Kukan) とお会いした。彼は神学校のクラウス学長とは良好な関係を築いており、両者の移転に向けた交渉が順調に行われているように感じられた。



写真13 イーデン神学校にて (2023年)
正面がクラウス学長、その右隣がホール氏、その右隣がキューカン氏、クラウス学長の左隣がメアリ・ブラウフス副学長夫妻

鐸木氏と私の今回の訪問が何らかの契機になったとは必ずしも言えないが、ランカスター滞在中の3月9日付でランカスター神学校は、“Lancaster Seminary, Evangelical & Reformed Historical Society Finalize Lease” と題して、次のようなニュースを広報した。

(注) 筆者は2019年夏の資料調査で、ロスアンゼルス近郊のクレアモント市におられたバーバラ・メンセンディク夫人をお訪ねしたが、その際に大事にされていたご主人ウィリアムのアルバムを寄贈していただいた。この写真はそのアルバムの冒頭に収められていたもので、ウィリアムが宣教師として東北学院に着任する直前の1948年6月に挨拶を受けた時の記念写真である。
(拙稿「ランカスター神学校での資料調査報告」本年報Vol.5 (2020年)、佐藤匠「若き宣教師たちにより撮影された戦後の仙台とその周辺-昭和20年代のカラー写真を含むアルバムから-」本年報Vol.6 (2021年) にも関連記事がある。)

「ランカスター神学校とERHSは、2025年1月までの3年間、現在の事務室とアーカイブを無償で神学校キャンパス内に置くことに合意する。この協定は神学校とERHSとの長年の関係を公式に延長するものであり、3年後にさらに1年間延長する選択も認める。」

(Lancaster Theological Seminary News,
March 9, 2023)

この協定で仮に1年の延長があったとしても、イーデン神学校への資料移管はここ2年以内となる。イーデン神学校には、今回初めて出会った押川の英文資料を含むグッド・コレクションを中心に、未知の資料が多く残されている。今後さらに東北学院の歴史的な資料の調査を行う時には、この神学校に行くことになるのかもしれない。



写真14 イーデン神学校

本稿の執筆に際しては当史資料センターの熊坂大佑氏と奈良輪俊幸氏に多大なる協力をいただいた。文末ではあるが、特に記して謝意を表したい。

本稿を再校していた最中に、鐸木道剛氏が逝去 (2月15日) されたとの知らせがあった。東北大学病院から故郷の岡山大学病院に転院されてから1ヶ月足らずの急逝に、ただ驚くばかりである。鐸木氏とは、2018年と2023年の2回にわたってアメリカでの資料調査を行ったが、今回の押川方義の英文資料は、鐸木氏がイーデン神学校のアーカイブで撮影してくださった写真を文字に起こしたものである。

これまでの交わりに心から感謝を申し上げたい。

日野 哲プロフィール

HINO, Satoshi

1949年生まれ。東北学院大学文学部英文学科卒業。1972年東北学院勤務。大学総務部長をもって2015年3月定年退職。同年4月から東北学院史資料センター調査研究員、2022年4月から同客員研究員。

自校史教育を通しての報告文作成指導 — 授業科目「東北学院の歴史」を事例として —

東北学院史資料センター調査研究員
東北学院大学法学部教授

齋藤 誠

東北学院史資料センター調査研究員
東北学院大学教養教育センター助教

伊藤 大介

はじめに

本稿は、東北学院大学（以下「本学」という）で実施されている授業科目「東北学院の歴史」における報告文作成指導に関する実践報告である。この授業は2021年度から開始されたものであり、その概要は、前号で『「東北学院の歴史」による自校史教育の実践』として紹介した¹。

一般的に自校史教育には、自校への誇りと愛着をもたせる役割が期待されることが多い。たとえば、自校史教育における先駆的な取り組みで知られる広島大学では、「大学の一員としてのアイデンティティの確立」を「目標」の1つとしている²。また追手門学院大学でも、自校史教育は「誇りや安心感を与え」、「アイデンティティを確かめる」ものとして位置づけられている³。

自校史教育にそうした役割を与える場合、いわゆる「不本意入学者」への対応が強く意識されることが多く、初年次や2年次に履修することが重視される。それに対して本学の「東北学院の歴史」は、前号でも述べたように3年次後期に設定されており、そのような役割からは一定の距離を置いている。

むしろ、シラバスの「講義内容」に「東北学院の歩みを、同時代の日本や仙台を取り巻く状況と関連づけながら学ぶ」と記しているように、授業を通して、本学を歴史的に理解することを主眼としている。

さらに実際の授業では、グループワークによる「調べ学習」を中心とすることを基本として、とくに文章作成に関する指導に重点を置く、というユニークな方法をとっている。

本稿ではその文章指導について、考え方や具体的な指導方法を紹介するとともに、それが自校史教育の目的と、どう関係するかを考えることとする。なお本稿は、前号に続いて2人による共同執筆となっているが、文章指導に関する具体的な内容（2と3）については主に齋藤誠（法学部）が、それ以外の部分については主に伊藤大介（教養教育センター）が担当した。

1. 授業の概要

最初に、授業科目「東北学院の歴史」について、概要をみておく。

この授業は、先述の通り2021年度から開始され、最初の2年間は文学部と教養学部の3年次後期を対象として、2023年度からは全学部の3年次後期を対象に実施されている。また、2023年に入学した学生が3年次後期に受講する際には「東北学院史の探求」という科目名に変更される予定である。

授業の方法は、いわゆる講義ではなく、自分でテーマを選択して報告文を作成する「調べ学習」であり、それを4人前後のグループワークとして実施する点に大きな特徴がある。全15回の授業において、最初の授業を全体のガイダンスに使用し、その後の14回の授業で3回ずつのグループワークを4ターン行う。さらに2ターンが終了するタイミングごとに、相互評価（ふりかえり）を1回ずつ実施する。

グループで作成するのはA4判で2枚程度、字数にすると約2000字の報告文である。授業のテキストである『東北学院の歴史』（河北新報出版センター、2017年）を時代順に4つに区分し、それぞれの時代ごとにテーマを設定して「東北学院の歴史」に関する報告文を作成する。

テーマの設定については、基本的に各グループにまかせている。資料は、東北学院史資料センター

¹ 齋藤誠・伊藤大介『「東北学院の歴史」による自校史教育の実践 —グループワークを活用した授業とその効果—』（『東北学院史資料センター年報』第8号、2023年）。

² 小宮山道夫「大学生の自校史教育受講に対する期待と需要に関する考察」（『広島大学文書館紀要』第13号、2011年）の107頁。

³ 寺崎昌男・梅村修（監修）『追手門学院の自校教育』（追手門学院大学出版会、2014年）の35頁や表紙袖の紹介部分など。

のwebサイトからPDFデータをダウンロードできる『東北学院百年史』全3冊(1989~1991年)や『東北学院史資料センター年報』(2016年~)など、各種の文献を使用して調査する。そのほか本学のwebサイトで、東北学院の機関誌である『東北学院時報』の記事を検索することができるので、その活用についても促すようにしている⁴。

なお、報告文をまとめる作業をサポートするために「報告文の書き方」という教材を作成し、配付している。「報告文の書き方」は、「報告文とは?」「文献・資料を使って報告文を書く際の注意点」「報告文を書く際の注意点」「報告文の構成」「タイトルと見出し」「参考文献の書き方」から構成されている数頁のプリントである。また、その趣旨を説明する動画を作成して、クラウド型教育支援システムであるmanaba(マナバ)にアップしている。

学生たちは、教員らによる指導に加えて、それらのプリントや動画を参照しながら報告文を作成する。以下では、自校史教育における文章指導の方法について、具体的にみていく。

2. 自校史教育と文章指導

(1) 出発点となる考え方

まず、「東北学院の歴史」という授業のなかで文章指導に力を入れている事情を説明しておく。すでに前号で紹介したように、大学が自校史教育のために「東北学院の歴史」という授業を導入することを決定した際、東北学院史資料センター内にその内容・方法を検討するチームがつけられた。グループワークによる「調べ学習」を中心とするという基本的考え方はそこで出され、その後それが全学的に承認された。しかし、詳細な授業計画については授業担当者に任されることになった。

最初の授業担当者となった齋藤の考えは、おおむね次のようにまとめることができる。

①「調べ学習」は、主体的学習によって学習対象への理解が深まる一方で、学習対象が部分的となり、

全体的理解が進まない可能性がある。東北学院の歴史を全体的に理解させるためには、そのための工夫が必要である。

- ②そうした工夫の1つとして、15回の授業終了後に、東北学院の歴史に関する基本知識を問う「確認テスト」を行うことが重要である。しかし、それだけでなく、「調べ学習」の回数を増やすことや、他のグループの学習成果に接する機会を設け、そこから学ぶことも重要である。
- ③「調べ学習」のターン数については、『東北学院の歴史』の8つの章の時期区分に沿って、2章ごとに1ターン、全体で4ターンは必要である。だとすれば授業は全部で15回であるため、1ターンの「調べ学習」にさける授業は3コマということになる。そこで、1コマ目は対象時期の概略理解とテーマ設定、2コマ目は情報収集と整理、3コマ目はとりまとめ、という内容とすることにした。
- ④学習成果の相互学習については、受講者全員が他グループすべての学習成果に接することが重要である。また、そこでの学びを実質化するには、評価という要素を入れることが有効である。評価は学びを深める。さらに、評価を個人的なものにとどめず、意見交換によってグループとして評価を定めるプロセスを入れれば、学びはさらに深くなる。本来は「調べ学習」ごとにこれを行うことが望ましいが、15回の授業回数のなかでは各ターンに1コマの相互評価を置くことはできないので、2ターンごとに1コマの相互評価を置くこととする。

(2) 学習成果のまとめ方

次の問題は、グループワークによる「調べ学習」の成果をどのような形でまとめさせるかである。これについては大きく2つの方法が考えられる。1つはポスター、映像などを使った口頭発表型であり、もう1つが「報告書」などの文書型である。もちろん、その両方を使えば教育効果は高いが、それでは学生の負担が増え、肝心の「調べ学習」による学びそのものに支障をきたす。

口頭発表型は、これからの社会的必要性という観点からみて、大きな教育的意義があることは認めつつも、やや「古典的」な文書型を選んだ。上記のように、「調べ学習」のターン数を確保すること、受講者全員が他グループのすべての学習成果に接し、評価する機会を確保することを重視するとき、口頭発表型には問題があると判断したからである。たと

⁴ 東北学院史資料センターのwebサイトなどの活用方法については、伊藤大介「歴史通信 東北学院史資料センター」(『国史談話会雑誌』第64号、2023年)でも紹介しているので、参照されたい。

えば、1コマ(90分)内で、順番に発表させることができるグループはせいぜい10である。「ポスターセッション」のように各グループの発表を同時並行的に行うことにしても、時間内に受講者全員がすべてのグループの発表を聞くことができるかどうかは怪しい。もちろん、クラス規模を小さくすれば事は解決する。しかし、予想される授業希望者数で40人程度のクラスをつくらうとすれば、クラス数は5つ以上になる可能性があった。それでは担当者の工面がつかない。

その点、報告文による文書型の成果発表は、こうした問題がある程度は解決できる。報告文を印刷して配付する、あるいはmanabaに提出させてクラス全員がそれを読めるようにしておけば、相互評価の時間は大幅に短縮できるからである。こうして文書型の成果物を想定した指導方法を考えることになった。

(3)「質保証」としての文章指導

この授業における文章指導は、よりよい学習成果を生み出すこと、つまり学習成果の「質保証」を目的としたものである。この授業の最大の学習目標は、自分たちが関心をもったテーマについて調べ、まとめることで、東北学院の歴史への理解を深めるということである。その学習成果の質を高めるためには、最終的な報告文の文章レベルを上げるだけでは不十分であり、それ以前の、「問い」をたて、情報を集め、「答え」を整理するという作業の質を高めなければならない。それに資するような文章指導が必要なのである。

そこで、この授業では、先述したように「報告文の書き方」というプリントを配付し、その趣旨を説明する動画をアップしている。報告文とはどのような文章なのか、どのような構成で書けばよいのかが説明の中心である。もちろん、文献の引用に関する注意、参考文献の書き方にも言及するが、最も重要な指導ポイントは、報告文とは、どのような「問い」をたて、どのような「答え」がわかったかを書く文章であり、それぞれを書くために「序論」「本論」「結論」があることを理解させることである。

しかし、この「報告文の書き方」を読み、説明動画を見て、趣旨を理解して自分たちの学習に応用できる学生はほとんどいない。授業では、具体的な作業のなかで、この「報告文の書き方」をどう応用するかを学生に意識させ、必要に応じて、具体的指導を行うことが重要である。以下に紹介するように、

この授業は、学生が「報告文の書き方」に書かれてあることを応用実践することをその主な内容としている。もっとも、授業中は、そのことをあまり口酸っぱく強調することはしない。この授業全体を終えた後に、学生がそのことに気づいてくれればそれでよい。

3. 授業の流れと指導のポイント

(1) テーマとタイトル

ターンにおける最初の1コマは、テーマとタイトルを決めるための授業である。授業参加者は、この授業への準備として、テーマを選ぶ教科書の該当部分(2つの章)を読み、必要ならばmanabaの「コースコンテンツ」にある「予習解説」動画を見て、各自が調べてみたいテーマ(私案)4つを具体的なタイトル案として考えてくる。

その際のポイントは、タイトルをかならず疑問文の形にさせることである。「～について」や「～の考察」ではなく、「～だったのはなぜか」「どのようにして～になったのか」などと表現することを求める。調べたいことを明確にさせるためである。

授業では、最初の30～40分、教員が教科書の該当部分について簡単な解説をした後、グループごとにテーマを2つに絞り込み、それを疑問文で表すための相談を行う。2つの案が決まったグループは、それをmanabaの「掲示板」に書き込む。「掲示板」に書き込まれた内容は同時に教室内のスクリーンに映されるので、どのグループがどんなテーマを選んでいるかが同時進行的にわかる。

次に、こうして出された各グループの案に教員がコメントを加える。コメントは、①テーマの重要性和面白さ、②調査の難易度、③疑問文に示された「問い」の明確さ、などといった観点から行う。さらに他グループとテーマが重ならないように、可能な範囲で相互調整を促す場合もある。

その後、各グループは、教員のコメントを参考に、テーマとタイトルを1つに絞るための話し合いをする。その結果は、授業終了後、グループの代表者がmanabaの「掲示板」に書き込み、教員はそれをチェックする。タイトルは次の授業の冒頭で最終的に決まる。提出されたタイトルを見て、教員が内容上または表記上、改善すべきと考える場合、修正をアドバイスするからである。

(2) 文章構成

2コマ目は、「報告」の骨格を決めるための授業である。

ここでのポイントは、上記のように、「報告」の構成が次のように厳格に指示されていることである。

序論は「1. はじめに」とすること。

本論は「2. 調査報告」とし、いくつかの(3～4つと指導)「部分」に分け、それぞれに「(1) * * * *」「(2) * * * *」…と見出しをつけること。

結論は「3. おわりに」とすること。

なお様式は、Word (ワード) で作成したものが準備されており、manabaからダウンロードすることができる。様式を指定する理由としては、学生に文章作成上のよけいな負担をかけないことのほかに、様式によって報告文の基本形を習得してもらうこと、さらには、様式を指定された文書において、様式を遵守することの重要性を知ってもらうことがある。

この授業で各グループが決めなければならないのは「2. 調査報告」を構成する3～4つの「部分」とその見出し(「(1) * * * *」「(2) * * * *」…)である。そのために、各グループは、さまざまな資料から情報を集め、それを整理する。この授業はほとんどがそうした調査活動にあてられ、教員と史資料センター職員がそれを支援する。

授業の最後の20分を使って、各グループは、「2. 調査報告」を構成する3～4つの「部分」とその見出しについて話し合う。また、「1. はじめに」「3. おわりに」を含めた全体の執筆分担も決める。その結果については、授業終了後、代表者がmanabaの「掲示板」に書き込む。教員はそれをチェックし、次の授業の最初の20～30分を使って、グループごとにコメントを加え、必要に応じて修正をアドバイスする。

(3) 推敲と校正

3コマ目は、「報告」を完成させるための最後の詰め授業である。この授業における指導のポイントは、最初のターン1から、最後のターン4にかけて変化していく。共通するのは、提出する文章をよくするためには推敲や校正が不可欠であり、それを誰がするのかグループ内で責任者(複数でもよい)を決めておくという指導である。しかし、推敲・校正といっても、学生は、誤字・脱字、文尾の統一程度しかイメージしていないので、授業では、それ以

外のチェックポイントを提示していかなければならない。具体的には、以下のように示していく。

①基本事項

最初のターン1やターン2では、文章を書く上で次のような基本事項を守ることを強調する。

ア) 様式を守ること。字数・枚数を守ること。

イ) 文字のフォント、ポイントを統一すること。

ウ) 段落をつけること。段落の最初は全角で1字あけること。

エ) 文を長くしないこと。1文は長くとも3行をこえないこと。

オ) 2文字以上の英数字は半角とすること。

ターン1で各グループが提出した報告について、教員はこの5点を重点的にチェックし、ターン2に取り組む際、気になった点を具体的に指摘する。これによって、ターン2の報告では、これらの基本事項については大きな改善がみられる。

②論旨の一貫性

ターン3では、報告全体における論旨の一貫性が重要なチェックポイントとなる。具体的には、次の3つをチェックさせる。

ア) タイトルに示された「問い」の内容は「1. はじめに」で説明されているか。「問い」の説明とは関係ないことが書かれていないか。

イ) その「問い」への「答え」は「3. おわりに」に書かれているか。「答え」とは関係ないことが書かれていないか。

ウ) 「3. おわりに」に書かれたその「答え」は、「2. 調査結果」を要約したものとイえるか。

この3点のどれが欠けても報告の論旨の一貫性は大きく損なわれること、逆にいえば、この3点に問題がなければ、それだけで報告として成立しているものであることを強調する。ちなみに、タイトルを疑問文にしておくことは、このチェック作業を、学生にとって、具体的でわかりやすいものとする効果をもっている。教室で各グループから報告原稿の内容について意見を求められたときも、教員はとりあえずこの3点についてチェックし、アドバイスをすればよい。

③参考文献

参考文献の書き方は、最後のターン4における推敲ポイントとしている。参考文献については、授業の初期に学生に配付する「報告文の書き方」、その内容を解説した動画のなかで書き方が説明されており、最初のターン1の報告から、その説明に従い参考文献を書くことを義務づけている。しかし、報告

の評価に際して、ターン3まではその書き方の正確さはそれほど気にしない。まずは、上記の①（基本事項）と②（論旨の一貫性）を重視するからである。

ターン4で参考文献の書き方を取り上げるとは、学生の関心の深まりにも合致している。学生たちは、ターン1からターン3までの作業を通じて、テーマを決めて資料を読み、その内容をまとめて1つの報告文を書くことについては、なにかしらのコツをつかんだような気になる。しかし、参考文献の書き方については、それまでは見よう見まねでなんとか書いてきたがまだ自信がない。そろそろ学びたいと思うのが、ターン4のころであろう。

指導のポイントは、第一に、参考文献を適切に書くことは、書いたものが「学術的」文章となるための不可欠の作法であるという意識づけである。そうした意識づけがされた学生は、参考文献の書き方が気になり、調べたり聞いたりする。第二には、具体的典型例の指摘である。教員は、ターン3までに書かれた参考文献のなかから典型的な不適切例を示し、それらをどう直せばよいのかを示す。あとは、個別指導で対応するしかない。

（4）相互評価

ターン1とターン2が終わったあとの授業（8回目）、ターン3とターン4が終わったあとの授業（15回目）では、それまでに提出された全グループの2つの報告のなかから、「特によかった」報告をグループとして3つ選ぶ作業を行う。授業参加者は全報告をmanabaから見ることができ、事前に自分なりの評価をしておくことを求められる。その評価をもちよって、グループで意見交換を行い、よいと思う報告3つを選ぶことになる。

この過程を通して、学生は他のグループの学習成果に接し、さまざまな報告内容から東北学院の歴史について多くの情報を得ると同時に、よい報告とはどのようなものであるかを学ぶことができる。高い評価を得るには、文章の形式、表現や表記の適切さだけでなく、どんな問いをたて、なにを調べ、なにがわかったのかをどう示すのが大切かを思い知るのである。そして、自分もそれをまねしようとする。相互評価は、文章指導にとって、非常に重要なプロセスである。

この理由から、相互評価の時間は課題が終わるごとに設けるのが望ましいと考えたことは先述の通りである。しかし、実際にやってみると、2つのターンが終わったあとに相互評価を行うメリットもある

ことがわかった。それは、よいとされた報告が、ターン1とターン2のどちらから多く選ばれているかをみて、明らかにターン2からのほうが多く、ターン3とターン4で比べるとターン4からのほうが多ければ、この間に行った指導が功を奏していることが示されていると考えられるからである。実際、今年度の授業では、そうした傾向は明確であった。

4. 自校史教育で文章指導をする意義

ここまで述べてきたような段取りで報告文を作成することによって、学生がなにを得られるのかをまとめてみよう。

まず、テキスト『東北学院の歴史』に沿って教員から説明を受け、自分たちが報告文を作成するほか、他グループの報告文にも目を通すことによって、自校史に関する基本的な知識を得ることができる。またグループワークによって報告文を作成し、その過程を相互評価（ふりかえり）することによって、グループワークに必要な主体性や協調性を高めることができる。

さらに、本稿でみてきたような文章指導を受けることによって、次のような成果も期待できる。

第一に、自らの問題関心によって「問い」をたてて、関係する情報を収集し、「答え」を明らかにする過程から、論理的な思考方法を実践的に応用することができる。またそうした成果を、学術的な文章と構成で表現する技術について学び、具体的に活用することもできる。

第二に、過去の出来事を対象とするので、その論述には因果関係が求められるほか、場合によっては対象、すなわち自校の歴史に対する批判的な観点を含むこととなる。そのような視点で自校史を検討することによって、自校に対する多角的な理解や、これからの在り方について考察することも可能になる。さらにグループワークで取り組むことは、他メンバーの意見にも配慮しながら検討する必要があるため、そうした効果をより大きくすると思われる。

前号でも紹介したように、2022年度の授業終了後に回収された感想カードに、「自分の通う学校についてより深く理解することができて良かった」や「大学の良さや知らなかった歴史を知ることができた」といった感想のほか、「学校の歴史を知るだけでなく、資料を探索する力、グループメンバーと協力する力、レポートをつくる力など、様々な力を総合的につけることができるのが良かった」と記されていたことは、期待していたような効果があったこ

とを示すものである⁵。

他方、こうした方式の授業に自校愛を高める効果を期待することは、不可能であろうか。2022年度の授業終了後のアンケートで「この授業によって東北学院とあなたの関係はどう変わりましたか?」と問いかけたのに対して、91人中14人が「東北学院に誇りや愛着をもてるようになった」を選択した。「とくに変わったところはない」を含めた8つの選択肢から「2つ以内」を選ぶアンケートにおいて、受講生の15%が「誇りや愛着」をもてるようになったと回答している⁶。

また2023年度も前年度から続いて、本学を「日本や仙台の歴史との関わり」や「歴史的視点」から見るようになったという歴史的な理解を示す回答が上位を占めた一方で、「誇りや愛着」を抱いた割合は21%（92人中19人）へと微増した。調べ学習の成果を報告文にまとめるための文章指導を中心に自校史教育を行うことは、アイデンティティの獲得と無関係ではないことを示している。

広島大学で自校史教育を実施した後のアンケート（2001～2010年）では、「広島大学に対する認識は変わりましたか」という問いに対して、「変化した」と回答した学生（1237人中1168人）の「認識が変化した理由」として、「誇りを感じた」が4.5%（1168人中52人）、「愛着が湧いた」が1.6%（19人）であった⁷。10年以上の時間差があるほか、項目の異なる部分もあるアンケートなので単純に比較することはできないが、調べ学習で行われる本学の自校史教育に、講義形式で実施された広島大学と同程度か、それ以上に「誇りや愛着」を抱く効果があったと考えられる。

アクティブラーニングによって自校愛がより高められるメカニズムについては、今後とも検討を加えていく必要があるが、自校史に関する報告文を作成することによって、当初想定していた以上に受講生が「誇りや愛着」をもつようになることが明らかになった。

⁵ 齋藤誠・伊藤大介『『東北学院の歴史』による自校史教育の実践』の85～86頁。

⁶ 齋藤誠・伊藤大介『『東北学院の歴史』による自校史教育の実践』の85頁。

⁷ 小宮山道夫「大学生の自校史教育に対する評価と自校認識の変化に関する考察」（『広島大学文書館紀要』第14号、2012年）の45頁。

おわりに

本稿では、授業の概要について紹介した上で、自校史教育における文章指導について解説を加えた。文章指導を進めていく際の考え方や、学習成果をまとめるまでの段取りについて説明したほか、文章指導によって報告文の質を保證することで学習効率を高める必要性について述べた。

また授業の流れと指導のポイントに関して、テーマの設定や報告文の構成について細かく指導するだけでなく、推敲・校正をする際には、様式を遵守すること、論旨に一貫性をもたせること、参考文献を適切に表記すること、などのチェックポイントを設けることを紹介した。さらに相互評価の時間を設定することで、自校史への理解が深まるだけでなく、報告文の質が向上することを指摘した。

さらに自校史教育で文章指導をする意義として、論理的な思考を身につけるだけでなく、それを表現する技術や、歴史的観点による多角的な理解を期待できることを記した。そのほか、そうした文章指導などを通して、自校に対する誇りや愛着を抱く可能性についても、ある程度存在することが確認できた。

今後、「はじめに」で述べたように、授業の科目名や担当者が変わることで授業の内容にも変更が加えられていく可能性もあるが、自校史を探究することによってアイデンティティが確立されるプロセスや経路については、引き続き考察を進めていきたい。

なお本稿の末尾に、今年度の成果から2編を選んで掲載しておく。学生のプライバシーや頁数の関係から編集を加えた部分もあるが、提出されたものを大きく変えているわけではない。これら2つは、提出物のなかでも質の高かったものであるが、同じようなレベルのものも少なくなかった。授業を通して実施された文章指導が、相応の成果を上げていることを確認いただけるものと思う。

齋藤 誠プロフィール

SAITO, Makoto

1954年宮城県生まれ。1981年東北大学大学院法学研究科（政治学専攻）満期退学。同年東北学院大学法学部講師（1991年教授）。1993年仙台市史編さん調査分析委員、2008年同専門委員。

伊藤 大介プロフィール

ITO, Daisuke

1973年山形県生まれ。東北大学大学院文学研究科博士課程後期（歴史科学専攻日本史専攻分野）単位取得退学。2022年東北学院大学教養教育センター助教。

〈学生の報告文①〉

東北学院の歴史「課題テーマ2 報告」Bグループ（火曜5限）

鈴木義男はなぜ配属将校政策に反対したのか？

2120000 ■■■■■■ 2160000 ■■■■■■ 2150000 ■■■■■■ 2130000 ■■■■

1. はじめに

本報告は、1925年にとられた配属将校制度について調べ、なぜ私立学校であった東北学院が配属将校を受け入れたのか、また、東北学院の卒業生である鈴木義男はなぜ配属将校政策を批判したのかについて報告するものである。

『東北学院の歴史』には、学校教練の導入が義務ではない東北学院が自ら希望して配属将校を受け入れたとあった。それに対して鈴木が反対した理由が気になったため、その理由を調べることで学校外の視点からの考え方を知ることができると考えた。

配属将校政策に対する東北学院と鈴木義男、それぞれの考え方や対応について『東北学院の歴史』と『平和憲法をつくった男 鈴木義男』をもとに調べた。

2. 調査結果

（1）配属将校政策はどのようなものであったか？

ワシントン会議のあと、各国では軍備縮小に向けた動きを本格化させていった。軍縮には兵力量の削減も盛り込まれていた。

そこで、文部省は1925年に配属将校政策として、全国の中等学校以上の教育機関に対して配属将校の派遣を開始した。配属将校とは、学校に派遣され学校教練を担当した陸軍現役将校のことである。学校教練は公立学校では義務化されていた。それまで、学校での軍事教練は在郷の軍人により行われていたが、軍縮により将校が有り余るようになったため、彼らの救済処置としてこの政策がとられた。

（2）東北学院はなぜ配属将校を受け入れたのか？

東北学院が義務ではない配属将校を受け入れた背景には、生徒の募集に役立つという思惑があった。1927年に施行された兵役法では、徴兵された際に他の兵士よりも優遇され、最短10か月で上級士官へと昇進することが約束された「幹部候補生制度」が導入され、その有資格者は配属将校が行う学校教練の査閲に合格した者と定められていた。これは、配属将校を受け入れなければ当然ながら査閲が実施できず、幹部候補生制度の特典の資格が得られないことを意味する。

また、配属将校の派遣が開始された1925年にはすでに就職難が始まっており、国家公務員でもあった職業軍人への就職人気が高まり続けていた。そのような状況を踏まえて、東北学院は学生が卒業後の兵役上の特典を得るために配属将校を受け入れた。

（3）鈴木義男はなぜ配属将校に反対したのか？

1924年3月から東北帝国大学で教授をつとめていた鈴木義男は、1907年4月から1912年3月まで東北学院普通科に在籍していた卒業生であり、当時の院長であったシュネーダーとは卒業後も交流していて、頻繁に近況報告をする仲であった。

ワシントン会議後、各国は軍事縮小に向けた動きを本格化させていった。日本もその中の一国であり、陸軍省と文部省により軍事教育案が打ち出された。しかし、この案は実質的には日本の軍勢力を温存させることを企図していたため、実際には軍縮といえなかった。しかも現役将校が普通学校の教育現場に配属されることで、効果的な軍事教育の実施を可能にした。このような政策に対して、鈴木は激しく反発し、批判的姿勢を鮮明にした。

軍縮が本格化した1924年の12月7日に、鈴木は東北帝国大学内で行われた「仙台軍事教育学生反対同盟」主催の集会に招待されて演説し、その内容は『河北新報』に掲載された。それは、文部省と陸軍省が共同で打ち出した軍事教育案に対し、極めて痛烈な批判をしたものであった。特に、現役将校を学校に配属することに関して、普通教育の場に軍事教育を持ち込むことの弊害について主張している。

鈴木が軍事教育案を批判する理由としては、日本の教育分野において軍国主義教育があまりにも大きな位置を占めており、ヨーロッパで行われているような文化面を重視した普通教育が軽視されていることへの懸念があった。

3. おわりに

配属将校は世界的な軍縮の流れでとられた政策であったが、国は幹部候補生制度の導入により公立・私立学校共に受け入れざるをえない状態をつくり、実質的に軍の力を温存しようとしていたことがわかった。また、配属将校制度は東北学院を含む各学校の生徒募集に大きな影響を与えるものであったため、東北学院や他の私立学校は自ら希望して配属将校を受け入れ、学校教練を正課とした。

これに対して欧米留学を経験し、海外の教育方針を知っていた鈴木は、普通教育の現場に軍事教育を持ち込むことを、文化面を重んじる普通教育を軽視するものとして、配属将校政策に反対していたことがわかった。

<参考文献>

- 1) 仁昌寺正一『平和憲法をつくった男 鈴木義男』筑摩書房、2023年（107-109頁）。
- 2) 東北学院『東北学院の歴史』河北新報出版センター、2017年。

〈学生の報告文②〉

東北学院の歴史「課題テーマ3 報告」Mグループ（水曜5限）

なぜ短期大学部がつくられたのか

2110000 ■■■■ 2130000 ■■■■ 2160000 ■■■■ 2140000 ■■■■

1. はじめに

本報告は東北学院の短期大学部ができた経緯や設置目的、短期大学部が果たした役割について調べ、報告するものである。

私たちは通常の4年制の大学に在学しているが、当時の短期大学部がどのような組織であったか、なぜ通常の大学だけでなく、短期大学部の需要があったのか、短期大学部の設置目的は何だったのかに興味を持ったため、『東北学院の歴史』や『東北学院七十年史』などの文献をもとに調査した。

2. 調査結果

（1）短期大学部ができた経緯

短期大学部がつくられる過程において、全国の動向が関係している。『東北学院七十年史』によると、旧制大学、高等学校、専門学校から新制大学への移行の中で、設置基準に達しない学校の処理問題があった一方で、戦後の人手不足等の社会経済的な理由から、4年以下の短期の修業で職業人を養成する教育機関の要望があった。

これらの問題に対して、国は1949年8月に短期大学設置基準を定め、翌年4月には、全国的に短大が設置された。その性質上、職業人教育が主目的であるため、学科の種別も多様に存在していた。農・工・商等の実業的教育を目的とするもの、社会事業・児童福祉等の特殊教育を目的とするもの、家政・音楽・保育等の女子を対象とする学科が多数つくられた。

そうした事情に加えて、東北学院では、戦時中から中学と専門学校に第二部（夜間）を設けて人気となっていたことや、戦後になっても定時制の夜間高校や専門の夜間二部を継続していたことが、短大をつくることになった要因として挙げられる。

（2）短期大学部の設置

文部省の新教育体制では、4年制大学をもって専門教育の本旨としていた。そのため、短期大学部は特殊の事情を解消するまでの暫定的なものであると考えられていた。しかし、短大の志望者が非常に多く、当時の社会的要請を如実に示していた。卒業生は、専門教育資格者として勤務を継続した者、大学に進学した者などがいた。

認可については、施設をはじめ、教職員等も転用が可能であったため、問題なく進んだ。短大の設置申請書は1949年10月13日付で提出され、大学と同様に英文、経済の2科を置いて、翌年4月から開設される流れとなった。こうして東北学院では、夜間教育を行う2年

制の短期大学部をつくり、東北学院大学の初代学長であった小田忠夫が短期大学部の学長を兼任した。さらに1952年には、社会的要望に応じて法科を増設した。

（3）短期大学部が果たした役割

『東北学院の歴史』の107～108頁には、夜間教育を行う4年制大学が認められなかったために短期大学部を設置したことや、当時、官公庁や企業に勤務しながら高等教育を受けることを望む人が少なくなかったと記載がある。

また、文部科学省のwebサイトにも「旧制専門学校の中には十分な条件が整わず新制大学に移行することが困難なものが相当数あった。これらの学校を救済し、新学制への円滑な切替えを図るため、当分の間の暫定的制度として、昭和二十五年から短期大学制度が発足した」と記載がある（「学制百二十年史 短期大学設置基準の制定」）。

当時はやむを得ずこの形態をとることになったのだが、時代背景を鑑みると、低廉な学費で、夜間に高等教育を受けられる環境はかえって恵まれていたといえる。戦後、経済状況がひっ迫する中で、4年制大学と比べて集中的な期間で知識を習得でき、なおかつ学費を抑えられる短期大学部の需要は絶大であったといえよう。

短期大学部の好評は学校財政を支え、法科の増設も行われた。そして1959年には短期大学部は廃止され、念願であった4年制大学の文経学部第二部として成立することとなった。

3. おわりに

短期大学部は旧制大学から新制大学への移行の中で、設置基準に達しない学校や職業人教育の需要に応えるために、国が暫定的に設置した制度であるとわかった。短期大学部の需要が高かったのは、戦後の経済がひっ迫している状況で、4年制大学より短い期間で知識を習得でき、なおかつ学費を抑えることができるためである。

東北学院は、戦時中から夜間部を設けていた経緯もあって、1950年に短期大学部を設置した。短期大学部は、安い学費で高等教育を受けられることから多くの志願者が集まったことで学校財政を支え、1959年には4年制大学の第二部となったことがわかった。

<参考文献>

- 1) 「学制百二十年史 短期大学設置基準の制定」文部科学省 web サイト、
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318386.htm 2023年11月28日参照。
- 2) 東北学院創立七十年史編纂委員会（編）『東北学院七十年史』東北学院大学同窓会、1959年（837-838頁）。
- 3) 東北学院百年史編集委員会（編）『東北学院百年史（通史）』東北学院、1989年（986-988頁）。

2023年度公開シンポジウム 「東北学院の夜間教育を考える」開催報告

日 時：2023(令和5)年12月2日(土) 13時～
会 場：土樋キャンパス ホーイ記念館ホール
参加者：約60名



12月2日(土)、東北学院史資料センターが主催する2023年度公開シンポジウム「東北学院の夜間教育を考える」が開催された。

今回の企画は、高校二部が閉校して40年が過ぎたことを契機に、これまで東北学院の夜間教育について考える機会があまりなかったことを反省しつつ、特に資料として残り難い当時の現場の様子や雰囲気を感じられるような内容を後世に残すことを目的に企画された。また、東北学院中学校・高等学校が2022年度から男女共学化となったことは記憶に新しいが、実は卒業生には多くの女子生徒がいることを知って欲しいという思いもあった。高校二部には多数の女子生徒が在籍し、学び、青春を謳歌し、男子生徒と同じように卒業していった事実を、今一度東北学院の歴史の表舞台に立たせたかったという考えも企画実現の後押しをした。

基調講演は東北学院大学法学部教授で当センター調査研究員の齋藤誠教授にお願いした。齋藤教授には、東北学院の夜間教育の歴史を解説していただき、



基調講演



齋藤 誠

そのうえで東北学院史における夜間教育の意義や評価などをしていただいた。

東北学院の夜間教育は1942（昭和17）年の高等学部商科第二部・中学部第二部の設置に始まり、その後さまざまに姿・形を変えながら、1983（昭和58）年の高校二部の廃止と2015（平成27）年の大学文学部昼夜開講制廃止によって終わりを迎えた。

齋藤教授は二部設置の要因を、①米国ミッションボードからの財政支援断絶による財政自立の必要性、②社会的ニーズの高さ、であるとした。

そして、その根底に流れる基本理念は、1892（明治25）年に設置された「労働会」の精神にあるとした。「労働会」は初代院長押川方義が設立した、生徒自らが学資を稼ぐための団体である。当時押川を

慕って全国から志願者が集まるようになっていたが、中には経済的に豊かではない者も少なくなかった。押川は欧米視察で目にした育英制度を基にして労働会を設立し、新聞販売、牛乳配達、牧場経営、洗濯、牛肉販売、石油販売、味噌醤油販売、雑誌販売、出版事業などを行った。この活動は社会的にも注目され、高い評価を得ていたが、会員の生活は決して楽なものではなかった。その後産業社会化の進展とともに労働に専門性が求められるようになると、生徒たちができる仕事は限られるようになり、労働会は徐々に事業を縮小せざるを得なくなった。1921（大正10）年に30年の歴史に幕を閉じる。

※基調講演の詳細な内容は、『東北学院史資料センター年報』Vol.10（2025.3刊行予定）に掲載予定

基調講演の後は、高校二部または大学二部で教鞭をとられた先生や、学ばれた生徒・学生の方々をゲストスピーカーとしてお迎えし、当時の学校の様子や学生生活などについて語っていただいた。

（登壇順）

高等学校二部卒	矢口 つとむ 氏
元高等学校二部兼任教員	大木 騏一郎 先生
大学二部英文卒	堀籠 洋一 氏
大学二部経済卒	鈴木 和義 氏
元大学二部兼任教員（現大学文学部教授）	植松 靖夫 教授

※それぞれの話された内容の詳細は、『東北学院史資料センター年報』Vol.10（2025.3刊行予定）に掲載予定



矢口 つとむ



大木 騏一郎



堀籠 洋一



鈴木 和義



植松 靖夫



日野 哲



大宮司 俊彦

後半は、当センター客員研究員の日野哲氏をファシリテーターとして、パネルディスカッションが行われた。前半に登壇した5名に加え、元東北学院職員の大宮司俊彦氏にもご登壇いただいた。

※パネルディスカッションで話された内容は、『東北学院史資料センター年報』Vol.10（2025.3刊行予定）に掲載予定

パネリストの皆様の思い出話に聴衆から笑いが起こり、東北学院二部に対する熱い想いに涙する人が現れるなど、大変有意義なシンポジウムとなった。



パネルディスカッション

受贈資料一覧

2023年2月～2024年1月

日付	寄贈者	受贈資料
2023.02.01	仁昌寺正一	平和憲法をつくった男 鈴木義男
2023.03.13	國學院大學研究開発推進機構 校史・学術資産研究センター	國學院大學 140周年記念誌
2023.03.22	日本大学企画広報部広報課（大学史編纂）	大学史展示記録 2015-2021
2023.04.10	立教学院百五十年史編纂委員会	立教学院百五十年史 第一巻
2023.04.18	河西晃祐	東北学院大学における改革の経緯と現状 [I]
2023.04.18	河西晃祐	東北学院大学における改革の経緯と現状 [II]
2023.04.18	平崎真右	二松學舎史パンフレット 創刊号
2023.05.08	専修大学大学史資料室	専修大学史資料集 第五巻 -大学昇格への道のり-
2023.05.17	大阪府立中央聴覚支援学校	大阪市立聾学校人物伝 高橋潔～手話を守った教育者～(小学高学年以上対象)
2023.06.02	京都産業大学大学史編纂室	学校法人京都産業大学五十年の歴史(一) 前史編-京都産業大学の誕生-
2023.06.15	青山学院	青山学院一五〇年史 通史編I
2023.07.14	神戸女学院	神戸女学院創立150周年記念展示第一弾「C. B. デフォレスト展-愛と美を求めて-」展示目録
2023.08.10	ケン・クレラー	H. Richard Niebuhr on the christian world mission
2023.08.10	ケン・クレラー	Religion-state relations in japan
2023.08.10	ケン・クレラー	信ずる 若き日の信仰
2023.08.10	ケン・クレラー	石鳥谷善隣館保育園 保育40年
2023.08.10	ケン・クレラー	堀友三郎記念誌
2023.08.10	ケン・クレラー	They dared to live their faith : the influence of christian women in sendai
2023.08.10	ケン・クレラー	この岩の上に 日詰教会70周年記念誌
2023.08.10	ケン・クレラー	戊辰戦争と仙台展 激動の明治維新前夜
2023.09.11	東北学院校友課	仙台経済界 通巻314号 '23TG同窓界
2023.09.16	枝澤康代	主の恵みは尽きることがない エスター・L・ヒバード先生追悼記念集
2023.09.16	枝澤康代	ヒバード先生召天10年記念のしおり
2023.09.21	民谷雅美・石崎康子	主の平和 -PEACE OF THE LORD- 横浜クライストチャーチ史 1860-2023
2023.10.05	矢口つとむ	神曲 改訳稿本
2023.10.05	矢口つとむ	スケッチ・イン仙台
2023.10.05	矢口つとむ	スケッチ・イン仙台 Part II
2023.10.05	矢口つとむ	スケッチ・イン仙台 Part III
2023.11.02	岩間睦子	宮城縣史 全35巻揃
2023.11.08	大東文化大学百年史編纂委員会	大東文化大学百年史 上
2023.11.08	根津育英会武蔵学園	武蔵学園百年史
2023.11.22	東北学院大学書道研究部	あゆみ 創設六十周年記念
2023.12.05	慶應義塾福澤研究センター	慶應義塾福澤研究センター開設35年記念誌
2023.12.13	拓殖大学拓殖アーカイブズ事務室	拓殖大学百二十年小史
2023.12.28	立教学院展示館	立教学院創立150周年記念展 シーズン1 立教学院展示館 第9回企画展 『災害の経験に学ぶ -19世紀から21世紀、立教の取り組みから-』
2023.12.28	立教学院展示館	立教学院創立150周年記念展 シーズン2 立教学院展示館 第10回企画展 『立教と箱根駅伝』
2024.01.15	ケン・クレラー	Through the storm
2024.01.15	ケン・クレラー	No time to rest : the story of Herman Henry Cook, missionary to Japan

※他逐次刊行物類多数をご寄贈いただきました。感謝申し上げます。

東北学院の沿革

年 代	歴代役職者	事 項
1886(明治19)年		W.E.ホーイ仙台着任(1月)。押川方義、W.E.ホーイ兩名により、キリスト教伝道者養成の目的をもって仙台市木町通に「仙台神学校」開設(5月)。教師2名、生徒7名で始まった。E.R.プルボー、M.B.オールドが来日(7月)、宮城女学校を創立(9月)。
1887(明治20)年		東二番丁の本願寺別院跡を取得し、仙台教会と仙台神学校を移転(5月)。
1888(明治21)年		D.B.シュネーダー夫妻仙台着任(1月)。オールド記念館落成(11月)。
1891(明治24)年		南町通りに仙台神学校校舎が完成(9月)。校名を「東北学院」と改称し、神学生のみならず、広く生徒を募集し、普通科を設置。予科2年・本科4年・神学部3年とする。
1892(明治25)年	押川方義	労働会創設(3月)。東北学院理事局を組織、初代院長に押川方義、副院長・理事局長にホーイ就任(8月)。東北学院開院式を挙行(11月)。
1895(明治28)年		予科・本科を改組し、普通科5年、その上に専修部(文科・理科)2年を設置。
1896(明治29)年	W.E.ホーイ	島崎春樹(藤村)、作文・英語教師として着任。
1898(明治31)年		理科専修部を廃止。
1900(明治33)年		第2代理事局長にD.B.シュネーダー就任(10月)。
1901(明治34)年	D.B.シュネーダー	第2代院長にD.B.シュネーダー就任。普通科長に笹尾糸太郎就任(4月)。普通科に制帽を制定。徽章TG章制定。
1903(明治36)年		東北学院同窓会結成。
1904(明治37)年		全校を普通科(5年)と専門学校令による専門科(3年)とに分け、専門科に文学部と神学部とを置く。専門科長に出村悌三郎就任(4月)。
1905(明治38)年	笹尾糸太郎	専門科を専門部、文学部を文科、神学部を神学科と改称。東二番丁に普通科校舎完成。専門部に角帽を制定。徽章は全校TG章を用いる。普通科長に田中四郎就任(9月)。
1906(明治39)年		普通科寄宿舎完成。
1908(明治41)年	田中四郎	「社団法人東北学院」設置。創立記念日を5月15日に定める。同窓会会報第1号発行。
1910(明治43)年		校旗制定。
1911(明治44)年		創立25周年記念式典挙行。
1915(大正4)年		普通科を中学部と改称(5月・生徒数357名)。中学部長は田中四郎。
1916(大正5)年		『東北学院時報』創刊(1月)。南六軒丁(現大学土樋キャンパス)に専門部校地取得。
1918(大正7)年		専門部を改組、神学科・文科・師範科・商科とする。
1919(大正8)年		南町大火のため中学部校舎・寄宿舎全焼(3月)。仮校舎建築(9月)。
1920(大正9)年		中学部長に五十嵐正就任(1月)。
1921(大正10)年	五十嵐正	中学部寄宿舎再建(9月)。



年 代	歴代役職者	事 項
1922(大正11)年		<p>中学部校舎再建(東二番丁・通称赤レンガ校舎)(6月)。</p> 
1923(大正12)年		<p>東北学院教会設立(5月)。</p>
1925(大正14)年		<p>神学科を専門部より分離し、神学部(第1科・第2科)とする。専門部は文科、師範科、商科となる。</p>
1926(大正15)年		<p>南六軒丁に専門部校舎完成(現大学本館)、9月より使用。創立40周年記念式ならびに専門部校舎落成式を挙行政(10月)。</p> 
1928(昭和3)年		<p>専門部3科とも予科を廃止、4年制とする。ハウスキーパー記念社交館完成(3月)。</p>
1929(昭和4)年		<p>専門部を高等学部と改称。神学部第2科を廃止、第1科を神学部本科と改称し、3年の予科を置く。「財団法人東北学院」と改組(8月)。</p>
1930(昭和5)年	出村悌三郎	<p>高等学部師範科に専攻科1年を置く。</p>
1932(昭和7)年		<p>高等学部は3学期制を2学期制に改める。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂完成(3月)。労働会寄宿舍を廃止。中学部寄宿舍を廃止し、神学部寄宿舍をその跡に移す。</p> 
1933(昭和8)年	E.H.ゾーグ	<p>高等学部制帽を角帽より丸帽に改める。</p>
1934(昭和9)年		<p>神学部、南六軒丁ブラッドショウ館に移る。</p>
1936(昭和11)年		<p>高等学部文科を文科第一部、師範科を文科第二部と改称。創立50周年記念式典を挙行政。院長シュネーター、「我は福音を恥とせず」と題する説教を行う。第3代院長に出村悌三郎就任(5月)。旧労働会建物および敷地を売却。第3代理事長にE.H.ゾーグ就任(6月)。</p> 
1937(昭和12)年		<p>神学部廃止、日本神学校と合同(3月)。高等学部は3年制となる。高等学部長にゾーグ就任(4月)。</p>
1938(昭和13)年	小泉要太郎	<p>中学部長に田口泰輔就任(4月)。</p>
1939(昭和14)年		<p>中学部長に出村剛就任(4月)。</p>
1940(昭和15)年		<p>南町通り旧神学部校舎および敷地を売却。東北学院維持会を組織。花淵浜高山に修養道場建築用地を取得。第4代理事長に出村悌三郎就任(10月)。</p>
1941(昭和16)年	宮城音五郎	<p>高等学部長に出村剛、中学部長に小泉要太郎就任(4月)。</p>
1942(昭和17)年		<p>高等学部商科第二部および中学部第二部を設置(ともに夜間)。</p>
1943(昭和18)年		<p>高等学部商科を高等商業部、中学部を東北学院中学校と改称。中学校長を出村悌三郎院長兼任(4月)。</p>
1944(昭和19)年	核山元治郎	<p>航空工業専門学校設置。航空工業専門学校長に宮城音五郎就任(4月)。第5代理事長に杉山元治郎就任(6月)。</p>
1945(昭和20)年		<p>中学校長に出村剛就任(4月)。航空工業専門学校を工業専門学校と改称(12月)。中学校校舎空襲により焼失。</p>
1946(昭和21)年	出村剛	<p>高等商業部および同第二部を廃止(3月)。東北学院専門学校(英文科・経済科)および同第二部を設置。第4代院長に出村剛就任。中学校長に月浦利雄就任(4月)。専門学校長に出村剛就任(4月)。</p>

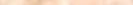
年 代	歴代役職者	事 項
1947(昭和22)年		工業専門学校廃止。新制中学校設置。専門学校校舎木造2階建4教室増築完成。第6代理事長に鈴木義男就任(7月)。
1948(昭和23)年	月浦利雄	新制高等学校、同第二部を設置。月浦利雄同高等学校長ならびに中学校長兼任(4月)。専門学校長に小田忠夫就任(4月)。
1949(昭和24)年		東北学院専門学校から新制大学に昇格。東北学院大学文経学部(4年制、英文学科・経済学科)を設置。小田忠夫初代大学長に就任。東九番丁寄宿舍完成。
1950(昭和25)年	鈴木義男	専門学校二部を東北学院短期大学部(2年制、英文科・経済科)と改称。第5代院長にA.E.アンケニー就任(3月)。
1951(昭和26)年		「学校法人東北学院」と改組。専門学校を廃止。短大別科を設置。第6代院長に小田忠夫就任。中高理科教室鉄筋コンクリート3階建完成。
1952(昭和27)年	A.E.アンケニー	短期大学部に法科を設置。
1953(昭和28)年	多賀城第2寄宿舍完成。	中学高等学校分離、中学校長に五十嵐正躬就任(4月)。総合運動場を宮城郡多賀城町(現多賀城市)に開設。シュネーダー記念東北学院図書館完成(10月)。
1954(昭和29)年		多賀城第2寄宿舍完成。
1955(昭和30)年	小田忠夫	創立70年記念式典挙行。中学校校舎鉄筋コンクリート造3階建9教室完成。『東北学院創立七十年写真誌』を刊行(5月)。在米同窓生、創立70年記念として鐘を寄贈(12月)。蔵王にTGヒュッテ「栄光」完成。
1956(昭和31)年		中学・高等学校体育館完成(3月)。W.E.ホーイ碑、出村悌三郎墓を北山墓地に建立(4月)。大学音楽館完成(10月)。
1958(昭和33)年	五十嵐正躬	中学高等学校一本化、中学校長を月浦利雄高等学校長兼任(1月)。中学校赤レンガ校舎は都市計画により9教室を失う(4月)。中学・高等学校鉄筋コンクリート造4階建8教室完成(4月)。大学体育館「アセンブリー・ホール」完成(9月)。
1959(昭和34)年		短期大学部を東北学院大学文経学部二部(英文学科・経済学科)に改組。高等学校榴ヶ岡校舎を開設。『東北学院創立七十年史』を刊行(7月)。大学研究棟鉄筋コンクリート造4階建完成(9月)。自然科学研究室青根分室を開設(10月)。
1960(昭和35)年		短期大学部を廃止(3月)。
1961(昭和36)年		文経学部英文学科に専攻科を設置。
1962(昭和37)年		多賀城町に東北学院大学工学部(機械工学科、電気工学科、応用物理学科)を設置。同校地に東北学院幼稚園を開設。初代幼稚園長を小田忠夫院長兼任(4月)。
1963(昭和38)年		押川記念館完成(2月)。工学部寄宿舍開設。大学オーディオ・ビジュアルセンター完成。野間記念剣道場完成(7月)。第7代理事長に杉山元治郎就任(9月)。
1964(昭和39)年		東北学院大学文経学部一部・二部を文学部一部・同二部および経済学部一部・同二部に改組。大学院文学研究科英語英文学専攻修士課程を設置。大学64年館完成(10月)。第8代理事長に山根篤就任(11月)。
1965(昭和40)年	山根篤	東北学院大学法学部(法律学科)および大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を設置。宮城郡泉町市名坂字天神沢(現仙台市泉区天神沢)に10万坪の校地を取得(5月)。同窓会にTG十五日会発足(7月15日)。工学部4号館完成(10月)。中学校新校舎、中高礼拝堂完成(11月)。大学土樋寄宿舍完成。
1966(昭和41)年		大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻修士課程を設置。創立80周年記念式典挙行。大学66年館完成(6月)。大学泉寄宿舍完成。青根セミナーハウス完成。



年 代	歴代役職者	事 項
1967(昭和42)年		工学部に土木工学科を増設。中学・高等学校運動部室完成(3月)。大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を経済学研究科経済学専攻修士課程に改組。大学67年館完成(5月)。中学・高等学校向山寄宿舎開設。
1968(昭和43)年		大学院経済学研究科経済学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻博士課程を設置。工学部5号館・6号館完成(3月)。中学・高等学校弓道場完成(3月)。大学新研究棟68年館完成(8月)。『東北学院大学学報』第1号創刊(10月)。
1969(昭和44)年		工学部旭ヶ丘寄宿舎開設。第9代理事長に月浦利雄就任(4月)。
1970(昭和45)年		工学部校地に東北学院プール完成。
1971(昭和46)年	 二関敬	大学院工学研究科機械工学専攻修士課程、電気工学専攻修士課程を設置。倉石ヒュッテ完成。中学・高等学校長に二関敬就任(9月)。榴ヶ岡高等学校長に五十嵐正躬就任(9月)。大学文団連棟焼失(9月)。
1972(昭和47)年	 田口誠一	榴ヶ岡高等学校として独立(4月)。高山セミナーハウス完成(7月)。泉市市名坂に榴ヶ岡高等学校校舎が完成移転(8月)。榴ヶ岡高等学校体育館完成(12月)。
1973(昭和48)年		東北学院同窓会館完成(4月)。米国アーサイナス大学に第1回夏期留学生を派遣。中学・高等学校寄宿舎完成。幼稚園長に渡辺平八郎就任(7月)。
1974(昭和49)年	 清水浩三	大学院工学研究科機械工学専攻博士課程および電気工学専攻博士課程設置。第10代理事長に小田忠夫就任(3月)。
1975(昭和50)年		大学院法学研究科法律学専攻修士課程設置。大学67年館増築完成(6月)。
1976(昭和51)年		創立90周年記念式典挙行。
1977(昭和52)年	 情野鉄雄	中学・高等学校長に田口誠一就任(4月)。榴ヶ岡高等学校長を小田忠夫院長兼任(4月)。
1978(昭和53)年		大学90周年記念館完成(2月)。榴ヶ岡高等学校長に清水浩三就任(4月)。中学・高等学校赤レンガ校舎、宮城県沖地震のため一部倒壊(6月)。TGヒュッテ焼失(8月)。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂(土樋キャンパス礼拝堂)に新パイプオルガンを設置(11月)。
1979(昭和54)年	 児玉省三	大学院法学研究科法律学専攻博士後期課程を設置。工学部計算センター完成(3月)。中学・高等学校赤レンガ校舎見送り式(3月)。大学78年館および部室棟完成(9月)。蔵王TGヒュッテ再建(10月)。東北学院展開催(十字屋仙台店・10月)。
1980(昭和55)年	 宗方司	中学・高等学校シュネーダー記念館完成(3月)。工学部機械工場および機械実験棟完成(3月)。榴ヶ岡高等学校礼拝堂および北校舎完成(8月)。泉校地総合運動場および管理センター完成(9月)。中学・高等学校文化部室完成(9月)。
1981(昭和56)年		大学81年館完成(3月)。『東北学院報』発刊(『東北学院大学学報』を改称)(4月)。情報処理センター設置。総合運動場プール完成(5月)。榴ヶ岡高等学校第1回海外研修(8月)。工学部体育館完成(10月)。
1982(昭和57)年	 半澤義巳	米国アーサイナス大学と国際教育交流協定を締結。第7代院長・第2代大学長に情野鉄雄就任(4月)。第11代理事長に児玉省三就任(4月)。図書館工学部分館完成(11月)。
1983(昭和58)年		高等学校第二部廃止(3月)。榴ヶ岡高等学校校舎増築完成(3月)。工学部礼拝堂完成(10月)。
1984(昭和59)年	 武藤俊男	新シュネーダー記念図書館完成。高等学校第1回海外研修(7月)。
1985(昭和60)年		大学整備計画案(教養学部泉校地移転など)公表(1月)。旧シュネーダー記念東北学院図書館を大学院校舎に改装(11月)。幼稚園新園舎完成(12月)。

年 代	歴代役職者	事 項
1986(昭和61)年		創立100周年記念式典挙行。米国フランクリン・アンド・マーシャル大学と国際教育交流協定を締結。榴ヶ岡高等学校北校舎増築完成（3月）。
1987(昭和62)年	倉松功	中学・高等学校長に宗方司就任（4月）。榴ヶ岡高等学校長に半澤義巳就任（4月）。 中学・高等学校体育館武道館完成（12月）。
1988(昭和63)年		大学泉キャンパス完成、大学教養部を移転。榴ヶ岡高等学校礼拝堂増築完成（3月）。幼稚園長に橋本清就任（4月）。
1989(平成元年)	協田睦生	泉キャンパスに教養学部（教養学科人間科学専攻・言語科学専攻・情報科学専攻）を設置。幼稚園長に新妻卓逸就任（4月）。『東北学院百年史』発刊（5月）。
1990(平成2)年		大学院工学研究科土木工学専攻修士課程を設置。
1991(平成3)年	出原荘三	多賀城キャンパス1号館完成（3月）。榴ヶ岡高等学校部室棟完成（3月）。中学・高等学校長に武藤俊男就任（4月）。中学・高等学校社会科教室完成（7月）。
1992(平成4)年		大学院工学研究科土木工学専攻博士後期課程を設置。榴ヶ岡高等学校柔道・剣道場および校舎増築完成（4月）。第12代理事長に情野鉄雄就任（6月）。法学政治学研究所を設置。
1993(平成5)年	杉本勇	工学部2号館完成。中学・高等学校移転決定（3月）。
1994(平成6)年		大学院人間情報学研究科人間情報学専攻修士課程を設置。
1995(平成7)年	赤澤昭三	榴ヶ岡高等学校を男女共学制に移行。第8代院長に田口誠一就任。第3代大学長に倉松功就任（4月）。人間情報学研究所を設置。
1996(平成8)年		大学院人間情報学研究科人間情報学専攻博士後期課程を設置。榴ヶ岡高等学校家庭科実習棟完成（2月）。榴ヶ岡高等学校長に協田睦生就任（4月）。榴ヶ岡高等学校第1回ホームカミングデー実施（9月）。
1997(平成9)年	星宮望	大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻修士課程、アジア文化史専攻修士課程を設置。工学部運動場等新設。
1998(平成10)年		幼稚園長を田口誠一院長兼任（4月）。高山セミナーハウス閉鎖。
1999(平成11)年	松本芳哉	大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻博士後期課程、アジア文化史専攻博士後期課程を設置。大学設置50周年記念式典を挙行。青根セミナーハウス閉鎖。第13代理事長に田口誠一就任（4月）。
2000(平成12)年		文学部英文学科、経済学部経済学科と商学科に昼夜開講制を導入。文学部二部英文学科と経済学部二部経済学科は募集停止。幼稚園長に長谷川信夫就任（4月）。土樋キャンパス8号館（押川記念ホール）・体育館完成（9月）。大学第1回ホームカミングデー（同窓祭）開催。大学設置50周年記念事業（講演会・シンポジウム・シンボルマーク決定）を実施。仙台市宮城野区小鶴地区に中学・高等学校移転校地取得（3万1千坪）。
2001(平成13)年		文学部基督教学科をキリスト教学科に、経済学部商学科を経営学科に、教養学部教養学科言語科学専攻を言語文化専攻に改称（4月）。東北学院資料室開設（5月）。東北学院シーサイドハウス完成。
2002(平成14)年	久能隆博	工学部機械工学科を機械創成工学科に、電気工学科を電気情報工学科に、応用物理学を物理情報工学科に、土木工学科を環境土木工学科にそれぞれ改称。大学院経済学研究科に経営学専攻修士課程を設置。中学・高等学校長に出原荘三就任。榴ヶ岡高等学校長に杉本勇就任（4月）。
2003(平成15)年		第14代理事長に赤澤昭三、第9代院長に倉松功就任（4月）。幼稚園長に長島慎二就任（4月）。東北学院同窓会100周年記念式典挙行（11月）。
2004(平成16)年	永井英司	法科大学院・総合研究棟完成（2月）。第4代大学長に星宮望就任（4月）。中学・高等学校長に松本芳哉就任（4月）。大学院法務研究科法実務専攻専門職学位課程（法科大学院）を設置（4月）。榴ヶ岡高等学校校舎増築（4月）。



年 代	歴代役職者	事 項
2005(平成17)年	 平河内健治	<p>中学・高等学校新校舎完成（仙台市宮城野区小鶴）（1月）。東北学院同窓会館閉館（3月）。文学部史学科を歴史学科に、教養学部教養学科人間科学専攻、言語文化専攻、情報科学専攻を教養学部人間科学科、言語文化学科、情報科学科に改組し、教養学部地域構想学科を新設（4月）。</p> 
2006(平成18)年	 平河内健治	<p>工学基礎教育センター完成（3月）。工学部機械創成工学科を機械知能工学科に、物理情報工学科を電子工学科に、環境土木工学科を環境建設工学科に改称（4月）。榴ヶ岡高等学校長に久能隆博就任（4月）。創立120周年記念式典挙行（5月）。</p>
2007(平成19)年	 湯本良次	<p>中学・高等学校新寄宿舎完成。ハイテク・リサーチセンター完成（3月）。第10代院長に星宮望就任（4月）。中学校・高等学校長に永井英司就任（4月）。秋田オープンキャンパス開催（7月）。多賀城市と連携協定締結（11月）。</p>
2008(平成20)年	 平河内健治	<p>第15代理事長に平河内健治就任（6月）。榴ヶ岡高等学校体育館・管理棟完成（9月）。教養学部創設20周年記念式典挙行・同窓会設立。</p>
2009(平成21)年	 大橋邦一	<p>経済学部経営学科を経営学部経営学科に改組、経済学部に共生社会経済学科を新設（4月）。大学院経営学研究科（修士課程）を設置（4月）。幼稚園長を平河内健治兼任（4月）。榴ヶ岡高等学校創立50周年記念式典挙行（11月）。東北学院大学博物館開設（11月）。</p>
2010(平成22)年	 平河内健治	<p>バイオテクノロジー・リサーチ・コモン棟を開設（3月）。東北学院発祥の地に記念碑建立（10月）。</p>
2011(平成23)年	 平河内健治	<p>中学校・高等学校跡地に記念碑建立（3月）。文学部キリスト教学科を文学部総合人文学科に改組（4月）。幼稚園長に佐々木勝彦就任（4月）。</p>
2012(平成24)年	 松本宣郎	<p>榴ヶ岡高等学校長に湯本良次就任（4月）。工学部設置50周年記念式典挙行（11月）。</p>
2013(平成25)年	 平河内健治	<p>第5代大学長に松本宣郎就任（4月）。中学校・高等学校長に大橋邦一就任（4月）。幼稚園長に阿部正子就任（4月）。文学部史学科・歴史学科創設50周年記念式典挙行（11月）。</p>
2014(平成26)年	 平河内健治	<p>第16代理事長に松本宣郎就任（4月）。</p>
2015(平成27)年	 佐々木哲夫	<p>第11代院長に佐々木哲夫就任（4月）。法学部法律学科創設50周年記念式典挙行（5月）。</p> 
2016(平成28)年	 平河内健治	<p>ホーイ記念館完成（3月）。創立130周年記念式典挙行（5月）。東北学院旧宣教師館（デフォレスト館）が国の重要文化財に指定（7月）。</p>
2017(平成29)年	 大西晴樹	<p>工学部電気情報工学科を電気電子工学科に改称し、情報基盤工学科を新設（4月）。『東北学院の歴史』刊行（10月）。</p>
2018(平成30)年	 大西晴樹	<p>文学部に教育学科を新設（4月）。米国ランカスター神学校と国際交流協定締結（7月）。</p>
2019(令和元年)	 阿部恒幸	<p>教養学部創設30周年記念式典挙行（3月）。第12代院長に松本宣郎就任（4月）。第6代大学長に大西晴樹就任（4月）。中学校・高等学校長に阿部恒幸就任（4月）。榴ヶ岡高等学校創立60周年記念式典挙行（11月）。</p>
2020(令和2)年	 原田善教	<p>記念映画「東北学院の40年」完成（3月）。第13代院長に大西晴樹就任（4月）。第17代理事長に原田善教就任（4月）。幼稚園長に島内久美子就任（4月）。</p>
2021(令和3)年	 原田善教	<p>榴ヶ岡高等学校長に河本和文就任（4月）。</p>
2022(令和4)年	 平河内健治	<p>工学部設置60周年記念式典挙行（11月）。</p>
2023(令和5)年	 河本和文	<p>大学五橋キャンパス完成、大学工学部・教養学部を移転（4月） 五橋キャンパスに地域総合学部（地域コミュニティ学科・政策デザイン学科）・情報学部（データサイエンス学科）・人間科学部（心理行動学科）・国際学部（国際教養学科）を設置（4月） 中学校・高等学校校長に帆足直治就任（4月）</p>



木村勝七郎遺族、木村洋一郎氏所蔵

①加藤大策（金平）

宮城県生まれ。1919（大正8）年東北学院専門部文科卒業。1922（大正11）年大阪市立盲啞学校に奉職。1936（昭和11）年、大阪ダイヤモンド研磨会社に就職した生徒たちを助けるため、教員を辞し同社に入社。聾社員の手話通訳をする傍ら、自身も研磨工として作業に従事した。

②高橋 潔

宮城県生まれ。1913（大正2）年東北学院専門部文科卒業。1914（大正3）年市立大阪盲啞学校に奉職。盲聾分離の翌年の1924（大正13）年に大阪市立聾啞学校の校長に就任し、1952（昭和27）年の退職まで29年間校長を務める。手話禁止の時代、手話法を擁護し「手話の父」と呼ばれている。

③櫻田 茂

1919（大正8）年東北学院専門部文科卒業。同年春に市立大阪盲啞学校教啞部奉職。同年冬から1920（大正9）年まで休職し仙台歩兵に入営。1921（大正10）年から復帰し、1936（昭和11）年まで教職や日曜学校に奉じた。後半は、首席（現在の教頭に当たる）として学校運営の補佐を務めた。

④木村勝七郎

1930（昭和5）年東北学院神学部本科卒業。1935（昭和10）年大阪市立聾啞学校奉職。牧師でもあった木村は、大阪聾啞基督教会の奉仕のため、櫻田や大曾根と主に教職と日曜学校の運営に励んだ。1944（昭和19）年、応召に伴い退職。

⑤内田 豊

1927（昭和2）年東北学院専門部師範科卒業。1930（昭和5）年から1938（昭和13）年まで大阪市立聾啞学校奉職。1939（昭和14）年から朝鮮総督府済生盲啞部に転任。

⑥大曾根源助

宮城県生まれ。1919（大正8）年東北学院専門部文科卒業。1920（大正9）年大阪市立盲啞学校奉職。聾学校視察のため1929（昭和4）年に渡米し、ヘレン・ケラーと面会。ヘレンからの助言を受けて帰国後に「大阪市立聾啞学校式指文字」を考案。現在全国で普及している指文字がこれである。第7代校長に就任し、1957（昭和32）年退職。



利用案内

東北学院史資料センターは、広く一般の方々にも開放しております。

開室時間

月～金 9:00～17:00

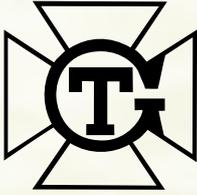
(土・日・祝祭日および大学の定める休業日は閉室)



学校法人 東北学院

発行日 2024 (令和6) 年3月1日
編集 東北学院史資料センター年報編集委員会
発行 学校法人 東北学院
〒980-8511
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
TEL.022-264-6538
<http://www.tohoku-gakuin.jp/>
印刷 株式会社 東北プリント

ISSN 2434-6314



表紙の写真

シュネーダー院長を囲む東北学院
同窓生の大阪市立聾唖学校関係者

1933（昭和8）年11月、シュネーダー院長は神戸での基督教教育同盟会出席のため大阪へ赴いた。当時、東北学院同窓生である高橋潔が大阪市立聾唖学校長を務め、大曾根源助、櫻田茂、加藤大策、内田豊が同校の教員として、また木村勝七郎が大阪聾唖基督教会で日曜学校長を務めていた。この写真はこの時シュネーダー院長が大阪市立聾唖学校を訪問した際の一枚。